



令和2年度 全国私立中学高等学校

全国私学教育研究集会秋田大会

研究集録

新しい時代のリーダーを育てる私学教育

主催 一般財団法人日本私学教育研究所

実施 新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会／秋田県私立中学高等学校協会

後援 秋田県／秋田市／日本私立中学高等学校連合会

目 次

発刊のことば	1
実施概要	2
大会役員等一覧	3
全体集会	4
開会式	5
秋田県私立学校活動紹介	9
報告	10
記念講演	13
部 会	16
私学経営部会	16
教育課程部会	29
特色教育部会	44
グローバル教育部会	61
参加者アンケート	77
参加者数	91
開催地・研究目標一覧	92
編集後記	96

発刊のことば

一般財団法人日本私学教育研究所所長 中川武夫

令和2年度全国私学教育研究集会秋田大会は、令和2年10月22日・23日の2日間、秋田県秋田市の秋田キャッスルホテルで開催され、全国から334名の教職員の皆様にご参加頂きました。

本大会は、秋田県、秋田市及び日本私立中学高等学校連合会の後援により、新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会、秋田県私立中学高等学校協会及び一般財団法人日本私学教育研究所が実施致しました。

令和2年は新型コロナウイルスの感染拡大により、社会全体に大きな影響を与えて、経済への被害は甚大なものとなりました。教育現場でも、3月の初めから多くの学校で休校となり、4月7日から1度目の国の緊急事態宣言が発令され、子どもたちの「学びを止めない」ために各校ではオンライン授業など様々な対策が講じられました。5月25日に緊急事態宣言が解除され、徐々に日常へと戻りはじめ、多くの学校が再開され、本大会につきましては、一時期は開催が危ぶまれましたが、未曾有の危機を乗り越えるため、今こそ全国の私立中学高等学校が一丸となって前進していきたいという思いから、大会の開催に向け準備を進め、全国の私立中学高等学校中等教育学校から334名の方々にご参加頂き、無事開催することができました。

初日の開会式では、吉田晋・当研究所理事長と松良千廣・実行委員長による挨拶、さらに公務ご多忙にもかかわらず、佐竹敬久・秋田県知事の代理で川原誠・秋田県副知事、穂積志・秋田市長にご臨席の上、ご祝辞を賜りました。最後に、摺河祐彦・近畿地区私立中学高等学校連合会会長から次年度の京都大会のご案内を頂き、開会式を終了致しました。

開会式後の全体会では、今回残念ながら、感染防止の観点からビデオ上映となりましたが、秋田県私立学校活動紹介として秋田県私立高等学校吹奏楽部・合唱部の生徒による合同演奏の披露、日本私立中学高等学校連合会及び当研究所から「教育政策と私学情勢について」をテーマに報告を行い、最後に、オンラインとなりましたが、公立大学法人国際教養大学の鈴木典比古・理事長・学長より「2500年を越えるリベラルアーツ教育～『個』の確立と私学の使命～」と題した記念講演を頂きました。

2日目は、私学経営部会、教育課程部会、特色教育部会、グローバル教育部会の4つの部会に分かれ、それぞれのテーマのもと、講演、実践発表、パネル・ディスカッション等が行われ、多大な成果を収めることができました。

この度、上記の研究成果等を集録にまとめました。各学校の今後の教育活動にお役立て頂ければ幸いです。

最後に、コロナ禍での開催となった本大会の成功は、講演・発表を頂いた方々、運営に携わって頂いた新潟県・東北地区と秋田県の私立中学高等学校の先生方と当研究所の役員、専門委員の先生方、全国から参加された先生方、また会場のスタッフの方々、すべての方々が一丸で感染拡大防止の対策を含めて、ご準備、ご協力を頂いた結果と確信しています。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

実施概要

- 1 研究目標 新しい時代のリーダーを育てる私学教育
- 2 会 期 令和2年10月22日(木)・23日(金)の2日間
- 3 会 場 秋田キャッスルホテル
- 4 参加人員 334名(募集400名)
- 5 基本日程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
						40	05	30		45	
10月17日 (木)				受付	開 会 式	全 体 会				教 育 懇 談 会	
						※	報 告	記 念 講 演			
10月18日 (金)		部 会		昼 食		部 会		閉 会 式	※は秋田県私立学校 活動紹介		

6 全体会

秋田県私立学校活動紹介 「秋田県私立高等学校吹奏楽部・合唱部合同演奏」

ノースアジア大学明桜高等学校 吹奏楽部
 秋田令和高等学校 吹奏楽部
 聖霊女子短期大学附属高等学校 吹奏楽部
 秋田修英高等学校 合唱部
 国学館高等学校 合唱部

報 告 「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会長 吉田 晋
 一般財団法人日本私学教育研究所 所長 中川 武夫

記念講演 「2500年を越えるリベラルアーツ教育～『個』の確立と私学の使命～」

公立大学法人国際教養大学 理事長・学長 鈴木 典比古

7 部 会

- 1 私学経営部会 新しい時代をリードする私学経営
～変容する社会への対応を考える～
- 2 教育課程部会 新しい時代に向けた私学の特色あるカリキュラム
- 3 特色教育部会 21世紀型教育に基づいた新時代のリーダー育成
- 4 グローバル教育部会 グローカルリーダーの育成を目指して
～グローバルとローカルを両立した人材育成～

大会役員等一覽

1. 大会役員（順不同）

吉田 晋	一般財団法人日本私学教育研究所	理事長
平方 邦行	富士見丘中学高等学校	理事長・校長
山中 幸平	一般財団法人日本私学教育研究所	副理事長
中川 武夫	工学院大学附属中学高等学校	校長
長塚 篤夫	一般財団法人山中学園	副理事長
鈴木 康之	学校法人山中学園	学園長
	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・所長
	蒲田女子高等学校	顧問
	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・全国集会総括責任者
	順天中学高等学校	校長
	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・全国集会副総括責任者
	水戸女子高等学校	理事長・校長

2. 実行委員・指導員（順不同）

委員長 松 良 千 廣	新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会	会長
	宮城県私立中学高等学校連合会	会長
	常盤木学園高等学校	理事長・校長
副委員長 江 畠 治 彦	秋田県私立中学高等学校協会	会長
	国学館高等学校	校長
委員 里 村 智 彦	青森県私立中学高等学校長協会	会長
	八戸聖ウルスラ学院中学高等学校	理事長・校長
	一般社団法人岩手県私学協会	会長
小田島 順 造	花巻東高等学校	理事長・校長
	山形県私立中学高等学校協会	会長
九 里 廣 志	九里学園高等学校	理事長・校長
	福島県私立中学高等学校協会	会長
森 涼	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校	理事長・校長
	新潟県私立中学高等学校協会	会長
上 野 順 治	日本文理高等学校	校長
折 原 順 悦	聖霊女子短期大学附属高等学校	校長
	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・所長
中 川 武 夫	蒲田女子高等学校	顧問
	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・全国集会総括責任者
長 塚 篤 夫	順天中学高等学校	校長
	一般財団法人日本私学教育研究所	理事・全国集会副総括責任者
鈴 木 康 之	水戸女子高等学校	理事長・校長

3. 運営総括委員・指導員（順不同）

委員長 折 原 順 悦	聖霊女子短期大学附属高等学校	校長	
委員 江 畠 治 彦	国学館高等学校	校長	
	高 橋 修	秋田令和高等学校	校長
	富 樫 義 明	秋田修英高等学校	校長
	山 田 芳 浩	ノースアジア大学明桜高等学校	校長

全 体 集 会

1 日 時 令和2年10月22日(木) 13時～17時

2 会 場 秋田キャッスルホテル 4階 放光の間

3 開 会 式

(1) 開会のことば

全国私学教育研究集会秋田大会 副実行委員長 江 畠 治 彦

(2) 主催者挨拶

一般財団法人日本私学教育研究所 理事長 吉 田 晋

(3) 実行委員長挨拶

新潟県・東北6県私立中学高等学校協会協議会 会長 松 良 千 廣

(4) 来賓祝辞

秋田県知事 佐 竹 敬 久 様
(代理 秋田県副知事 川 原 誠 様)
秋田市市長 穂 積 志 様

(5) 登壇者紹介

(6) 次期開催地区代表挨拶

近畿地区私立中学高等学校連合会 会長 摺 河 祐 彦

(7) 閉式のことば

全国私学教育研究集会秋田大会 運営総括委員長 折 原 順 悦

4 全 体 会

秋田県私立学校活動紹介 「秋田県私立高等学校吹奏楽部・合唱部合同演奏」

ノースアジア大学明桜高等学校／秋田令和高等学校／聖霊女子短期大学附属高等学校 吹奏楽部
秋田修英高等学校／国学館高等学校 合唱部

報 告「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会長 吉 田 晋

一般財団法人日本私学教育研究所 所長 中 川 武 夫

記念講演「2500年を越えるリベラルアーツ教育～『個』の確立と私学の使命～」

公立大学法人国際教養大学 理事長・学長 鈴 木 典比古

5 全体集会運営委員・指導員（順不同）

委 員 長 江 畠 治 彦 国学館高等学校 校長

副委員長 藤 田 誠 悦 国学館高等学校 教頭

委 員 石 井 潤 国学館高等学校 教諭

佐々木 史 子 秋田令和高等学校 教諭

松 井 智 秋田修英高等学校 教諭

佐々木 公 兵 ノースアジア大学明桜高等学校 教諭

飯 塚 留美子 聖霊女子短期大学附属高等学校 教諭

妹 尾 なつみ 聖霊女子短期大学附属高等学校 養護教諭

佐 藤 倫 生 秋田令和高等学校 養護教諭

開 会 式

【開会の言葉】

全国私学教育研究集会秋田大会 副実行委員長



江島 治彦

会場の皆様、秋田大会による
こそいらっしやいました。それ
ではこれから令和2年度全国私
学教育研究集会秋田大会を開
催致します。

【主催者挨拶】

一般財団法人日本私学教育研究所 理事長



吉田 晋

皆様こんにちは。今日はこの
秋田県に、このコロナ禍の中、
334名の皆様にお集まり頂きま
して、この大会が開催されます。
それに先駆けまして、開会式に

秋田県佐竹知事の代理として副知事の川村様
が、そして穂積秋田市長にもご来臨頂きまし
て、この会を盛り上げて頂いております。そ
してなんと申しましても、東北ブロックの松
良会長のもと、秋田県の私立学校の先生方
には本当にお世話になりました。ありがとうございました。現会長の江島先生を中心に、ま
たその前任の折原先生が会長の折から、準備
を始めて頂きまして、まさかのコロナという
状況にもかかわらず、これだけの先生方が
この秋田の地に訪問させて頂くことができました。私自身、この秋田の地に何回か訪れさ
せて頂き、江島先生のご先代に大変お世話にな
って、ご指導頂いた立場なのですけれども、
この秋田という街で、まだコロナの患者さん
も30数名しかいないというところに、我々が
大会を開催することに対しては、大変緊張感
を持って準備させて頂きました。そういう意
味では、今、東京ではここまでやりませんと
言うくらいに、このパーティション1つも毎
回、1人話すたびに全部消毒させて頂いて入
れ替えるというようなことも考えましたし、
入口では皆さんに検温をして頂いて、消毒を
して頂いてということで、間違ってもここか

ら発生することはないという体制を作りました。ただそのもとに、私は誇らなければいけ
ないことがあると思うのです。もしこれが大
学の団体の会であればこのような会はできて
いるでしょうか。これは中学高等学校の団体
だからできたことなのです。と申しますのは、
3月2日に総理大臣から学校の休校を指示さ
れました。私は、どこまで私立学校はやって
頂けるかなと思いましたが、なんと98%の学
校が自主的に3月2日からすぐ、休校を始め
て、そして、6月1日から再開ということに
なったわけですが、我々は努力してやりまし
たよね。最初の1週間は時差で半分ずつ等、
徐々に元に戻していき、基本的には7月か
らほとんど普通の体制で始められたと思いま
す。それには各学校が努力しました。後ほどお話
しさせて頂きませうけれども、文部科学省から
も10分の10の補助も頂きましたけれども、
それは私立高校以下がみんな子ども達の学力
を落としてはいけないと、常に子ども達の立
場に立って考えていかなければいけないとい
う思いのもとに、学校によっては教室の生徒
の1人1人の机にアクリルパネルを置く学校
もあれば、未だに2分の1で授業を行っている
ところもあれば、いろいろな工夫をして行
っているのです。だからこのように先生方にも
集まって頂けるのです。大学を見て下さい。
1年生でまだ顔も見ることがないという学生
がいるのです。それでいて自分達の学校の強
いスポーツだけはどんどん再会して、そこで
コロナが起きた。部活動でクラスターが起き
るくらいであるから、学校を再開できないと
言い訳をする。しかし高校以下はできている
ではないですか。それは私達の想いである
と思えます。是非そのようなことをご理解頂
きまして、秋田県は、今回少ない私立学校の中、
全校を休校にしてまで先生方に手伝って頂き、
今朝の運営会議でも70名、そしてこの場にも
80名以上の先生方に参加して頂いています。
この我々私学の想いが何が一番通じれば良い
かと思うのですが、本日、副知事にご臨席頂

いていますが、これを見て、今年の私学助成は考えなければいけないなと心底思っていました。私立学校は頑張っています。是非よろしくお願い致します。本日、明日の大会がより実りの大きいものになることを願ひまして挨拶とさせていただきます。本日は有り難うございました。

【歓迎の言葉】

全国私学教育研究集会秋田大会 実行委員長
松良千廣



今年は本当にいろいろな行事がなくなり、生徒たちを見ると本当にかわいそうだなと思っておりました。そのような中でこの大会が開催されることになったわけでございます。ずっと前からなまはげに会えるのかどうかを考えていたところでございます。本日初めて、新幹線のスイッチバックを体験された方もいらっしゃるかと思います。ミニ新幹線ということであるような新幹線になっているわけでございます。何しろ私立高等学校が5校という秋田県の皆様に本当に頑張ってもらいました。有り難うございます。コロナ禍ですので、フェースシールドなどで我々も感染防止対策を行いながらの大会ということでございますが、是非実りある大会になりますよう、一緒に作り上げて参りたいと思っておりますのでよろしくお願い申し上げます。

【来賓祝辞】

秋田県副知事 川原 誠 様



これだけ盛大な大会は久々でございます。先ほども吉田理事長からもお話がございましたが、大勢ではございますけれどもコロナ対策は万全に行っているというところでございまして、その上で、盛大に大会が開催されることに心からお祝い申し上げます。

また、皆様には日頃から教育行政の推進にご理解とご尽力を頂いております。学校現場におきまして、それぞれの建学の精神、それから独自の教育理念のもと、特色を生かした魅力ある教育活動を展開されておりますことに対し、改めて敬意を表したいと思います。

今年は新型コロナウイルスで、3月から多

くの学校が臨時休校となり、通常の授業はもとより、部活動あるいは修学旅行等の学校行事にも多大な影響が生じました。ICTを活用したオンライン授業では、夏休みの短縮というようなことによる授業時間の確保、時間帯を調整した分散登校など、様々な対策を取られたということを知っているところでございます。この機会に、皆様それぞれが実施した対策について情報交換をして頂くということと、教育のさらなる向上ということを、この場を大いに活用して頂ければと思っております。

「新しい時代のリーダーを育てる私学教育」ということが今回の研究目標と伺っております。人工知能いわゆるAIでございます。このようなものが発達致しまして、産業も非常に細分化、高度化してきております。また、働き方も大きく変化をしております。Society5.0の時代というものが到来、あるいは今後ますますそのような波が来ると思われますので、皆様それぞれの学校の教育理念に基づいた、新たな社会を牽引する人材の育成に大いに期待をしております。

実りの秋でございます。秋田県は食の宝庫でございます。今が旬のブドウ、リンゴといった果物、キノコ、栗などの山の幸を初め、比内地鶏やあきたこまちの新米で作ったきりたんぼ鍋、稲庭うどん、いぶりがっこなど自慢の郷土食が多くございます。夜は美酒王国秋田の日本酒をたしなみながら、明日までの2日間の日程をお過ごし頂ければと思っております。

結びでございますけれども、本大会のご盛会とお集まりの皆様のご健勝を祈念致しますとともに、私立学校のますますの発展をご期待申し上げます。私からのお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



秋田市長 穂積 志 様

まず、令和2年度全国私学教育研究集会秋田大会が大勢の皆様参加の下、盛大に開催されますことをお慶び申し上げます。

2月以来、全国大会が秋田市で開催されるのは初めてでありまして、私も緊張しながら、

また喜んでおります。大勢の皆様が秋田にいらして頂きまして、心から歓迎申し上げます。同時にこの大会を開催するにあたって、実行委員長の松良先生、副委員長の江島先生、いろいろな方が相当悩んだのではないかなと思っておりますが、この大会を開催して頂けるという判断をされたこと、そして、万全なる対策をされていることに敬意と感謝を申し上げたいと思っております。

私は私学との関係は、幼稚園のPTA会長をやっておりましたので、私学振興ということで、そのときにいろいろお世話になりました。そのような中で、県当局あるいは県教育委員会に要望活動を行ってきたところでありまして、当時、幼稚園教育は秋田市には権限がございませんでした。担当する課もありませんでしたけれども、市長に就かせて頂いて、私学を、幼稚園を、保育所は秋田市の管轄ですけれども、教育となると市の管轄ではなくて、いきなり県の管轄になります。そのような中で、市も担当窓口をつけさせて頂いて、今は子育て支援、あるいは子どもの教育ということで第一子から幼稚園を無償にさせて頂いております。言ったことを行わなければ罰が当たると考え、そのような形にさせて頂いております。また、娘はノースアジア大学明桜高等学校にお世話になりました。今は薬剤師として働いておりますが、私は県立でしたので、そこで私学に関わりました。私立高校の大学の推薦入学はすごいですね。優秀な大学から様々な形で枠を頂いております。その意味では私学の特色ある、あるいは努力されている姿を改めてそこで認識させて頂いた次第でございます。これから子どもが少なくなってくる時代に入って、私学の経営も大変だと思いますし、同時に、選んで入学頂いた子ども達をいかに伸ばしていくかということも先生方も相当の責任を持って精進されているのであらうと思います。行政としても寄り添いながら、様々な援助ができるように共同で頑張りたいと思っております。

先ほど副知事からお話がございましたが、秋田も紅葉が見所となりました。山の方もずいぶん色づいて参りました。この大会で研修を積まれ、その後は是非心のリフレッシュを頂ければと思います。またお酒も去年の新米を仕込んで、今、初絞りが出て参りました。秋

田には37の酒蔵がありますので、少しほろ酔いになりながら、普段のストレスを解消して頂ければと思います。

この大会が盛大に開催され、実り多きものとなりますようご祈念申し上げます、皆様のご健勝、ご多幸をお祈りして、粗辞であります、秋田市を代表して歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

【祝電披露】

秋田県私学振興議員連盟

会長・秋田県議会議員 北林康司 様

全国私学教育研究集会秋田大会が初めて本県で開催されますことを心よりお慶び申し上げますとともに、歓迎致します。今年は新型コロナウイルス感染症により臨時休校を余儀なくされ、学校運営に苦慮されていることと思っておりますが、皆様は建学の精神により、この困難を乗り越え、未来の私学教育の発展につなげられることと期待しております。秋田県私学振興議員連盟は私学教育の振興発展を微力ながら応援して参ります。秋田は風光明媚な自然に恵まれ、おいしいものがたくさんありますので、県外よりご参集の皆様におかれましては、時間の許す限り満喫して頂けると幸いです。最後になりますが、日本私学教育研究所のますますのご隆盛と吉田理事長、中川所長をはじめ、皆様のなおいっそうのご活躍とご健勝をお祈り致します。

その他、衆議院議員 金田勝年 様、自由民主党副幹事長・衆議院議員 富樫博之 様、衆議院議員 御法川信英 様、参議院議員 石井浩郎 様、参議院議員 進藤金日子 様からも祝電を頂きました。

【次年度開催地区代表挨拶】

近畿地区私立中学高等学校連合会会長
摺河祐彦



今回の全国私学教育研究集会は近畿地区が担当となりまして、京都府私立中学高等学校連合会の先生方が中心となって、令和3年10月21日、22日の両日に京都府京都市で開催を予定しています。テーマは「世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～」でございます。記念講演は藤原定家の流れをくみま

す冷泉公子先生に「京都の文化」というテーマでお話頂くことになっています。冷泉先生は冷泉家という歌道の継承者でございまして、和歌を指導する傍ら、広く文化活動にも取り組んでおられます。昨日の関西のNHKの朝の番組で、羅生門を復興するというので、インタビューをされていらっしゃるところをちょうど、見たところでございます。そのように多方面で活躍をされている先生ですので、私たちにとって有意義な、そして興味深いお話を頂けるのではないかなと思っております。また、5つの部会につきましては、コロナ対策ということで、2つのホテルに分散して、密を避ける形で実施するというように、京都の先生方がい

ろいろ考えて取り組んでおりますので、どうか、安心して、定員が600名でございますので、多くの先生方にご参加賜りますようお願いを申し上げます。京都大会のご案内のご挨拶にかえさせていただきます。よろしくお願い致します。

【閉式の言葉】

全国私学教育研究集会秋田大会 運営総括委員長

折原順悦



なまはげがコロナを駆逐し、この大会を成功裏に導くことを祈念しまして、第68回全国私学教育研究集会秋田大会開会式を閉じます。



秋田県私立学校活動紹介

「秋田県私立高等学校吹奏楽部・合唱部合同演奏」（ビデオ上映）

ノースアジア大学明桜高等学校 吹奏楽部
秋田令和高等学校 吹奏楽部
聖霊女子短期大学附属高等学校 吹奏楽部
秋田修英高等学校 合唱部
国学館高等学校 合唱部

私たちは日々、吹奏楽活動を通して、音楽力と人間力を探求し活動しています。本日は、私たちの活動と秋田県をテーマに3曲用意させて頂きました。1曲目は北秋田市米内沢出身の成田為三の「浜辺の歌」です。この名曲のメロディをもとに本校3年生の生徒が吹奏楽版に編曲致しました。彼は作曲を得意としており、高校在学中に50作品を超える作・編曲作品を手掛けました。2曲目は秋田市が生んだ作曲家、天野正道の「鼓響・・・故郷」より、第3楽章です。この「鼓響・・・故郷第3楽章」は秋田の代表する祭りの竿灯囃子が出てきます。この竿灯囃子と吹奏楽がコラボレーションする賑やかな作品となっています。3曲目は秋田県民歌です。日本の三大県民歌というと、長野県の「信濃の国」、山形県の昭和天皇が作詞したこと有名な「最上川」、そして成田為三が作曲した「秋田県民歌」です。秋田県民は誰もがこの県民歌を歌えるという、珍しくも、誇らしい習慣を持っています。本来であれば、この会場で各校吹奏楽部の選抜メンバーと秋田県の私立学校教員全員がこの秋田県民歌を歌う予定でしたが、コロナ禍の影響でVTRに納めさせて頂きました。皆様のお手元に秋田犬を表紙に秋田県民歌の歌詞を載せたプリントが用意されております。是非、秋田の魅力の詰まったこの歌詞をご覧になりながら、鑑賞して頂ければと思います。（ノースアジア大学明桜高等学校吹奏楽部 顧問 石崎聖也）



「秋田県民歌」

作詞：倉田政嗣
補作詞：高野辰之
作曲：成田為三

一
秀麗無比なる 鳥海山よ
狂瀾吼え立つ 男鹿半島よ
神秘の十和田は 田沢と共に
世界に名を得し 誇りの湖水
山水皆これ 詩の国秋田

二
廻らす山々 霊気をこめて
斧の音響かめ 千古の美林
地下なる鉱脈 無限の宝庫
見渡す広野は 渺茫霞み
黄金と実りて 豊けき秋田

報 告

「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会 会 長 吉 田 晋

本大会のテーマは、「新しい時代のリーダーを育てる私学教育」であり、私たち私学が中心となって、21世紀を担う子どもたちを育成してきていると自負している。

近年の学校数、生徒数の推移を見ると、学校数は変わらないが、中学校、高等学校ともに、私学の生徒数の割合は増加している。今後、この割合をどのように維持していくかが課題である。出生数の推移を見ると、2016年以降100万人を下回って毎年減少している。子供の数が減少し、私学が廃校になればその学校の持つ建学の精神が失われる。これは私学にとって大変な危機である。



直近十数年間の私学助成の経常費補助の推移では毎年1.1から1.2%という形で上がっている。しかし、高等学校の各都道府県の順位を見ると、低い順位が続く県があるなど、都道府県間で大きな格差がある。

令和2年度の予算で一番大きいのは第1・2次補正予算の私学関係である。学校再開に向けた支援として、感染症対策、学習保障等の支援経費が48億円計上された。令和3年度概算要求の教育研究環境の整備については、教室内の換気やトイレのドライ化など、学校の衛生環境の改善を支援することにより、学校のクラスターリスクを低減するためとバリアフリーを進めること、さらに、近い将来フロンガスが使えなくなり、既存のエアコンを交換する学校があることから、302億円プラス249億円の要求がなされた。

ICT環境の推進事業とGIGAスクール構想の実現に対し、令和元年度の補正予算は2,318億円の内、私学は119億円である。1人1台端末における私立学校への助成金は上限4.5万円で2分の1。しかも、補助は小・中学校が対象であり、高等学校は含まれていない。高等学校は学校ネットワーク環境の全校整備で71億円の2分の1が出るのみである。ICT補助は、今年は10億円しかなかった。一昨年と昨年は23億6,000万円であり、2分の1補助を想定していたが、希望が多く最終的には3分の1補助となった。端末の費用について、私学の2分の1補助の残りの2分の1は保護者が払う。それでも、コンピューター1台当たりの児童生徒数は、私学の方がこのコロナ禍で増えた。それは、保護者と先生方の子どもたちの学力を低下させてはいけないという強い思いのおかげである。休校要請期間中に、オンライン授業でも双方向型の授業を行い、子どもたちの学力を下げないように必死になったのが高等学校以下の私学である。

令和3年度の大学入学共通テストの日程は1月16、17日の1回目だけでなく、30、31日の2回目をつくったが、実際の共通テストの利用者数は、1回目を希望した高校3年生は44万7,673人、浪人生を含めると553万1,118人だ。2回目は、789人だ。英語4技能試験の在り方、記述式試験の在り方

については、ともに導入が見送られ 1 年間かけて検討することになった。2025 年からの新テストは、再来年から始まる高等学校の新学習指導要領を踏まえた試験であり、各学校は教育課程を変えてくるだろう。2021 年 4 月までには、ある程度の方向性を示さないといけない。しかも、今年の大学入試で既に、私立大学の大半は総合入試（推薦入試）で英語 4 技能試験を使っている。

今、新しい時代の初等中等教育の在り方について、中央教育審議会で検討している。概要は、現在の学校教育の様々な問題を解決し、Society5.0 の時代に合った教育、学校、教師の在り方を検討するという事で 4 つの項目について諮問がなされ、ワーキンググループのまとめが出された。例えば、「高等学校を取り巻く現状と課題認識においては、高等学校には多様な入学動機や進路希望、学習歴、背景を持つ生徒が在籍しており、多様なニーズに応じた学びの実現が必要だ」とあるが、それを全て一律に教育するのは不可能である。そして、「産業社会や社会システムの激変、少子化の進行等の社会経済のありようを踏まえた高等学校教育の在り方の検討」という中に、それらも含まれるだろうと思っている。私学は高等学校の役割をしっかりと果たしている。各学科に共通して取り組むべき方策として、「現代的な諸課題に対応し、20 年後・30 年後の社会像を見据えて必要となる資質・能力の育成」とあるが、我々は「新しい時代のリーダーを育てる私学教育」として既に行っている。ここで一番の問題は、スクールミッションの再定義、スクールポリシーの策定である。私立学校にとって、スクールミッション、スクールポリシーは建学の精神であり、それ抜きには成り立たない。公立学校が今、特化した学校を次々に作り、そこにスクールミッションやスクールポリシーを取り入れれば、それは私学化である。

普通科の弾力化、大綱化のためには、教育課程を弾力化する必要がある。今の教育課程の中では、硬直的な科目主義的傾向が強固である。今回、学習指導要領を改訂する際に打ち出した、教科横断的な学びというようなものは立ち消え、また教科主義になった。そこを変えない限り、普通科改革はできない。また、普通科の多様化追求については、私学はすでに、様々なポリシーに基づいて、普通科の中に類型やコースをつくる等の取り組みをしている。

最後に「令和の日本型学校教育の構築を目指して」という中間まとめが出ている。教育再生実行会議の提言したことに対して、予算がつけられないと、保護者負担を増やすだけだ。日本の私学が、世界に誇る私学として、21 世紀を担う新しい時代のリーダーを育成できるよう、協力して頑張っていきたい。

一般財団法人日本私学教育研究所 所 長 中 川 武 夫

9 月半ば、現役中高生による中学校説明会が開かれた。この説明会は、東京のある私立高等学校の生徒有志が呼びかけ、首都圏の高校 10 校が連携し、Zoom で行われた。生徒たちが、自分の学校の生徒募集用パンフレットや動画等では、自分たちの魅力を発信できていないと考え、自分たちで説明会を開き、自分たちの学校の魅力をもっと発信したいという純粋な気持ちで行われた。この説明会は、申し込みが始まった途端に応募が殺到し定員が直ぐに埋まった。生徒たちは、機会があればまたやりたいと言っている一方で、教員からは、子どもたちが純粋に学校の宣伝をしてくれることは非常にありがたいけれども、何かトラブルがあると心配だという声もあった。このような新しい事象は非常に画期的なことだ。



オンライン教育を行うための ICT の環境、教育を推進するために、現場の教員の技量が問われることになってきた。一部の教員は詳しいけれど、一部の教員はまったくできないというようなことがあると思う。学校としては、まず、この不得手な先生方のフォロー体制を整える必要がある。

休校期間中の学校のタイプが、私の聞き取りをした範囲では、ABC の 3 つに分けられると思った。A タイプは、ICT 教育・活用がかなり進んでおり、日ごろから ICT の機器の扱いには教員も生徒も慣れていたため、すぐに適応し、様々な教育を展開した。大変すばらしいが、残念ながら数的には非常に少なかった。次に B タイプは、新型コロナウイルス感染症が終息したら元通りの体勢に戻りたいという学校だ。休校期間中の取り組みもうとしていたことを教員の大半が反対し進まなくなってしまうというタイプで、これが最も多く見られたタイプだ。最後に、C タイプは、実際に取り組んでみたら大変おもしろかったのもっと進めよう、今までやりたくてもできなかったことができるようになったという学校全体を挙げての体制、いわゆるチーム学校ができあがったタイプだ。そのような学校も少数ながら出てきた。今後は、B タイプを C タイプに、C タイプを A タイプに、A タイプはさらに高みを目指して変化を遂げていかなければならない。特に B タイプを変えることが一番の課題だ。私の考えでは、とりあえずやってみようという好奇心が強めの先生がカギになる。そういう先生が何か始めると、周りの先生が、おもしろそうだからと仲間が増えていくことがある。その先生方を励まし、職員全体のトレンドにするような変化を遂げなければならない。

次に、コロナによる社会の枠組みの変化とともに、学校の枠組みも大きく変わってきた。この中で一番大きな変化は、教員の立ち位置と感じている。教員以外で学校の仕事をする、スクールサポートスタッフを増強していくということで、国の補正予算がつき、学校の中で分業が進んでくると、当然、教員は本来の仕事である授業をしっかりと行ってほしいと言う声が強くなるだろう。そして、教員の役割はファシリテーターに変わることが求められている。ファシリテーターは、一方的に授業をやっている時に比べ広い知識と深い知識、見識が必要になる。教員は今まで以上に真剣に勉強しなければ、教員としていられない時代が、そこまで来ている。さらに、日本の先生にはあまり見られないスタートラインから生徒たちを励まし、応援して、生徒をやる気にさせる方法と、これまでの効率よく知識を教えこむ方法の 2 つをミックスして、良い変化を起こすことが必要になるだろう。そのことを各学校が考えていかなければならない。

最後に、著作権の問題だ。入試の過去問を配布する際、二次利用ということで著作権料が発生する。平成 16 年に著作権利用等に係る教育 NPO（以下、教育 NPO）という組織を立ち上げ、著作権にかかる手続きの代行をしてきた。現在全国の多くの学校がこれに加盟し、入試問題の二次利用について、許諾申請を代行した。しかし、様々なトラブルも発生している。教育 NPO ではなんとかトラブルを水際で食い止めたいと、様々な情報の提供をしている。オンラインで著作物の転送を行うと、これは許諾が必要で著作権料が発生する。オンライン授業を円滑に行うために、文化庁が主導し一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会 SARTRAS（以下、サートラス）という団体ができ、様々な検討を行い、オンライン授業で一定のルールを守れば、著作物の利用料が掛からず、許諾も不要という形を作ろうとしている。ただし著作権を持っている団体のために、それに参加するためには年額の補償金を出すことになった。令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の関係で補償金は請求されないが、来年の 4 月 1 日から、サートラスが補償金の請求をすることになり、先日、原案が発表された。この問題についても今後対応を考えていく必要がある。

記念講演

「2500年を超えるリベラルアーツ教育-「個」の確立と私学の使命-」

公立大学法人国際教養大学 理事長・学長 鈴木 典比古

2500年前というと、中国で孔子が儒学を説き、インドで釈迦が仏教を説いた時期である。その時、ギリシャではリベラルアーツ教育が行われた。リベラルアーツはラテン語のアルテス・リベラーレスが語源である。アーツは芸術・美術等を指すが、当時は人間の体を使って行う運動や体育を表した。ギリシャ・ローマ時代の都市国家には自由市民という階級があった。都市国家が乱立する中、自由市民が1つ1つの都市を主導した。その自由市民をリベラレスと言う。そのため、リベラルアーツは現在とは違った意味で、アルテス・リベラーレス、都市国家における自由市民による行動、行政、都市国家防衛等を意味した。リベラルアーツ教育の2500年の歴史はギリシャ・ローマ時代を超え、中世のヨーロッパへ続き、中世では基督教の新約が指導的な教育になったが、その新約とともに中世を生き延び、近世のルネッサンスを通じて、現在のようなりベラルアーツへと脱皮を遂げた。さらに、ヨーロッパからアメリカへ渡り、アメリカの教育の中心となった。特にアメリカの大学教育は、現在でもリベラルアーツが主体である。リベラルアーツを教養と日本語訳したのは西周である。戦後の大学教育の改革を通じ、東京大学の教養学部や国際基督教大学の教養学部ができ、リベラルアーツ教育が行われた。その後、1991年の大学教



※記念講演は、新型コロナウイルス感染症対策のため、参加者はスクリーン画面で講演を視聴しました。

育改革で、多くの大学が教養学部や教養部を作った。では、国際教養大学はなぜ秋田で始まったのか。資源的にも人材的にも大都市から離れたところでリベラルアーツの教育を始めることは非常に大きな意味があった。これが大都市で始まっていれば大きな大学群に埋没し、注目を浴びることはなかった。国際教養大学の強みは3つある。1つ目は「英語」を学ぶのではなく「英語で」学ぶのだということ。ディスカッションを含めて授業はすべて英語で行われている。2つ目は、国内外から集まる人的資源の多様性。定員が1学年175名、4学年700名を超える規模で、そのうち海外からの学生が4分の1の約200名。また3年次の一年間の海外留学は卒業に必要な要件である。3つ目は、学外団体等との様々な連携協力関係の構築。このような特徴は、大きな都市では埋もれて発揮できず、認識されない。秋田にあることで地域の特性、地域との連携がある。本学は2004年に開学し、16年経った。若い大学だが、この間に文部科学省等の大学の世界展開力強化事業、経済社会を牽引するグローバル人材の育成事業、スーパーグローバル大学創成支援事業の3つの大型補助事業を獲得した。

現在、わが国の高等教育におけるグローバル人材育成の先駆者として、比較優位性を持っているが、国際教養の冠を付けた学部は増えている。この状況の中で、リベラルアーツ教育を核として、時代状況に弾力的に対応する教育を行うため、来年度から応用国際教養教育、Applied International Liberal Arts (AILA) という教育手法を開始する。

アルテス・リベラーレスについて、アルテスとは一般的に広い技芸を意味する学問の総論としての学問・芸術・技術のことであり、都市国家の統合と運営に当たる自由市民のエリート教育であった。当時、教師は他の職業と比べて一段低く見られた。古代社会では人からお金をもらうことは下品とされていたためである。当時、学生から授業料を取ることはお金を貰うということに通じたのである。リベラルアーツでは体育と音楽が重要とされた。体育は肉体の完成を目指し、音楽は神々の世界を体感することを可能にすると考えられた。体育と音楽により精神と肉体の調和的・全人的発達(The Whole Person Education)を目指すとされた。全人的とはリベラルアーツの別の言葉で、全人的な教育の起源は体育と音楽と言われる。さらに、ギリシャでは教育の基礎としての数学が重視された。この、体育と音楽の2つの分野をマスターした理想型として出てきたのが古代オリンピック選手である。オリンピックがギリシャ・ローマを通じて1000年もの間、実施されたのは、このアルテス・リベラーレスが重視されたからである。アルテス・リベラーレスは後年、7分野に分けられ、それを統合することが教育の目的とされた。基礎的な3科目は文法、修辞学、弁論術。上級の4科目は数学、音楽、幾何、天文学。この7科目を、自由7科と言い、学問の体系として1000年以上存続した。その後、様々な学問が出たが、この基本の構造は変わっていない。

キリスト教とギリシャ・ローマ時代の多宗教の共存は1世紀から5世紀末まで続き、その後、キリスト教のローマ教会の権威が確立し、多宗教は後退した。多宗教を基盤に持つギリシャ・ローマ時代の自由7科は神学の下に位置付けられた。この経緯を経て、現在の学問体系が成立した。特にアメリカは、今でもリベラルアーツ教育が重視され、学部から修士課程への進学のためには、基礎科目として必修である。これに対し、ドイツの大学教育は、18世紀から19世紀にプロイセンが後進性脱却のために早期の段階から専門教育を行い、後進性を脱却しようとした。日本もプロイセンの教育制度を模倣したのである。明治以降の大学制度のモデルはドイツであったため、大学初期の段階から専門教育に特化した。リベラルアーツ教育が大学一般教育課程に取り入れられたのは第二次世界大戦後で、東京大学、国際基督教大学の教養学部も戦後教育の中で本格化した。

次に、私学の歴史である。米国では、ハーバード大学、スタンフォード大学、ニューヨーク大学、シカゴ大学等、主要な大学は全部私立で、しかも基本の学部は神学部だった。従って、私学こそ大学のあり方の先駆者であった。州立大学も続々とでき、教育の競争をしているが、やはり

アメリカの大学の基本は私立大学にある。アメリカの大学の学部教育は自由7科を基礎とするリベラルアーツであり、専門教育は大学院で行われる。一方、日本のリベラルアーツ教育は、大学院進学による専門教育を前提としていない。学部教育において様々な知に触れ、汎用的な能力を養うということが日本のリベラルアーツの目的である。日本の学部教育では3つのタイプのリベラルアーツ教育が行われている。1つ目は後期の専門教育、専攻を決めること、2つ目は4年間を通じて教養教育を行うこと、3つ目は学際系、専門分野を持ちながらも複数の学問分野を横断的に学ぶタイプである。日本でリベラルアーツを行う大学が増えたきっかけは大学の大綱化(1991)だが、これにより日本の大学教育の内容は変化してきた。では、海外の大学はどうか。2010年から海外の高等教育機関は活発に海外進出を始めた。海外留学は教材としての学生の輸出入に相当する。次の段階では、海外に分校を作り、教育の海外展開が行われるようになった。日本の大学では、あまり盛んではないが、アメリカやヨーロッパなどの大学は、盛んに海外に分校を開設している。さらに、オンライン世界配信が出てきた。教育自体が世界中に配信され、物理的な展開ではなく、情報の世界展開という時代に入った。2009年の世界の大学生数は1億7,000万人だったが、2020年の世界の大学生数は2億9,000万人に増えている。2009年の高等教育主要国は、中国・インド・アメリカ・ロシアの4カ国で全世界の大学生の45%を占めていた。2002年から2009年まで全世界の大学生は5,500万人増加し、そのうちのほぼ半数の2,600万人は中国とインドで増加している。大学進学者が最も増加したのは中国で、進学率は2020年には38%に増加した。大学生数は2020年のデータで、中国の3,700万人、インド2,800万人、アメリカ2,000万人、ブラジル900万人、インドネシア780万人であり、上位5カ国で1億人近い。しかし、2020年以降は減少する国が多く、中国・ロシア・ドイツ・韓国・日本でも減っている。日本は元々少ないが、20年、30年後に国力を形成する人口が減っていくため、真剣に考えなければいけない。

次に、大学生の国際間移動である。2009年には世界の全大学生の2%の350万人の学生が留学などで全世界を巡っていた。現在も2%前後が留学生として国際間を移動している。特にEU域内の大学生の移動は活発である。これはエラスムス計画によるものである。エラスムス計画は長期的な教育計画で、大学生が2つ以上の大学で単位や学位を取ることを奨励している。英語による教育の科目開講が中心になり、英語が世界の教育言語として使われることがはっきりしてきている。日本も6,000人ほどの学生がエラスムス計画に招待されている。

2020年の高等教育主要5カ国について、アメリカ・イギリス、オーストラリア等の240の大学が海外でBranch Campusを設置運営している。進出先は中近東が中心だったが、最近では極東の地にも進出してきている。例えば、筆者が学長を務める国際教養大学もその出発点はミネソタ州立大学である。アジアにおける受け入れ国はEducation HUBを作り、Branch Campus構想とEducation HUB構想は相応じて、アメリカ、イギリス、オーストラリア等の大学の海外進出と受け入れを構成している。アラブ首長国連邦やカタール、香港は、Education Cityを物理的に作り、海外からの大学を集中させている。クアラルンプールはKuala Lumpur Educational City、パナマはCity of Knowledge、シンガポールはGlobal School House、韓国は済州Global Education Cityを作り、受け入れと海外進出が呼応し合っている。これは教育の海外直接投資である。

オンライン教育が始まっているが、2011年には2,100万人が受講した。これは、Massive Open Online Courses (MOOCs: ムークス) と言い、このMOOCsを発信する組織には有名大学で提供するedXや、Coursera等がある。現在、このように科目がオンラインで開講され、受講できるという利便性が生まれ、それを単位認定を検討し始める米の組織があるなどの海外進出がみられるようになった。MOOCsのアジアへの伸張が顕著であることとその意味を、われわれも考慮しなければいけない。

私学経営部会

IoT、AI などイノベーションが進展する中で、日本が目指すべき未来社会の姿として Society5.0 が提唱された。一人ひとりが希望を抱き、世代を超えて尊重し合い、活躍できる社会を実現することがその目標とされ、教育界も大きな改革が求められている。公立学校の私学化が進む中で、私立学校は、地域社会の特色を踏まえ、それぞれの建学の精神を新しい時代のニーズに対応させつつ高めていくことが求められている。また、学校の働き方改革への対応は、私学の経営者・教員にとって喫緊の課題である。さらに、度重なる自然災害などに対する学校の防災・危機管理等にも真剣に向き合わなければならない。

当部会では、私学が次の時代をリードし、変容し続ける未来に対応していけるよう、講演、報告、パネル・ディスカッションを通して、各学校が抱える経営と教育の課題や解決策のヒントを考察していく。

- 1 研究目標 新しい時代をリードする私学経営～変容する社会への対応を考える～
- 2 会 場 秋田キャッスルホテル 4階 放光の間（1）
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務局長、事務長またはこれらに準ずる管理職及び事務担当教職員
- 4 参加人員 119名
- 5 日 程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15	4050	15	15			30	
10月23日 (金)	開 会 式	講演 I	休 憩	講演 II	昼食	パネル・ディスカッション		閉 会 式

6 内容・日程細目

8:30	受 付 (金田 早苗・吉田 雄太・大日向 力)	機材担当：相原 浩嗣 記録(写真)担当：猿田みどり 集録担当：高橋 修
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員・客員研究員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：相原 浩嗣／記録：長谷川 孝 私学経営部会運営委員長 高 橋 修
9:15		

9:15	講演 I 司会：猿田みどり／記録：金田 早苗 講師紹介：長谷川 孝 演題 「コロナの彼方に～アマビエたちをうみだす学校経営・グローバル教育」 京都橘大学・札幌新陽高等学校 政策アドバイザー 講師 今村正治 立命館アジア太平洋大学 前副学長
10:40	10:50
10:50	講演 II 司会：猿田みどり／記録：吉田 雄太 講師紹介：長谷川 孝 演題 「311に学ぶ 危機に強い学校組織と教職員～“ニューノーマル”時代を迎えて～」 講師 小田隆史 国立大学法人宮城教育大学防災教育研修機構 副機構長・准教授
12:15	昼 食
13:15	パネル・ディスカッション 司会：猿田みどり／記録：大日向 力 テーマ 「新しい時代をリードする私学経営～変容する社会への対応を考える～」 パネリスト 水野勇氣 秋田ノーザンハピネッツ株式会社 代表取締役社長 田原俊典 修道中学高等学校 校長 工藤誠一 聖光学院中学高等学校 理事長・校長
15:30	コーディネーター 木内秀樹 東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長
16:00	閉会式 司会：相原 浩嗣／記録：長谷川 孝 1. 開式の辞 2. 総括 私立学経営部会運営委員長 高橋 修 3. 専門委員長挨拶 私立学経営専門委員長 長塚 篤夫 4. 閉会の辞
16:00	解散

7 講師・パネリスト・コーディネーター（順不同）

- 今村正治 京都橘大学・札幌新陽高等学校 政策アドバイザー
立命館アジア太平洋大学 前副学長
コンサルティング&コーチング今村食堂株式会社 代表取締役社長
- 小田隆史 国立大学法人宮城教育大学防災教育研修機構 副機構長・准教授
- 水野勇氣 秋田ノーザンハピネッツ株式会社 代表取締役社長
- 田原俊典 修道中学高等学校 校長
- 工藤誠一 聖光学院中学高等学校 理事長・校長
- 木内秀樹 東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長	高橋 修	秋田令和高等学校	校長
副委員長	相原 浩嗣	秋田令和高等学校	教頭
委員	長谷川 孝	ノースアジア大学明桜高等学校	教頭代理
	猿田 みどり	秋田令和高等学校	教諭
	吉田 雄太	国学館高等学校	教諭
	大日向 力	秋田修英高等学校	教諭
	金田 早苗	学校法人聖霊学園	事務局長

9 専門委員・指導員（順不同）

私学経営専門委員会

委員長	長塚 篤夫	順天中学高等学校	校長
副委員長	鈴木 康之	水戸女子高等学校	理事長・校長
委員	西岡 憲廣	札幌山の手高等学校	理事長・校長
	近藤 彰郎	八雲学園中学高等学校	理事長・校長
	山本 与志春	学校法人青山学院	院長
	摺河 祐彦	姫路女学院高等学校	理事長・校長
	大多和 聡宏	開星中学高等学校	理事長・校長
	菅 沼 宏比古	学校法人西海学園	理事長

法人管理事務運営専門委員会

委員長	工藤 誠一	聖光学院中学高等学校	理事長・校長
委員	嗟 峨 実允	学校法人藤華学院	理事長
	服部 泰啓	学校法人信愛学園	理事長
	摺河 祐彦	姫路女学院高等学校	理事長・校長
	川島 英和	学校法人川島学園	理事長
	野尻 富太郎	学校法人芝学園	常務理事・事務局長

私学経営部会 講演 I

「コロナの彼方に～アマビエたちをうみだす学校経営・グローバル教育」

京都橘大学・札幌新陽高等学校 政策アドバイザー
立命館アジア太平洋大学 前副学長
コンサルティング&コーチング今村食堂株式会社 代表取締役社長
今村 正治

今村氏は立命館大学文学部卒業後、学校法人立命館に就職。その後、大分県で立命館アジア太平洋大学（APU）の設立に携わり、同大学副学長・同法人の常務理事まで務めた。今も学校・教育・地域創生等に取り組んでいる。

60歳定年を機に退職し、会社を設立し、新しいこと面白いことをしようと考えた。今、社会や教育に起こっていることは、新型コロナウイルス感染症拡大によるものではなく、もっと以前から先送りしてきた課題が大きくなったものだ。

縁あってアドバイザーを務めている札幌新陽高校・京都橘大学も、経営的にはどん底から這い上がり、ユニークな発展を遂げてきた学校。今の自分の仕事は、教育と学校の新しい価値創造のサポート役である。また、別府市でもまちづくり、観光の担い手育成などでアドバイザーをしている。

突き詰めて言うと、学校経営とは、「学生・生徒募集が命」だ。しかし今や、進学実績、偏差値や甲子園などのスポーツ強化というブランディングが正解なのか、が問われている。

私たちは現在、VUCA（ブーカ：不安定、不確実、複雑、曖昧）の時代にいる。格差・分断・貧困・紛争・経済的悪化・ウイルス感染拡大など想像がつかないことが起こっている。この先行きの見えない時代を担う次世代人材育成に過剰と言える強い期待が寄せられている。教育界に任せてはおけないと、グーグルなど企業やNPOも地域団体も学校を作り始めている。N高も注目を集めている。国の内外で次々と新しい学校が生まれ、教育企画の取り組みが始まっている。

しかし、とにかく何かしなくてはと、浮足立ってはだめで、落ち着いてもう一度足元を見てほしい。しかし焦らないで冷静に考えてほしい。

まず日本の児童生徒の実情に目を向けると、国際比較での日本の子供の自己肯定感の低さ、自殺者の増加が憂慮すべき事態になっている。アメリカではSNSが本格化して以降、若年者の自殺が急増している。日本でもSNSとどう付き合うかは教育にとって大きなテーマとなるだろう。

また、有名高校・旧帝大から優良企業に就職というだけでなくこれからのキャリアモデルは多様になっていく。そうした時代に教師の役割は「管理・統率」から「共同探求」へ変わらなければならない。児童生徒を教室に閉じ込めて教壇から教えるだけでは、次の時代を生き抜く人材は育たないのだ。

世界のエリートが一番入りたい大学となっている米国のミネルバ大学にはキャンパスがなく世界8か国を共同生活しながら巡りオンライン教育でその国々の問題解決を一生懸命考えている。パリ発祥の有名なプログラミングスクールが東京に開設された。学費は無料。世界中の企業から課題が出される問題をひたすら解くのだ。既存本流の教育はこのような新しい流れの教育に学び、コラボレーションしていくことが必要だ。



大分県別府市の立命館アジア太平洋大学（APU）は、約 90 カ国・地域から国際学生 3 千人、国内学生 3 千人が集まり、教員も世界中から来ている。国際学生の入学選抜は、試験ではなく独自の方法をとっている。多くは入学試験をくぐり抜けてきた日本の学生より優秀である。才能を集め、多文化の環境で切磋琢磨する。まさに混ぜる教育だ。

これからのリーダー像も変わるだろう。危機感や厳しさばかり語るリーダーではなく、やりたいこと、面白いことで人を魅了するリーダーが求められる。相手を叩きのめすのではなく、互いを丸め込む魔法のような術を持つリーダー、多様性を織り込み、新しい価値を生み出す集団を創造するリーダーが求められている。

学校経営も変わらなければいけない。フラットでオープンであること、そのためには事務職員の役割が重要で、経営企画戦略を持つ人材、アライアンス・コンソーシアムを結んで仕事できる人材が必要となる。何でも自前主義ではなく、一校生き残りではなく、もっと大きな力を集めていくこと、連携し、回遊しながら学ぶ仕組みをつくっていくことが重要となる。また、課題先進地域である地方で学ぶ価値がますます高まっている。初等中等教育も、全日制、普通科、定時制、通信制という制度的枠組みの限界を超えていくことも課題になるのではないかと。さらには、校舎、キャンパスを学生生徒のためだけでなく、地域の共有財産として社会的存在へ価値転換することも意味がある。また外部の声に真摯に謙虚に耳を傾ける経営姿勢も大切である。外部理事など積極的に迎えて強い理事会をつくらなければならない。

人生は計画通りには進まない。子供たちにいい偶然に出合ってもらえる機会を作れるかが大事で、それを子供たちの成長、生きる力に繋げることが重要だ。



私学経営部会 講演Ⅱ

「311に学ぶ 危機に強い学校組織と教職員～“ニューノーマル”時代を迎えて～」

国立大学法人宮城教育大学防災教育研修機構 副機構長・准教授
小田 隆 史

小田氏は福島県いわき市出身で現在は仙台市在住。地理学が専門で学校防災、防災教育、地域防災、都市問題等を研究している。

宮城教育大学でメインの仕事は教職大学院での仕事である。東日本大震災から令和3年3月11日で10年を迎える。当時、私はお茶の水女子大学に勤めていた。ここ数年を振り返ると、夏場に数十年に一度というような大雨が毎年、日本のあちこちで降っている。ここ4、5年は新たなステージに入っている。ゲリラ豪雨が今やニューノーマルだ。



東日本大震災では建物の倒壊による犠牲者はいなかったが、石巻市立大川小学校では小学生74人が犠牲となり、行方不明の子供もいる。教員も10人が亡くなった。

大川小学校での避難を巡る裁判は最高裁で遺族の勝訴が確定したが、仙台高裁判決で指摘された内容を織り交ぜてチェックリストを作成した。判決では、学校保健安全法第29条を根拠に、校長等に必要とされる知識・経験は地域住民の平均的知識・経験より遥かに高いレベルが求められ、公務員として職務上、安全確保義務履行にかかる知識・経験を収集・蓄積できる立場にあり、職務上知り得た知識・経験を市教委や他の教職員と相互に交換・共有できる立場にあったと指摘された。

一方、海岸線に近い南三陸町の戸倉小学校では新しく赴任した校長が地域のさまざまな情報を収集し、津波に関して教職員との意見交換を大事にしていた。なかでも地元出身の教諭は、できるだけ高いところへの避難の重要性を主張しつづけた。結果、震災発生時、屋上避難を止め、より高い高台に避難（校舎は津波で屋上まで水没）したため、1人の犠牲者も出さなかった。

事故の約7割はヒューマンエラーと言われている。問題点を指摘し合えない状況が組織の中にあると事故に至ってしまうとの指摘がよくされる。戸倉小学校の教諭も直言を厭わなかったように、教員が発言できる雰囲気が必要で、平時は望ましくない状況を言い合える環境づくりが重要だ。

地域に長く住んでいる人たちと避難方針について擦り合わせも必要で、身近な地域の昔と今のハザードを理解し災害に備えること、国土地理院や国土交通省ハザードマップポータルなどいろいろな地理情報を取り出せるWEBサイトがあり、一見の価値がある。

また国土地理院では新たに地図記号「自然災害伝承碑」を設けている。過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害に係る事柄を後世に伝えようとする石碑やモニュメントの位置が地図上で示され、石碑等の、風雨で読みにくくなった内容も分かりやすく見ることができるようになっている。

国立の付属校と公立学校を比較すると、国立校では人事異動が少なく、通学圏が広く、近隣との関係も公立校より希薄だ。これは私学にも通ずるかもしれない。通学途中に被災することもある。

子供が自ら命を守り、周りの命を守るための防災教育が必要で、教科学習、校内行事、課外学習等の機会を活用して身近な地域を扱う防災教育が必要だ。防災教育は幅広く、決められたカリキュラムがあるわけではない。訓練もさまざまな知見も必要で、本日は宮城教育大学と国土交通省で作成した『いのちを守る 教員のための防災教育ブックレット(風水害編)』を皆さんにお配りをした。

東日本大震災から間もなく10年。地元の人は震災経験の風化を懸念している。災害直後にあまり語らなかった人が話し始めている。震災遺構や語り部による活動も近年活発化している。

現在はコロナ禍により海外に行けないので修学旅行で被災地を訪れる学校も増えている。「百聞は一見に如かず」。被災者から直接話を伺うと命の大切さや我々が安心・安全な日常を送れていることの尊さを実感できる重要な教育資源だ。各学校には震災遺構など震災に直接向き合い見聞きしたものを次の世代に受け継ぐなど教育は貢献できると考えている。資料としてお渡しした『教員のための震災遺構を通じた「いのち」と「くらし」の学びの手引き』も参考にしてほしい。



私学経営部会 パネル・ディスカッション

「新しい時代をリードする私学経営 ～変容する社会への対応を考える～」

(パネリスト) 秋田ノーザンハピネッツ株式会社 代表取締役社長
水野 勇氣

(パネリスト) 聖光学院中学高等学校 理事長・校長
工藤 誠一

(パネリスト) 修道中学高等学校 校長
田原 俊典

(コーディネーター) 東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長
木内 秀樹

【木内】難しい状況の中、このパネル・ディスカッションが開催できてうれしく思う。「新しい時代をリードする私学経営～変容する社会への対応を考える～」を研究目標に話していきたい。本日は世界全体の問題であり、現在も進行中、そして収束のめどがつかないコロナウイルスに関する件について意見をうかがう。後半は、急速に変化することが予想される未来社会、このグローバル社会で求められる能力と教育について考えていく。

【水野】私自身は東京都の出身で、高校を卒業後、スポーツマネジメントを学ぶためにアメリカへ留学した。しかし、家庭の事情で帰国し、東京で働いていたところ、秋田に国際教養大学という新しい大学ができることを知った。1年生から交換留学ができる大学で、しかも1期生、全行行ったことがない秋田だが、直感的に面白そうだと感じて入学を決めた。



水野勇氣 氏

在学中にオーストラリアのグリフィス大学へ交換留学し、念願のスポーツマネジメントを学ぶことができた。そこで、勉強したことを何かに生かさなければ意味がないと思い、秋田に初めてのプロスポーツチームを作る活動を始めた。卒業後も秋田に残って運営会社を立ち上げ、秋田にプロのバスケットボールチームを発足させ、現在、11シーズン目となる。国際教養大学と出合わなければ秋田県に来ることもなかったと思うと感慨深い。

活動の一環として、スクール事業という形で子供たちにバスケットボールを教えている。NBAでも通じるような選手を育てることを目指してはいるが、実際にプロになれるのはほんのわずかである。そう考えると、我々にとって重要なのは社会に通用する人材を育成することかもしれない。コーチに言われたことだけをやるのではなく、自ら考える力も伸ばすようなカリキュラムを模索している最中である。

新型コロナに関しては、我々もシーズン途中の3月末に終了し、10月からは今リーグを始めた。Bリーグでのガイドラインも決められているので、専門家のアドバイスも頂きながら、50%の収容制限や検温、飛沫感染を防ぐために声を出さずに応援し、換気するなどの対策をしている。万一、観戦者の中に陽性者がいた場合でも、その周りに感染を広げないようにという考え方で努めている。

【田原】広島県の修道中学高等学校は、5年後に創立300年を迎える伝統ある学校である。藩校から私立学校になった全国でも珍しい学校だと聞いている。新型コロナへの対応としては、4月14日から5月6日まで国や県、市の要請に従って学校休業した。しかし、以前からICT活用教育の重要性は感じていたため、本校では全員が1人1台のパソコンを持ち、約2千人が同時に使っても問題がないようなWi-Fi環境も整えてあった。だから、臨時休業が決まってすぐに授業プログラムを作り、翌日からオンライン授業を始めることができた。

休業の代わりとして夏休みは授業日としたが、これはカリキュラムが遅れているからではない。カリキュラムはむしろ進みすぎていたぐらいだが、生徒たちが最も大切にしている学校での生活、この生活が失われたことを補填する意味で夏休みを学校生活に充てることとした。

夏休みの授業日のうち、最後の3日間は模擬的な学校休業日とした。この日は生徒たちが自宅にいて、朝礼から体育、音楽、書道まで全てオンラインで時間割通りに進めた。なぜかというところ、パソコンが苦手な教員は、そういった作業を他の教員に任せてしまっている。それぞれが自分の授業にプライドがあるので、なかなかオンラインへと切り替えられない。しかし、ICTは使わないといけない時代になっているので、1週間の準備期間を与えて全ての教員にオンラインでの授業を考えてもらった。

「そんなことできるわけがない」と言う教員もいたが、結果としては素晴らしい授業になったので、ある程度、強制的に動くことは大事だと勉強した。

【工藤】我々の学校も、臨時休校期間中はオンラインでの授業をした。生徒が1人1台端末を持っているので、特別時間割を作り、すぐに対応することができた。そして、学校再開後7月31日まではラッシュアワーでの通学を回避するために、生徒を午前と午後の2つのグループに分けて授業をした。

本校の場合、3年前から教務事務や家庭との連絡は全てオンラインで、紙での連絡はない。本校で教員を続けるためには、パソコンを使いこなす必要がある。だから、本校の教員はオンライン授業にはすぐに対応できた。

その中で、課題と思ったことは、生徒の意識の問題である。中学生や高校生は勉強がしたいわけではない。やりたくない子どもたちにどうすればやらせることができるのか。教室にいれば、直接声を掛けて注意できるが、オンラインでは難しい。だから、授業の進捗については順調だったが、生徒の定着度については差があるということが学校を再開して分かった。対面の授業の大事さを改めて見直す機会となった。

行事については延期したものもあるが、体育祭や学園祭、宿泊研修など全て実施している。修学旅行についても保護者からの強い要望があり実施することとなった。生徒の体調について、本当に薄氷を踏む思いで気を配りながらやっている。

【木内】先日、文部科学省から「修学旅行については中止ではなく延期とするように。また、延期した場合は3月末までには実施するように」という通知があった。学校行事については、各校が頭を悩ますところである。

【木内】GIGAスクール構想について、考えをお聞きしたい。

【工藤】一番大事なことは、生徒が日常的に使うということ。国としては、とりあえず1人1台という環境を作り、あとは卒業した学年のものを使うくらいの考えと思う。しかし、学校が端末を管理



工藤誠一氏

して、生徒が簡単に家に持ち帰れないようであれば、むしろ家庭に配った方がいいと思っている。

これも一つの教育格差である。神奈川県教育委員会では自宅に Wi-Fi がない子どものために、モバイルルーターを貸与するための予算を用意した。ところが 9 月末現在、1 校も申し込みがなかった。通信機能がついているタブレットの貸与に対しての申し込みも少なかった。機器を貸与されたとしても通信料はかかるから、なかなか借りることができないわけである。だから、オンライン化するとしても経済的な格差が、教育格差として継続していく問題というのは大きい。

【木内】田原先生の学校でも、生徒 1 人 1 台のタブレットを持っていると聞いている。導入に当たっての方法を聞きたい。

【田原】保護者には「ノートパソコンやタブレットは、鉛筆や消しゴムと同じ学用品である。鉄棒のようにみんなで使う教具ではないので、各自用意してほしい」とお願いした。学校がまとめて購入すると大変なことになる。壊れたら学校が修理しないとイケないし、みんなが同じ機種のパソコンを使っていたら取り違えのトラブルもあるかもしれない。しかし、自分で選んで購入したパソコンなら、生徒も大事に使う。

【木内】次に「私学に求められる新しい教育」というテーマで話をお願いしたい。田原先生から「修道ベーシックループリック」について説明をお願いしたい。

【田原】広島県では公立校が私立の真似をしている。その中で、私学が独自性を示すにはどうしたらいいか考えて、建学の精神を今風に言語化することを思いついた。外部からも専門家を招いてプロジェクトチームを作って、どういう生徒を理想として、そのためにしていることを客観的に見ることができる指標を作った。

「価値観」と「スキル」の 2 つの観点、さらに「世界貢献」や「人間関係力」などの 9 つの領域に 23 のテーマがある。このループリックをもとに年 2 回、全校生徒 1700 人が自己評価をしている。回答の結果はデータ分析して、生徒たちは自分が今どのレベルにいるのかを把握する。自己評価では意味が無いと思うかもしれないが、自分自身で評価することによって自己肯定感も自然に生まれてくる。

また、データは学年、クラス、部活動などさまざまなカテゴリーに分けて分析するので、このクラスは協調性が低い、思考力が弱いなどの傾向も見えてくる。だから、次の段階に向けて、この分野を向上させようとか、学校行事ではこういうことに注意しようとか各学年や各教科の目標として共有することができる。

【木内】工藤先生の学校で進められている探究型という学習プログラムについて、お話し頂きたい。

【工藤】中学 1 年から、聖光塾という形で自己啓発型学習を続けている。中学 2 年では選択芸術講座でフルートやバイオリン、陶芸など何か 1 つのことに年間を通して取り組む。中学 3 年がミニ探究講座、そして高校 1 年が探究基礎、高校 2 年が探究という形でプログラムを組んでいる。生徒が学校のカリキュラムだけに縛り付けられず、自分で課題を見つけて研究していくチャンスを作ろうということである。

【木内】最後のテーマとして、社会の変容とグローバル社会ということでご意見をうかがう。水野さんが海外や日本の大学で学ぶ中で感じた、世界で求められていることについて話をうかがいたい。



田原俊典 氏

【水野】私は留学して経験できたこと、アメリカやオーストラリアで生活ができたこと、それが何物にも代え難いことだと思っている。

その経験が今、秋田での活動にもつながっている。海外に出ると、最初は外国の良さが見えてカルチャーショックを受けるが、次に日本の素晴らしさに気付く。だから、帰国して地方が衰退していく様子を見たときに、プロスポーツチームを通じて秋田を活性化したいという思いを持つようになった。

新しいアイデアというものは、知識と経験からしか生まれれないという言葉聞いたことがある。これは本当にその通りで、グローバルな経験や知識というのはとても大事であると思っている。

【木内】アメリカという多様性のある国で、いろいろな経験を蓄積して、新しいアイデアが生まれるということもあると思うが、いかがだろうか。

【水野】日本人は奥ゆかしい。例えば授業や講演会で「質問はありますか」と聞いてもほとんど手が挙がらない。アメリカだとすごく積極的で、皆さん自信満々に発言しているが、よく聞いてみるとそんなに大したことは言ってない。だから自信があるからいいというものでもない。たとえ発音が流暢ではなくても知的な部分があればリスペクトされるし、国際社会で活躍するには知性であるとか、自分自身を卑下しないということが大切だと思う。

多様性ということでは、日本ではみんながマスクをするような同一性が求められる。アメリカでは「マスクなんてけしからん」って言う人もいて、反対のデモまでして全然収束しない。だから国によって良いところ、悪いところがある。その中で、日本の教育現場では、どうやってリーダーシップを目指す人材を育てられるかということが大事だと思う。

【木内】田原先生におうかがいしたい。修道のベーシックループリックの先を見据えたときに、中高の教育でやっておかなければならないということがあればお聞きしたい。

【田原】本校では2019年度からFLP（フューチャー・リーダーズ・プログラム）という国際理解教育の実践をやっている。海外研修プログラムの中にカリキュラムとして国際理解教育を入れて、11月の授業日に2週間ほどオーストラリアのニューサウスウェスト大学に行き、リーダー教育を受けている。ロボットを作ったり、将来の夢を語ったり、有名なリーダーと一対一で話をしたりするような経験ができる。

授業として実施するため、全員が必ず海外に行くことになるが、海外に行かなくてもいいという考えの保護者もいるので、SHUDOコースといい、国内の外国人留学生を招いて英語漬けでリーダー教育をするプログラムもある。研修後の生徒は目の色が全然違うし、子どもたちにあのような積極性があったのかと驚くほどの変化がある。

海外で研修する場合の費用は60万円ほどかかるが、2019年度は1学年280人のうち約70%が海外を選んだ。だから、海外で実際に研修を受けることへの需要は大きいと考えている。

【木内】工藤先生、教育と大学受験との両立についてはどうお考えだろうか。

【工藤】難易度が高い大学ほど枝葉末節の問題ではなくて、総合的な力をみるようになっている。大学の合格者を増やすためには、単なる知識を詰め込むだけの教育では追いつかないのが事実である。我々の学校は中高一貫校なので6年間をいかに有意義に使って人間的な厚みを作っていくかということが必要となる。総合的な時間での成功体験が自己肯定感に結びついていくような教育プログラムを提供することが大事ではないだろうか。

アメリカではSNSの影響で自殺者が増えているそうだ。子どもたちがネットの鎖につながれ

ることがないように、自分を解放して、自我を確立させていくことが中等教育の中で求められている。グローバルスタンダードという世界の大きな流れの中に、日本も組み込まれていている。我々大人がどうやって子供1人1人の未来像を描き示してあげられるかということが大切である。

私は教育の原点は、人の温もりを伝えることだと思っている。そのことを絶えず子どもたちに訴え、教育現場で実践していくことが、結局は互いの個を尊重しあう人間同士になれるのではないかと思う。五感を通じてつながっていくことは、いつの時代になっても教育現場に求められることではないだろうか。

【木内】水野さん、私学に期待することはあるだろうか。

【水野】これからは単に知識を与えるだけではなく、アクティブな授業が求められていると思う。今の時代は、知識を得ようと思えば自分でいくらでも得ることができるので、その知識をどうやって生かすことができるかということが大切である。自ら考えて行動できる人間は非常に少ない。考えて行動する力が、これからの AI 時代の中で間違いなく必要となる。難しいことだが、ぜひ私学の先生方にチャレンジしていただきたい。

【木内】参加の先生方もそれぞれが情熱を持って教育に前向きに取り組んでいられることと思う。パネリストの先生方には感謝申し上げます。



木内秀樹 氏

私学経営部会

「総括」

秋田令和高等学校 校長
高橋 修

本日は、まず午前中、講演Ⅰで今村先生から、立命館アジア太平洋大学や札幌新陽高等学校での実践、その他の成果を交えた学校経営に求められている多様性、あるいはリーダー像、そのような内容について様々なアプローチでのお話を伺いました。今後、私達の学校経営に何が必要なのかについて、再度私たちも現況の形を受け止めて、考えていかなければならない、そのような機会だったと思います。今村先生のまとめの部分で、地方で学ぶ価値、あるいは地方からの発信というものがこれからの教育の中で重要な意義を持っていくに違いないということをお話し頂きました。私達のような地方で私学教育に携わっている人間にとっては大変大きな励ましの言葉だと受け止め、拝聴しました。



続いて講演Ⅱでは、小田先生からお話を頂きましたが、震災からまもなく10年ということで、秋田県では大きな被害はなかったのですが、経験したことがない、大変な揺れであったことは今でも鮮明に覚えています。改めて、3.11の学校に学ぶということでお話を頂いたのですが、私も地理学を専攻した立場であり、大変興味を持ってお話を伺いました。有益なことを教えて頂き、貴重な時間を頂いたと思っています。今思い返すと、東北では学校管理下でたくさん子ども達の命が奪われています。日が経つにつれて私達の記憶の中から少しずつ薄れることを気にしつつあるところですが、先生のお話を伺い、もう一度、私たちは3.11に立ち返って、東北はもちろん、日本は世界でもっとも災害の多い、あらゆる災害が起こる国ということを中心に銘じて、明日からの学校の危機管理、防災体制の整備にあたっていかなければならないことを痛感しました。学校設置者、学校管理者としての立場の責任を改めて痛感しました。

パネル・ディスカッションは田原先生、工藤先生からそれぞれ最先端、最新のICT教育の機器の活用等をご紹介頂きました。両校の取り組みは、単に機材や設備を準備して、生徒あるいは教職員の研修を積んで、活用するというものではなく、教職員や保護者の意識改革を図りながら、ICT活用教育化を進めながら、学校改革を進めていくところに最大のねらいがある。まさに新しい時代をリードする私学経営のモデルとしてご訓示を頂きました。これからの自分たちの学校経営の中にも生かしていきたいと考えています。その他にも神奈川県、広島県のエピソード等も含めてお話し頂き、長時間にかかわらず、あっという間に時間が過ぎたような印象を受けています。水野氏につきましては、秋田県の研修会でも何度かお話を伺った経験があります。最初の部会の挨拶の中で、秋田県にはお互いに協力して、何とかしようという県民性があり、その中でいろいろなことを助け合っていく、秋田県という地味な県であるが、私たちが誇りにしてよい県民性というものがあると思います。秋田には秋田の素晴らしい子ども達がたくさんいる。何とか秋田の将来に、比較的消極的な秋田の人達を前向きにしてくれているのが、我が秋田ノーザンハピネスの活躍だと思います。今年はスタートから良い成績をおさめており、数年前のBJリーグの時代に有明で決勝を戦った時の県民の熱気、そしてあとき、私達に与えて頂いた勇気、これを今年も是非、達成して頂いて、県民みんな、今度は声高らかに秋田県民歌を歌う機会があればと思っています。

以上、本日の内容について、簡単に振り返りを致しました。2日間にわたり、秋田県で全国私学教育研究集会を経験させて頂いたことは、私たちにとって大変素晴らしい機会となりました。今後とも機会がございましたら是非、秋田県へおいで頂きたいということと、私たちも、機会を見つけて、これから全国で開かれる本大会で、先生方からご指導頂ければありがたいと思っています。2日間有り難うございました。

教育課程部会

Society5.0 時代を生きる子ども達に求められる力を育成するために、新しい時代の初等中等教育のあり方について中央教育審議会等で検討が重ねられている。また、国は「GIGA スクール構想」を打ち出し、多様な子ども達の創造性を育み、一人ひとりに個別最適化された学びの実現に向けて、「一人一台端末」を含めた ICT 環境の整備を推進している。

これらの改革や課題を踏まえ、建学の精神と自校の特色を活かした新しいカリキュラム開発を学校一丸となって行っていくことは我々にとって急務である。そのためには、教員一人ひとりがカリキュラム・マネジメントの視点を持つことが重要であるといえよう。

当部会では、カリキュラム・マネジメントの専門家による講演とワークショップ、私立高等学校教員による実践発表などのプログラムを通して、新しい時代にふさわしい私学の特色あるカリキュラム実現のための具体的方策を考察していきたい。

- 1 研究目標 新しい時代に向けた私学の特色あるカリキュラム
- 2 会場 秋田キャッスルホテル 4階 放光の間(2)
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、教務主任、教育課程編成等担当教員
- 4 参加人員 71名
- 5 日程

時間 月日	9		10		11		12		13		14		15		16	
	15		45						30		30					
10月23日 (金)	開 会 式	講演・ワークショップ			休 憩	実践発表 I		昼食		講演		実践発表 II		閉 会 式		

6 内容・日程細目

8:30	受付 (北條 淳・伊藤恵美子)	機材担当：後松 成人 記録(写真)担当：杉山 仁 集録担当：杉山 仁
9:00	開 会 式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員・専門委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：鈴木 寿宝／記録：石田奈津子 教育課程部会運営委員長 富 樫 義 明
9:15		

9:15	講演・ワークショップ 司会：鈴木 寿宝／記録：杉山 仁 講師紹介：富樫 義明 テーマ 「ポストコロナ社会と私学のハイブリッドラーニング」 ～オンライン時代にも揺るがない私学のカリキュラム・マネジメントについて～
10:45	講師 広 石 英 記 東京電機大学 副学長兼教育改善推進室長
11:00	実践発表Ⅰ（東京都） 司会：鈴木 寿宝／記録：杉山 仁 テーマ 「他教科と連携して利用できる理科の教材開発とその実践」 発表者 竹 田 淳一郎 早稲田大学高等学院 教諭
12:00	昼 食
13:00	講演 司会：鈴木 寿宝／記録：杉山 仁 講師紹介：富樫 義明 演 題 「新しい時代をリードする私学経営～変容する社会への対応を考える～」 講 師 石 井 英 真 国立大学法人京都大学大学院教育学研究科 准教授
14:30	実践発表Ⅱ（秋田県） 司会：鈴木 寿宝／記録：杉山 仁 テーマ 「高大連携に基づいた主体的学びの育成をめざして」 発表者 鈴 木 健 樹 ノースアジア大学明桜高等学校 教諭
15:30	閉 会 式 司会：鈴木 寿宝／記録：石田奈津子 1. 開式の辞 2. 総 括 教育課程部会運営委員長 富 樫 義 明 3. 専門委員長挨拶 教育課程専門委員長 森 涼 4. 閉会の辞
16:00	解 散

7 講師・パネリスト・コーディネーター（順不同）

広 石 英 記 東京電機大学 副学長兼教育改善推進室長

石 井 英 真 国立大学法人京都大学大学院教育学研究科 准教授

竹 田 淳一郎 早稲田大学高等学院 教諭

鈴 木 健 樹 ノースアジア大学明桜高等学校 教諭

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長	富 樫 義 明	秋田修英高等学校	校長
副委員長	鈴 木 寿 宝	秋田修英高等学校	教頭
委員	石 田 奈津子	秋田修英高等学校	教頭
	杉 山 仁	国学館高等学校	教諭
	北 條 淳	秋田令和高等学校	教諭
	鈴 木 健 樹	ノースアジア大学明桜高等学校	教諭
	伊 藤 恵美子	聖霊女子短期大学付属高等学校	教諭

9 専門委員・指導員（順不同）

委員長	森 涼	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校	理事長・校長
委員	松 谷 茂	文化学園大学杉並中学高等学校	校長
	鈴 木 弘	香蘭女学校中高等科	校長
	北 村 聡	京都外大西高等学校	校長
	須 藤 勉	東京私学教育研究所	所長

教育課程部会 講演・ワークショップ

「ポストコロナ社会と私学のハイブリッドラーニング

～オンライン時代にも揺るがない私学のカリキュラム・マネジメントについて～

東京電機大学 副学長兼教育改善推進室長

広 石 英 記

本日は、コロナ禍が突き付けた学校の課題と HL（ハイブリッドラーニング）に代表されるポストコロナ社会におけるこれからの新しい教育方法、そして私学の強みを活かしたカリキュラム・マネジメントについて、私なりの考えをお話したい。

まず、「教育」や「学び」に関する私の基本的な考えをお話する。教育の本義は、教えることではなく、学習者の学びを支援する相互行為ととらえるべきだと考えている。なぜ私たちが子どもたちの教育に関わるかという、学習者（生徒）が「幸せに生きていく力」を育成するためである。子どもたちが、幸せに生きるためには、賢明に判断し、賢明に行動し、自らの小さな幸せにもきちんと気付く知性や感性を持っていなければいけない。そして何よりも、仲間とともに今よりもより良い世界を創るためには、様々な状況で活用できる汎用的な能力を身に付ける必要がある。そのために、教師は、親身になって、生徒の学びを支援（サポート）する、そういう行為が教育であると考えている。

また、学びとは何かであるが、人は何かを知る（途上国の窮状）ことによって知性が変わり、感性が生まれ、世界に対する関わり方である生き方が変わる、つまり、「知性も感性も人間性も連動して、人間が全面的に変わって自己更新をしていく、そういう人間のバージョンアップ」を学びだと考えている。その意味では、学ぶイコール生きることでもある。豊かに学べば学ぶほど、生きる意味は豊かになっていく。本当の学びは、新しい問いを拓いていくからである、そういう意味で、学びは、終わりのない構造をしているといえる。

このように学びを考えた場合に、この学びの本義を授業レベルに落とし込むと、知性や感性や生き方に関わる、「自己変容が起きる学び」に、教師がどのように関わるか、といった重要な課題が意識できる。少なくとも、生徒が「学ぶ」ためには、「分かった！できた！面白い！」というふうに、知的な驚きや喜びに「心が動く授業」が必要であり、心が動かない授業では、人間は変わる（学ぶ）ことはできない。

さて、今般のコロナ禍が私たち教育関係者に突き付けた本質的な課題は、教育の根幹である生徒の学びを支えるためにどうやって生徒と関わるのかという「関わり方の問い直し」である。従来、学校教育が当たり前の前提としていた直接的な関わりが、強制的に停止され、従来当たり前だったことができない状況で、私たちはみなこの当たり前だった「生徒との関わり方」を改めて問わなければいけない状況に置かれた。友だちや先生とつながっていた当たり前の日常の学校生活の価値に、休校期間に改めて気付いたという生徒のインタビューを雑誌で読んだ。このなげない「関わり」が、学校が持つ価値を、私たちに示しているのではないだろうか。

先生方にとっては今までいわば無意識に行っていた対面授業という関わり方を、今回の強制的な休校期間に、反省的に捉え直し、これまでの授業は、本当に対面でやる価値があったのかと振り返り、一方通行的な授業をやっていたのではないかと反省された真摯な先生方もおられると思う。その意味では、多くの先生方にとっては、対面授業の本当の価値に気づかされ、「対面だからこそできる本当の教育とは何か」、「学校だからできる本当の学びのサポートの仕方とは何か」ということを考えさせられた半年だったのではないかと。

コロナ渦によって半ば強制的に普及したオンライン授業が、従来の対面授業の真価の問い直しと授業方法の変革を迫っている。本質的な問いとして考えなければいけないのは、施設型教育組織、いわゆる学校の本来的役割は何かということだろう。恐らく中核的価値（コアなもの）として残るのは、人間関係に基づいた人間形成的なかかわりだと思う。そのなかでも私学独自の存在意義は何かということ、それは、どれだけ一般的な公立校と差別化した私学特有のユニークな人間形成的教育活動が展開できているかにかかっていると考える。



今後、各私立校はポストコロナを見据えた教育施策を構想していく時期に入っていく。コロナ対応のオンライン授業の経験などを今後どのように生かすのか。ICT 教育をこのまま加速していくという学校と、元に戻そうとする学校が出てくるだろう。第 3 の道としては、今回のコロナで得たオンラインの経験を、互いが持ち寄っているいろいろな形で生かしていき、新しい教育方法を模索しようという道だと思う。コロナ禍の創意工夫の取り組みのなかで対面授業の真価を問い直す機会は、いろいろな先生方が持たれてきたと思う。何よりも授業外の関わりの大切さは、重要である。授業外での関わり、部活動や学校行事、特に学校特有のユニークな学校行事、昼休みや生徒会といった人とのつながりの有り難み、それが意味、学校の真価として、先生方にも生徒にも実感されている。今回のコロナ禍によって、学校教育本来の真価を発揮できる人間形成的な教育機会に学校関係者のスポットが当てられたことは、私学にとって大きな好機だととらえるべきである。

オンライン授業のプラス面に光を当てると、時間や空間の制約を超える機能を持っていること。また、オンラインは生徒一人一人の習熟度や興味関心のありどころによって、生徒個人が学習進度をある程度コントロールできるので、学習の個別化を促すことができる。このことは、今後の教育の全体的な方向性を暗示している。また意外だが、実は教師と生徒の双方向性はオンライン授業によって強化される側面を持っている。普通の教室だと、生徒の後ろに隠れる子は、授業中に注視することは難しいが、オンラインだと、必ず目の前に顔が出てくる。つまり、常に最前列に、その子を座らせることができるので、教師と生徒の双方向性は逆に強化されるという面がある。一方、オンライン授業のマイナス面は、クラスメイトとの冗長なコミュニケーションが欠落し、協働学習や、教室の学びの雰囲気、その周囲とのつながりがなくなってしまうということである。

このオンライン授業のプラス面とマイナス面を考えた場合に、今後は、対面授業とオンライン授業の良さを組み合わせたハイブリッド型の反転授業が、一つのニューノーマルになっていくと思う。オンライン授業で培った経験やスキルを教師は活かしてオンデマンド教材を作成し、生徒は、オンラインで培った経験やスキルを活かして、授業部分に関しては、個別学習を家庭で行い、対面授業ができる学校の教室は、授業を聞く場ではなくて、教員や生徒との交流やフィードバックや質疑応答、グループワークなどの協同学習、つまり「つながることを実感できる」能動的で協働的な学習活動を行う場になっていくであろう。

すでに海外の教育先進国ではそのように変わっている。フリップトラニング（反転授業）は宿題を出すためのものではなく、良質な授業はビデオを聞いて習得のレベルの学習は個人が自宅で行い、協働学習といった活用のレベルの学びを学校の対面授業で行うという考え方だ。これからの日本では ICT の活用が当たり前の時代になり、そのツールをある程度活用することが全ての教員に求められていくのではないかと考えている。

もちろん、このハイブリッド型授業に関しても生徒の興味関心や習熟度によってその形が違うので、今は、新しい教育手法を追求し、変化に対応しようとするいろいろな先生方の努力や工夫を学校として支援をする時期に入ってきている。危機に対応しようとするいろいろな工夫をし、正解のない課題に挑戦する先生方の姿こそが、生徒や子どもたちが、あこがれ・なりたい大人のロールモデルになる。学校のマネジメントでは、このような新しいことに挑戦しようとする先生方をサポートすることがなによりも重要だと認識すべきである。

次の話題は学校のマネジメント、チーム学校についてだ。マネジメントという言葉に世に広めたのは、ピーター・ドラッカーである。彼は組織学としてマネジメントの研究を積んで、その手法を用いてアメリカの複数の巨大企業を再生し、様々な組織を活性化させる手法を開発した。日本では 1990 年代になってから、マネジメントという言葉と学校教育が同じ土壌で語られるようになった。そして 2000 年を前にした段階で、経済界の後押しもあって官邸主導の教育改革の流れの中で大学教育に対して、文部科学省よりも経済産業省が発言するようになり、この教育改革論議の流れのなかでマネジメントという言葉が、学校教育の中心的な話題になった。それを教育用語に変換したのが、チーム学校という新しい用語である。ここでは、まず、マネジメント論の根本であるドラッカーの考え方に沿って、学校のマネジメントを考えてみたい。

ドラッカーがまずマネジメントとして考えたのは、ある組織をしっかりと動かす（機能させる）ということだ。ドラッカーによると、マネジメントは、経営者や管理職だけでなくメンバー全員が参画する過程であり、そして組織の様々な人の強みを生かして、組織の成果につなげることがマネジメントだと定義している。彼は、どのレベル組織（家庭、企業、国家）でもマネジメントという考え方は通じるとしている。

ドラッカーは、あらゆる組織の存在意義は、3つに集約できると述べている。第1に組織とは、まずミッションを実現するためにあると述べている。私立学校はミッションとしての教育目標、建学の精神がはっきりしていることが強みである。そのため、ドラッカーの組織論の第1条件は当然ながらクリアしている。組織の存在意義の第2は、その組織にいる人たちが、自己実現して幸福にならなくてはいけないというものである。学校という組織では、先生方は、学校のなかで教師として生徒の成長に触れて、生きがいを持っているということで、これも組織論の要求を満たしている。組織の存在意義の第3に、組織は様々な社会問題を解決するために生まれ・存在するとドラッカーは指摘している。先生方は、これからの日本の未来や世界の未来を担う生徒の成長や学びを支援することで、間接的にではあるが、大きな社会問題の解決に貢献しているといえる。つまり学校という組織は、ドラッカーの提唱する組織の存在意義の全てに見事に当てはまるのである。

また、ドラッカーは、組織が持続的に発展するための二つの要件を定義している。一般的な組織（企業）では、新しい顧客が増えるとその組織（企業）は持続的に発展するのだが、学校で言うと、新しい顧客とは、その学校に行きたい志願者であり、その志願者の保護者と読み替えることができる。彼の提唱する組織の発展的持続性の要件は、マーケティングとイノベーションであり、この言葉は、みなさんも聞き覚えがあると思う。

第一要件はマーケティングである。これは「今この組織に求められているのは何か」を把握して迅速に対応することを表している。学校ではスクールマネジメントやリスクマネジメントに当たるものである。そして第二要件はイノベーションである。ドラッカーの定義では、イノベーションとは、「未だない価値を創ること」であり、その新奇性や魅力で新しい顧客を引きつけるということだ。これを私学あてはめると私学独自のユニークな特色ある教育活動、私学の建学の精神を具体化したカリキュラム・マネジメント、これが、私学のイノベーションを駆動（ドライブ）していくものになると考える。

このドラッカーのマネジメント論の要諦を学校に当てはめると、チーム学校とは、実は全員参加の学校マネジメントのあり方のことであることが理解できる。また、マネジメントは人の強みを生かすという定義から、学校のマネジメントも専門的なスタッフそれぞれが責任を持って学校運営に参画することであり、教職員だけではなくスクールソーシャルワーカーや、スクールカウンセラー、さらに、これからの時代は弁護士や警察といった人たちもチーム学校のメンバーとして考えることが重要となることが理解できる。特に、リスクマネジメントの場合、学校は、警察に躊躇なく協力を要請するという考え方がこれからの時代には必要となるであろう。

さらに、個人も組織もマネジメントへの参画を通じて成長するとドラッカーは述べている。これはまさに、協同する学校文化で教師、そして学校も、生徒や同僚の成長を手助けすることで組織も個人も成長することができる。まさに同僚性の高い日本の学校にぴったりと符合している。スクールマネジメントでは、個人でなくチームとして力を発揮する体制が必要である。学習する学校、つまり創造的な対応が常にできるような意識を要求した集団（チーム）にしていくことがチーム学校の本来の姿だととらえていただきたい。

より具体的にチーム学校の要件を説明すると、最も大事なことは、学校の教育目標というゴールを組織として共有することである。個々の先生方の方向性をそろえると、個人のベクトルの総和である組織力というのは、当然しっかりと大きなものになる。教育目標というビジョンをしっかりと共有することがまずスクールマネジメントの基本となる。

ベクトルがそろった次の段階の具体的マネジメントとして、課題の特定とプロセスの設計が大切である。これは、ドラッカーのいう組織のマーケティングに相当する。学校組織も、自らの抱える課題を特定し、何をいつまでにどうするのかという具体的な設定ができないと、有効なマネジメントとは言えない。例えば、教育目標が高度に抽象的なもの（例えば、人格の陶冶）だと、具体的にどういうふうにこの子たちを育てようというプロセスの設計自体が不可能になってしまう。

学校が、具体的目標を持たず、具体的戦略がないまま校務分掌をしてしまうと、個々の先生方は、自分の分掌している分掌のところだけの合理性（虫の目）を追求するので、全体的なプロセスの最適化との整合性を欠くことになってしまう。これが、具体的な教育目標を共有し、それに向かったプロセスの設計ができると、自分たち分掌を俯瞰的な目（鳥の目）で見ることができるようになる。カリキュラム・マネジメントの場合も、リスクマネジメントの場合も、この具体的目標を共有し、具体的プロセスをみんなで分担するというマネジメ

ントの基本的あり方は同様である。

このドラッカーのマネジメント理論を、私立学校のカリキュラム・マネジメントに当てはめて考えてみよう。私立学校には独自の建学の精神、伝統に裏打ちされた教育理念や教育目標という普遍の価値（使命）が存在する。これが私学という組織のミッションなのだから、極めて大切である。これをカリキュラム・デザイン、カリキュラム・マネジメントの軸（コア）にするということは、絶対に譲ってはいけない。私立学校の核心的な価値だからだ。しかしながら、建学の精神が、抽象的なキャッチフレーズのままでは、マネジメントとして機能しない。これを機能させるためには、人間的価値を謳っている建学の精神を、抽象的なものから具体的で教育可能なもの（資質・能力）に変換しなければならない。そうしないと戦略的で具体的教育プロセス、すなわちカリキュラム・マネジメントが設計できないからである。

そのためには、まずは、抽象的な建学の精神を教育可能な具体的な資質・能力、いわゆる身に付けさせたい力、コンピテンシーへと還元・変換し、建学の精神をしっかりと今の時代によみがえらせるような、読み直しや再創造を管理職や中堅教員を中心に行うことが重要となる。その次に、この建学の精神を再創造した教育目標である生きる力やコンピテンシーの育成を、すべての教育活動のコア、横軸を通す基軸としてカリキュラム全体を再考・再構成するカリキュラム・マネジメントの構想の段階になる。そして最後には、再創造された教育目標を学校の全ての教育活動で常に意識できるように、保護者・生徒・先生がつねにこの新しい教育目標を意識する仕組みとして見える化するツールやルーブリック開発などの具体化の段階になる。これが、イノベーションができる特色ある私学のカリキュラム・マネジメントの1つのやり方だと考える。

しかし、もしもチーム学校として組織的に取り組まずに、教育目標のベクトルがそろわないまま、個々の教員が散発的に新しい教育方法に取り組んでしまうと生徒は混乱する。教員個人のスタンドプレーのアクティブラーニングでは、生徒が、学校の学びをつなぐ（関連させる）ことができずに被害者になってしまう。私学のカリキュラム・マネジメントを推進するために、共有された教育目標に向かって、どう学びを作り出していくのかという意識合わせが決定的に大切である。そのために、教科領域横断的なカリキュラム編成の際に中堅の先生方や、教務主任、学年主任、管理職の先生方がリーダーになって議論を深めることは重要である。学校が身に付けさせたい力に向かって教科も特別活動も総合も全て連動・連携する（つながった）カリキュラム・デザインを俯瞰的に構想することと、ばらばらに各教科で、各教員がそれぞれ独自のアクティブラーニングや新しい教育手法を連携なしに行うのでは、教育効果は全く異なることに留意すべきである。

教育目標に見える化とは、具体的には探究学習において、学校の教育目標を具体化したルーブリックを使って、生徒の学びを自己評価させることによって学びをサポートしてあげるといったことだ。また、カリキュラム・マネジメントができているかを授業レベルで確認する場合、他教科との連携、総合学習との関連性なども問わなければならない。また、教科ごとの学びにおいても、例えば、習得の段階が終わって活用の段階では、パフォーマンス課題を入れて、習得された知識・技能を活用し、子どもたちの思考、考えを表現させようといった、子どもたちの学びのステージを意識することも大切である。授業計画においては、学校の教育目標や他の単元との関連性を考慮せずに、学習目標が単発で構想されてしまうと、いわゆる本時主義に陥って、子どもたちの学びは、つながりを欠いた知識の断片になり、生きた学びにつながらないものになってしまう。授業構想においてもカリキュラム・マネジメントの意識を持って、学校の教育目標を意識し、他の単元や教科特有の見方、考え方を活用して、どのようにこの学習単元を考えさせるか、また具体的に教科で育みたい力にどう落とし込んでいくかを戦略的に意識化できることが重要である。

これからワークとして参加の先生方の自校のカリキュラム・マネジメントの現状分析を10分程度で行い、その上で、他校の先生方とシートを交換して、簡単に自校のカリキュラム・マネジメントの進捗状況を振り返り、他校の先生方と情報共有を行っていただきたい。（ワーク）

私学独自の建学の精神を具体化した教育目標というベクトルを、学校関係者が共有し、その実現のために全てのカリキュラムを連動させ（つなげて）、その教育目標を教員、生徒、保護者が意識化できる施策を取るといったことが、ポストコロナ社会で持続的に発展する私学教育のカリキュラム・マネジメントであり、このような具体的な戦略によって、私立学校としての使命と価値を実現することができると思う。

「他教科と連携して利用できる理科の教材開発とその実践」

(東京都) 早稲田大学高等学院 教諭
竹田 淳一郎

【実践の概要】

現在、中等教育での各教科の学習内容は文部科学省が定めた指導要領で決められている。しかし、複雑化、グローバル化が進む現代社会においては教科ごとの縦割り学習では問題解決をする上で不十分なことが多いため、各教科が横の連携をもって教育に取り組むことが有効であると考えた。そのため実験を行うという理科の特性を活かして、理科主導で他教科と連携して使用できる教材の研究と開発を行い、実践を行って教育効果を確認した。

1 英語科との連携

理科は国語や社会に比べても英語を導入しやすい教科といえる。海外の高校生が使っている洋書の理科参考書を探すには、アメリカの Amazon にアカウントをつくり国際便で送ってもらうことが手間もかからず有効である。特に Barron's Review Course Series の Let's Review Chemistry/Physics/Earth Science はイラストや例題も充実しているため活用した。

本校では SSH (スーパーサイエンスハイスクール) に指定されていた経緯があるために、ネイティブの教員と協力して放課後の実験講座を行った。当初は化学実験の 2 講座だけであったが、物理と生物の実験講座も行うことができた。図 1 は化学の講座の様子である。

具体的な内容は、実験に使用するプリントを前述の洋書などを参考にすべて英語で作成し、生徒は辞書でわからない語句を調べ、解説を聞きながら実験をするスタイルとした。偶然であるが本校のネイティブ教員は大学時代の専門が生物学であるため、生物の実験講座はネイティブの教員主導で行い、化学と物理の実験では日本人教員が主導した。細胞小器官や実験器具の名前など既習の内容も英語で改めて学習することは生徒にとって良い体験となった。

また、本校と提携しているオーストラリア、マンリー校から高校生が来校したときには本校の中学 2 年生と合同授業を行った。図 2 はその様子である。

授業の内容は中学 2 年生の教科書に基づいて天文のスライドを英語で作成し、発表者が簡単な英語で解



図1 硫黄の同素体の作成

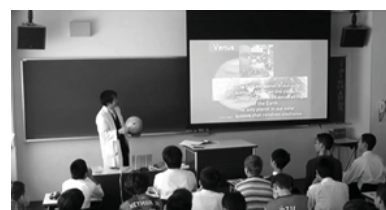


図2 日豪の生徒の合同授業の様子

日付 (火曜5, 6限)	授業のテーマ	実験の有無	英語導入の有無
1	4/14 無機化学	有	無
2	4/21 高分子化学概論	無	無
3	4/28 共重合	有	共重合の材料名を英語で
4	5/5	こどもの日(祝日)	
5	5/12 合成繊維	有	実験プリントを英語で作成
6	5/19	校外活動	
7	5/26 イオン交換樹脂	有	無
8	6/2 糖とデンプン	有	無
9	6/9 糖とデンプン続き	有	実験プリントを英語で作成
10	6/16 アミノ酸、タンパク質	有	無
11	6/23 ゴム	有	無
12	6/30 英語と化学	無	海外の教材を使用
13	9/8	特別考査	
14	9/15 副反応と電子軌道法	無	無
15	9/22	国民の祝日	
16	9/29 有機機器分析	無	英語の動画を利用
17	10/6 脂肪族化合物の同定	有	無
18	10/13	学園祭の振り替え休日	
19	10/20 有機反応メカニズム1	有	無
20	10/27 有機反応メカニズム2	無	無
21	11/3	文化の日	
22	11/10 有機反応メカニズム3	有	無
23	11/17 有機反応メカニズム4	無	英語の合成スキームを使用
24	11/24 有機反応メカニズム5	有	無
25	12/1 まどめのテスト	無	SATを参考にしてテスト作成

表 化学1 (火曜日5, 6限) のカリキュラム

説をした。合間に Youtube や字幕付きの洋画を挟むことによって日豪の年齢差のある生徒が飽きないように工夫した。

高校 3 年生の選択の授業では、有機化学の発展的内容を学習する化学 1 という講座で、授業にどれくらい英語を導入できるかを研究した。実験プリントを英語で作成する他に、アメリカの Amazon で販売されていた高校生向けの化学をテーマにしたボードゲームを授業中に実施したり、19 回目には SAT (Scholastic Assessment Test 大学進学適性試験) をモデルにしたすべて英語の学期末試験を生徒に課した。生徒からは難しいところもあったが、1 年間受講してみてもためになる授業だったという感想が得られた。表に、実際のカリキュラムを示す。

2 社会科との連携 (コロナ禍の影響を踏まえて)

本校は早稲田大学の附属校であるために、休耕期間中には早稲田大学が導入している e ラーニングプラットフォームである Waseda Moodle が使用できた。そのため、「戦国時代を科学の視点でみる」というテーマで特別授業を設定し、空き時間で見てもらおうようにした。具体的には、桶狭間の戦いを当日の気象を信長公記の記述などを参考にして紐解いていく「桶狭間の戦いをサイエンスの視点で再考する」、長篠の戦いを地形や火縄銃の特性などから科学的に考える「長篠の戦いをサイエンスの視点で再考する」という 2 講座を用意し、自由に見てもらおう形式とした。自由視聴としたために、対象学年の約 1 割の生徒しか視聴してくれなかったが、視聴した生徒のアンケートの結果は好評であった。

3 技術家庭科との連携

本校にある 6m×10m の畑を利用して、技術科と中学理科で連携して大根の栽培を行った。大根を選んだ理由は秋から栽培を開始して 1 月終わり頃には収穫でき、失敗が少ないからである。技術の授業でも大根の根・茎・葉の違いや植物学的な分類などを学ぶことで、中 1 の理科 2 分野で学んだ内容を再確認させることができた。図 3 に生徒が畑を耕して畝を作っている様子を示す。

さらに、畑の作物のように時期に左右されず、狭いスペースで使用できる教材としてシイタケ栽培キットを検討した。このキットは通信販売で、1300 円程度で販売されているシイタケの菌床であり、水を吸わせるだけで発芽を始め、10 日程度で収穫できる。短期間で時期を問わずに栽培できるために教材として利用価値は高いことが分かった。

4 数学科との連携に関する基礎研究

高 3 の選択授業でピンポン玉 (直径 40mm)、フロックボール (色のついた発泡スチロールの球、さまざまな色・サイズがある) とグルーガンで結晶格子の模型を作成した。結晶格子は原子半径や単位結晶の大きさを求める際に数学の知識が必要であり、数学科と連携できる可能性がある。図 4 は生徒が結晶格子の模型を作っている様子である。

5 まとめ

今回の実践で、理科の授業において様々な教科と連携して使用できる教材が開発できた。特に理科の授業に英語を導入することは、生徒がグローバルな視点をもつために有効であることが示唆された。



図3 技術の授業での畑の畝づくりの様子



図4 面心立方格子と体心立方格子を作る様子

教育課程部会 講演

「新学習指導要領をふまえたカリキュラム・マネジメントについて」

国立大学法人京都大学大学院教育学研究科 准教授
石井英真



何のためにどう教え評価するかを研究しており、学校でこそすべきこと・できること、学校の役割や責任をもって育てるべき資質・能力をどう捉えるか。それを実現する教育の内容、方法、評価、学校改革の在り方を研究している。医者にとえるなら、専門医として、目標分類の研究、高校での観点別評価をどうするのか、何を評価するかを考える際に目標や能力の分類（タキノノミー）が必要となり、それを研究してきた。町医者としては、国公立小・中・高校の先生方と授業を作りながら、学校改革につなげていく取り組みを進めている。目標や評価だけで授業はできないし、学校改革が進まない。授業を改善するには先生の手を伸ばす必要があり、校内研修となる。校内研修は学校のマネジメントの核に当たり、マネジメントも視野に入る。カリキュラムも授業も評価も視野を広げなくてはならない。全国の学校を訪問したが、学校には顔がある。「この学校は良い学校だな」と感じる学校がある。良い学校とはどのような学校か。このイメージが重要となる。全クラス見ていると学校の顔がよく見える。教師の学びと生徒たちの学びは相似形である。先生の学びの前向きさが生徒の学びを作る。子どもの学びの改善と教師の学びの改善をセットにすることは良い方法となる。重要なことは学校の組織的改革で現場がどのような学校を目指したいのかを語ることである。改革・改善の先にどのような授業、子どもや学校の姿をイメージするかが大事である。良い学校はその学校にいる先生が素敵に見えて、伸びていく空気感がある。学校レベルでイメージできなければ、学級でイメージできる。教室の環境や空気感が違う。伸びていく空気感を作ることが学級づくりのポイント、学校づくりのポイントとなる。ある先生が、生徒を調子に乗らせることがアクティブ・ラーニングと言った。ポイントは舞台づくりで、調子に乗せるために舞台に乗せると伸びてくる。学校経営も学級経営も授業も舞台づくりは重要である。観点別評価も同じである。観点別評価は、今までの定期テストの舞台は物足りない。部活動の評価はテストではなく、試合である。試合は見せ場で、舞台があるから伸びる。教科指導の舞台は定期試験である。定期テストをやめた話もあるが、単元単位のスパンでは良いが、長期スパンで見ると弱点がある。人間は節目を作らないと伸びない。中間・期末テストは節目だが物足りない。知識・技能はペーパーテストでよいが、思考・判断・表現等は実力を発揮できる舞台が必要である。その舞台づくりが学校経営、学級経営では授業づくり・評価の核となる。良い学校を作るポイントはカリキュラム・マネジメントがベースとなる。今回の学習指導要領改訂はトータルな改革である。内容・方法・評価をトータルに行うにはリソースをマネジメントしていくが必要になる。カリキュラム・マネジメントは、アクティブ・ラーニングと車の両輪と言われる。結論は、点の授業改善でなく、面の授業改善である。カリキュラム・マネジメントで内容の関連付け、課題研究、総合学習を教員チームで行う部分もあるが、軸は学校が授業やカリキュラムに取り組んでいくチームとなっているかである。特に高校のアクティブ・ラーニングは個人技を競っていないか。高校はプロ教師・カリスマ教師を作りがちで、点の授業改善の傾向がある。個人技を磨いても学校全体の改善につながらない。授業改善は最大の生徒指導だが、面の授業改善に至っているかという条件がある。面の授業改善で難しいことがビジョンの対話的な共有と教師が本業で協働し対話する場づくりである。荒れている学校は改革をやりやすい。改善を考えるからである。荒れたものを立ち直らせ、授業改善するという2段階では授業改善へのモチベーションがなく失敗する。小学校は学級の壁、中学は教科の壁、高校は教科内の壁が高い。壁を取り払う時に授業スタイルから入ると抵抗があり、形だけの改善となり、手法主義になる。どのような生徒を目指すのかという願いを先生が議論し、共有していく。進学実績が高い高校や荒れた高校は授業改善のきっかけが生まれるが、その中間の高校は大変である。先生が校内研修に集まらない。しかし、生徒の課題を聞くとよく話すので生徒のことは考えている。新しいことを始めるとベテランは抵抗勢力とな

りがちだが、長年の経験で、授業を見る目、生徒を見る目は確かである。授業改善は「古い」「新しい」を分断してはいけない。そのためには同じ生徒を見ると共通していく。主体性が学校教育目標に挙がり、校風につなげ、スクールミッションも結びつけ、どのような学校、生徒を目指すのかをボトムアップで対話的に共有する。

批判的思考力、課題達成力といった資質・能力に碎きすぎて全体が見えなくなる。レーザーチャートは5観点くらいで行うが、それでは生徒の姿は見えない。授業研究をうまく使う必要がある。研究授業後の協議でPDCAサイクルにすると学びにならない。改善の方向になるからである。学びはやり放しでなく、振り返りが必要となる。大人の学びでリフレクションが必要な理由は大人が経験から学ぶからである。経験から上手に学ぶ人間は確実に伸びる。大人の学びのポイントは学んできたものを学びほぐすことである。PDCAサイクルでは自分の枠の中しか見ない。実践は先に進める傾向に陥る。一旦立ち止まり、回り道をするのが学びである。回り道し、違う視点を得て、枠組みが組み変わることが伸びしろであり、学びの基本となる。立ち止まると、生徒理解、教材理解、授業理解につながる。授業研究とは事例研究であり、力量の違いは見え方の違いである。経験ある先生はいろいろなものが見え、そうでない先生は表面的なものしか見えない。

主体的とは分かっているようでずれがある。実際の子どもの姿で理解し直していく。コロナ禍での主体性は自習できたかという教師にとっての都合の良さである。ビジョンの対話的な共有と先生が授業研究で学び合う場を作ることのセットが大事である。

課題研究はいろいろな資質・能力のレーザーチャートの先に目指す子ども像がある。その像を具体的に語ることがカリキュラムになければならない。課題研究でよく見るのは、パッケージをこなすだけで点が線になっていない状況で、レントゲン写真のようなレーザーチャートだけみて生徒が見えない。学校改善でも生徒の姿でビジョンを語り、先生方の学びの中で意味を確かめていくことが重要で、カリキュラム・マネジメントの軸になる。

今回の学習指導要領改訂で高校の先生が学習指導要領を見る機会が増えた。高校の場合、ほぼ大学入試に向いており、見ることは少なかったと思う。今回の改訂は入試改革を連動させている。大きく変わる学習指導要領の方向性をどう見極めるか。新学習指導要領では言葉が踊り、言葉に踊らされている。「言葉が踊り」はキラキラキーワードが多いこと、「言葉に踊らされる」は、授業観である。7年前は小学校、中学校、どの教科を見ても言語活動の充実であった。それが5年ほど前、アクティブ・ラーニングになった。新学習指導要領が出る時、主体的で対話的で深い学びに変わった。さらに学習指導要領が本格実施される時期に、個別最適化された学びが出てきた。5年間でキーワードが変わっていった。キーワードが変わるが、改革の基本的な方向性に変化はない。社会の変化で学校や授業のあり方は間違いなく変わったが、ベクトルは変わらない。大学入試改革は記述式問題に目を奪われているが、求められる思考や頭の使い方が全然違う。初等・中等では全国学力テストB問題の問い方にシフトし、公立高校の入試も活用型、B問題を意識した出題だが、記述かどうかは問題ではない。センター試験は記述でないから理解度を見ていないと言うが、その試験問題は暗記だけでは解けず、思考を捉えている。各大学は専門的な読み書きの力、論述する力を見ることにシフトし、最終的に特色入試枠のような本当の意味でのAO型の枠が拡大していく。大きな学校改革のベクトル自体は変わらない。入試改革も、後退したように見えるが、実は大きな動きの変化はない。改革の表面だけを見てはいけない。改革の根を押さえることが大事である。

高校では評価が話題となる。アクティブ・ラーニングの評価や主体的で対話的で深い学びの評価という言葉を使う先生も多いが、相応しくない。アクティブ・ラーニングかどうかを評価することに意味はない。アクティブ・ラーニングで何を育てたいのかであり、ねがい・目標である。アクティブ・ラーニングや探究的な学びの評価が難しい理由はそれらを通じて、育てたい生徒の姿やイメージがはっきりしていないからである。はっきりすれば、それを可視化すればよい。

指導と評価の一体化と言うが、それよりも前に、目標と評価の一体化を考えることである。こういう生徒を育てたい、授業の中でこれを身に付けさせたいと子どもに働きかければ、先生は実際うまくいったか生徒を確かめようと思う。それが評価である。目標を明確化すれば自然と評価的思考はついてくる。

観点別評価で難しいと感じる理由は評価と評定を混合するからである。形成的評価、総括的評価があるが、形成的評価は指導の改善が目的である。授業を進め、アクティブ・ラーニングで理解したと思ったが、テストでは

残っていないことがある。狙い、目標を全員で実現するためには全数調査で見る必要があり、これが総括的評価、評定である。

観点別評価で全部記録を取らなければいけないと誤解されているが、誤った日本型観点別評価である。観点別評価の一番シンプルな形は大学のシラバスのペーパーテスト3割、レポート7割といったものである。評価と評定を混合するから評価には記録が必要と勘違いする。指導改善のためのもので評価に記録の必要はない。今回の観点別評価で評価したのは評価欄と記録欄を分けたことである。記録すべきは目標であり、評価の問題は最終的には「ねがい・ねらい」「目的・目標」の問題である。

アクティブ・ラーニングがキーワードになっているが、大事なのは資質・能力をどう捉えるかである。主体的で対話的で深い学びも併せて、資質・能力とは何か、深いとは何かを必要以上に解釈し過ぎないことである。それよりも、なぜこの言葉が使われているのかである。学校の役割を広げられないかという意図がある。今回の改訂は文部科学省がよく考えて作っている。入試改革も含め、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」をトータルに変えていく。その先に目指すのは、「社会に開かれた教育課程」である。どうつながるのかが、きれいにつながる。今回の学習指導要領の改訂は、先進諸国で共通する傾向だが、コンピテンシー・ベースという改革の日本バージョンである。コンピテンシーとは社会で求められる実力である。社会で求められる実力のため、学力観を従来の教科内容に即して育成される認知的な能力より広げよう、非認知的なものも含めて幅を広げようということになる。以前は学力と実力は切れていても良かった。OJT (On the Job Training) が生きていたからである。それに対し、グローバル化が突き付けたものは、人材は自分のところで育てる必要がないということである。リクルートしてあげればいい。企業側が自分で育てることがコストと考え始めた。結果、大学までで社会でもものになる人を育ててくれということである。コンピテンシー・ベースは幼・小・中・高・大の社会人に至るまでの壮大なキャリア教育と言える。これに対して、経済的に潤うかではなく、「市民として」という視点も重要である。自分の人生のキャリアを遊びも含め、デザインしていけるか、より良い人生を創っていけるかが大事である。そのような学校教育になっているのか考えてみてもよい。

働き方改革と言うが、教科だけでなく、行事、特別活動、総合的な学習時間で責任を引き受けてやりきる経験を日本の学校は持っている。自立に向けて責任を引き受ける感覚を学ぶことができる。しかし、社会問題に対して、自己で判断していくことも必要となる。そこは教科で責任持たないと難しい。社会科は社会を読み解くための眼鏡である。ニュース見て、引っかかるかどうかである。概念として学んでも眼鏡として学べていないこともある。授業は、学校や授業の外側の生活や休み時間の過ごし方を変えるために行う。授業の中に生活、生きること、社会への窓が開いているかがポイントである。授業とは学びへの導入、生きることへの導入である。それこそ本来のアクティブ・ラーニングの意味である。学習への主体性とは別に、社会、生きることへの主体性につながるかを問うことが一人前につながる教育になる。ビジョンを考える時、学習指導要領の根にある一人前形成の課題をどう引き受けるか。カリキュラム・マネジメントとは目の前の生徒に即して願いを持つことであるため、学習指導要領の改訂の根を掘り下げて話したが、実力との関係で学力を問い直す時、教科に即してどう考えていけばいいのか。これまでの教科学習は「できる」、「わかる」の2層の学力論だった。できるだけではなく、わかってできないといけない。しかし、もう1層ある。内容が深くわかっていても状況に合わせて使いこなせるとは限らない。ここが問われている。日々の授業では「わかる」ことを大事にし、折に触れて、使えるレベルを意識し、実際に作って表現、展示を行うことができる。定期テストのタイミングで3層目を視野に入れた豊かなペーパーテストと、使えるレベルを共同的な学びやプロジェクト学習と結びつけてダイナミックに展開し、表現、発表で実力を試していくことで子どもの力を伸ばしていく。資質・能力ベースを3層の関係では、知識・技能、思考・判断・表現、学びの態度、知識と考える力と態度を豊かな学習をくぐらせることにより、生きて働く知識と考える力と態度に変換していこうという方向性が見える。まさに、使えるレベルに届く知識と考える力と態度を育てていこうというメッセージが、資質・能力の3つの柱にも盛り込まれている。

教育課程部会 実践発表Ⅱ

「高大連携に基づいた主体的学びの育成をめざして」

(秋田県) ノースアジア大学明桜高等学校 教諭
鈴木 健 樹

教育課程部会の実践報告Ⅱとして、開催県を代表し、ノースアジア大学明桜高等学校が現在行っている教育活動を紹介する機会を頂きました。発表の後にも、ご質問や温かいお言葉を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

ノースアジア大学明桜高等学校を運営している学校法人ノースアジア大学は、「真理・調和・実学」の建学の精神のもと、明桜高等学校の他、ノースアジア大学・秋田看護福祉大学・秋田栄養短期大学・附属さくら幼稚園・附属のびのびこども園と、5つの学校を運営しています。明桜高等学校は、「努力が人を作る」「情熱と闘志で最善を尽くす」の校是のもと、多くの卒業生を輩出してきました。生徒数は県内最大規模で、部活動も盛んであり、硬式野球部やサッカー部、吹奏楽部をはじめ、多くの部活動が県内屈指の強豪校として活躍しています。進学指導にも力を入れ、近年では卒業生の多くが四年制大学へ進学しております。

本校は普通科に特別進学コース α ・特別進学コース β ・文理コース・総合研究コースの4コースを開設しております。教育課程はコースによって異なり、例えば、特別進学コース β は平日8時間に加え、土曜日にも3時間の授業を行う一方で、その他のコースでは授業時間を抑えているため、部活動に参加しやすくなっています。また、総合研究コースには学校設定科目として、通称「研究科目」と呼んでいる選択式の授業を開設しております。

この「研究科目」は2・3年生にそれぞれ4単位ずつ設定されており、「日本文化研究」「社会文化研究」「数理研究」「自然科学研究」「国際文化研究」「情報・メディア研究」「健康・スポーツ研究」の中から、生徒自身の興味関心に合わせて、一つ選択することになっています。この「研究科目」では、例えば「数理研究」では多面体のオブジェ制作を通して身近なデザインの中にある数学理論を学んだり、「自然科学研究」では野菜の栽培に取り組んだり、「国際文化研究」では英語以外の言語に親しんだり、多様な活動を行っております（発表の際には映像で、実際の活動の様子をご覧頂きました）。こうした活動の中で、生徒は教員の助言を受けながら自分たちで課題を設定し、仲間と協力しながら解決を図っていく姿勢を養っています。年度末に研究の成果を発表する会を開いておりますが、準備にも効率的に取り組み、プレゼンテーション能力も上がっており、1年次と比較して主体的に学びに向かう姿勢が身に付いていることがうかがえます。

本校の教育活動のもう一つの特色として、様々な場面で学園内の大学・短大と連携を取っている点も挙げられます。先述の「研究科目」でも、例えば「社会文化研究」で大学の法律学科の教員による犯罪心理学の授業、経済学科の教員による東京オリンピックと経済との関係性についての授業、「国際文化研究」で大学の国際観光学科の教員による初級フランス語会話の授業、「自然科学研究」でも収穫した農作物の糖度測定を短大の栄養学科教員の指導の下で行っております。普段の高校の授業と違い、実践的な内容も多く、生徒にとってはもちろん、引率の高校教員にも大きな刺激となっています。その他、総合研究コースの生徒以外にも、大学の教員が講師を務め、大学での学びについて指導する進学セミナーの実施や、大学が主催する文学賞・コンテストへの出品・参加など、機会があれば積極的に高大連携



の教育活動を行っています。

さらに本校では長期休業時の補習でも新しい取り組みを行っています。補習は3種類あり、それぞれ古代ギリシアの教育施設の名前を取り、「アカデメイア」「リュケイオン」「ギムナシオン」と呼んでいます。このうち「アカデメイア」は、全教員が講座を担当し、生徒が自分に必要な補習を自由に選択できるスタイルを取っています。大学入試対策としての問題演習はもちろん、難関大学受験向けのハイレベルな講義や、苦手とする生徒が多い単元を集中して講義するのものなど、受験を見据えたものも多く用意しているほか、例えば郷土の歴史を学ぶもの、理科の実験を集中的に行うものなど、より楽しく深く学習に向かうための講座も開設しています。また、国語・地歴公民・数学・理科・英語以外の教科の教員も講座を担当し、例えば音楽の理論を深く学ぶものや体育教員によるトレーニング法の紹介といった講座もあるほか、大学教員による教養講座も多数設けられております。事前にシラバスを発表し、生徒は其中で自分に必要な講座を選択し、事前に登録をします。受講当日は朝にホームルームなどに行わず、自分で掲示板を見て教場や時間の変更等が無いことを確認をして授業の部屋へ向かうことになっており、同級生とも動きが違うので、周りに頼ることをせず、大学生のように自分でスケジュールを管理する習慣も身に付いているようです。全教員が開設しているため、一つ一つの講座も少人数となるため、教員と生徒との距離も近く、普段の授業よりも対話的要素を入れられるというメリットもあります。また、「リュケイオン」では特別進学コースの生徒、「ギムナシオン」では成績不振者を対象として、従来通りの講義型の補習も並行して行っており、授業内容の着実な定着も図っています。

「主体的・対話的で深い学び」は、従来からその必要性が訴えられてきました。世界的なコロナ禍という大きな困難に直面している今、「主体的・対話的で深い学び」を通して、より確かな「生きる力」を身につけさせることの必要性は、一層高まっているように感じます。明桜高校では、「主体的・対話的で深い学び」を達成する鍵を、「生徒に、自分と向き合い課題を自ら設定する体験をさせること」と「生徒に、高等教育を体験させること」と捉え、学校設定科目・補習の活用や、同一法人内の大学や短期大学との連携強化を軸に教育活動に取り組んでいます。例えば高大連携などの取り組みは、私学だからこそ自由にできる面があるとも感じています。こうした機会に他の私学の皆さんと情報交換を行いながら、良い伝統は保ちながらも、常に変化を意識し、教育活動の改革を図っていきたいと思います。

教育課程部会

「総括」

秋田修英高等学校 校長
富 樫 義 明

秋田大会の研究目標は「新しい時代のリーダーを育てる私学教育」。そして当部会は「新しい時代に向けた私学の特色あるカリキュラム」を研究目標に開催されました。この変革する社会を切り開くリーダーを私学が育てるための特色あるカリキュラムを作る手がかりになる機会となれば、という思いで準備をしてみました。いかがだったでしょうか。

総括と言いましても、当部会の中身の濃い講演、実践発表をまとめることはなかなか困難ではありますが、少し振り返ってみたいと思います。

当部会はグループワークを含む講演と実践発表が午前、午後、それぞれ1つずつ行われました。最初の広石先生の講演はコロナ禍が突きつけた学校の課題を様々あげられ、ポストコロナ社会でも私学は建学の精神を見える化したカリキュラムマネジメントを基軸とする教育方針の下に、公立学校にはないイノベーションを確立していかなければならないというお話を頂きました。また午後の石井先生のご講演は年次進行による実施が間近に迫った新学習指導要領の改訂の本質について様々なキーワードをあげながら中身をお話し頂きました。舞台作りが学校改革の原点であるという言葉が印象に残っています。実践発表Ⅰの竹田先生は化学担当の先生が英語、社会、技術家庭、数学など、他教科と連携して素晴らしい教材開発をしているというような内容で、私としては聞いたことのないような実践発表をお聞きしました。実践発表Ⅱの鈴木先生は、高大連携に基づいた主体的学びの育成という内容でした。カリキュラムマネジメントを意識した、育成を目指す7つの力をイメージして、その上でコース制や学校設定科目の研究授業、法人の中の大学との連携、特色ある補習授業等の中身のある発表を頂きました。特色あるカリキュラム編成のポイントともなるカリキュラムマネジメントをうまく機能させるには1つには生徒の実態を全職員で理解し、共有する。また、育成すべき資質・能力を明確化し、具現化する。そして教科等の内容について相互の関連付けや横断を図り、各教科等の内容と教育課程全体とを包括させる。さらに日々の授業等も教育課程全体の中での位置づけや育成すべき資質・能力を意識しながら取り組む必要があると一般的にいられています。何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶかということがキーポイントです。この部会に参加された先生方が本日の学びを持ち帰って、校内でそれぞれ共有し、それぞれの学校の建学の精神を核にした新しい時代の特色あるカリキュラムを創造されることになれば開催県としてこの上ない喜びです。

最後にコロナ禍の中、70名を超える先生方の参加、そして専門委員、運営委員の先生方に感謝とお礼を申し上げます。そして、秋田大会の熱気が次期開催の京都につながることを祈念し、総括と致します。



特色教育部会

現在、「コンピテンシー」に基づく教育改革が世界的潮流となっている。コンピテンシーとは、多様性が増した複雑な社会に適合するために、単なる知識や技能のみならず、特定の文脈の中で複雑な要求・課題に対応できる力を意味し、そのもととなるものが「21世紀型能力（スキル）」として定義づけられている。日本においても、「人間力」など、人間関係を大切にしながら集団で協力して課題を解決していく力の育成が急務である。

21世紀型の新しい教育（STEMあるいはSTEAM教育）が世界各国で導入され始めた今、思考力を関連づけ、人との関わりの中で課題を解決していく力とリーダーの育成をめざし、「探究活動」「21世紀型教育」をキーワードとして考えていきたい。

- 1 研究目標 21世紀型教育に基づいた新時代のリーダー育成
- 2 会場 秋田キャッスルホテル 4階 矢留の間
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、教員
- 4 参加人員 65名
- 5 日程

時間	9	10	11	12	13	14	15	16
月日	15		45	45	45	45	45	45
10月23日 (金)	開 会 式	基調講演	実践発表 I	昼食	実践発表 II	実践発表 III	研究協議	閉 会 式

6 内容・日程細目

8:30	受付 (菊地 智之・高橋 成侑)	機材担当：鈴木 颯 記録(写真)担当：藤井 春行 集録担当：藤井 春行
9:00	開会式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：佐々木朗也／記録：藤井 春行 特色教育部会運営委員長 山田 芳浩
9:15		

9:15	基調講演 演題 「これからの社会で活躍する人材・リーダーに必要な資質・能力について」 講師 福原正大 Institution for a Global society 株式会社 代表取締役社長	司会：佐々木朗也／記録：藤井 春行 講師紹介：佐藤 尚子
10:45	実践発表Ⅰ（大阪府） テーマ 「カリキュラム・マネジメントを通じたアダプティブ・ラーニング～教育のICT化に向けて～」 発表者 平井正朗 初芝富田林中学高等学校 校長	司会：佐々木朗也／記録：藤井 春行
11:45	昼 食	
12:45	実践発表Ⅱ（秋田県） テーマ 「高大連携に基づいた主体的学びの育成をめざして」 発表者 佐藤尚子 ノースアジア大学明桜高等学校 教頭代理	司会：佐々木朗也／記録：高橋 成侑
13:45	実践発表Ⅲ（東京都） テーマ 「気づきから実践まで繋げる 21世紀型心の教育法その後の展開」 発表者 山名和樹 聖徳学園中学高等学校 スクールカウンセラー	司会：菊地 智之／記録：高橋 成侑
14:45	研究協議（全体会） テーマ 「各校の特色ある教育の取り組み」 ・具体的実践例の紹介・共有 等 ※参加された先生方の学校で実施されている特色ある実践の発表 （発表は事前アンケート調査を参考）	司会：菊地 智之／記録：高橋 成侑
15:45	閉会式 1. 開式の辞 2. 総括 3. 閉会の辞	司会：菊地 智之／記録：高橋 成侑 特色教育部会運営委員長 山田 芳浩
16:00	解散	

7 講師・パネリスト・コーディネーター（順不同）

福原正大 Institution for a Global society 株式会社 代表取締役社長

平井正朗 初芝富田林中学高等学校 校長

佐藤尚子 ノースアジア大学明桜高等学校 教頭代理

山名和樹 聖徳学園中学高等学校 スクールカウンセラー

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長	山田芳浩	ノースアジア大学明桜高等学校	校長
副委員長	佐藤尚子	ノースアジア大学明桜高等学校	教頭代理
委員	鈴木 颯	ノースアジア大学明桜高等学校	教頭代理待遇
	菊地智之	国学館高等学校	教諭
	高橋成侑	秋田令和高等学校	教諭
	佐々木朗也	秋田修英高等学校	教諭
	藤井春行	聖霊女子短期大学付属高等学校	教諭

特色教育部会 基調講演

「これからの社会で活躍する人材・リーダーに必要な資質・能力について」

Institution for a Global Society 株式会社 代表取締役社長
福 原 正 大

慶応義塾大学では全学生が最新のプログラミングや、量子コンピュータに触れることができる仕組みとなっている。平均的な文系大学ではもはや社会では役に立たないため、理系的センスのある生徒を育てるためである。文理関係なく、世界で必須の強さという思考のベースを作ることに急速に舵を切っている。

リーダーは日々意思決定の連続になる。そこでは人間と AI はどちらが優れているか。人間の脳は新しい情報を排除しやすく、最初の考え方、これまでの前提に引っ張られる。Monty Hall 問題という問題があり、人間の意思決定の上限を示している。生徒達は AI と暮らしていくが、人間のできること・できないこと、得意なこと・苦手なことを切り分けて考える必要がある。人工知能の分野に強化学習がある。囲碁のソフトウェアが世界最高の囲碁のプレーヤーに勝ったが、強化学習が使われた。医療や創薬の世界でも使われ始めている。

人間のあらゆる領域に AI が入る。これは現時点のレベルである。生徒は 10 年、20 年後の社会で活躍する。その未来はもっと違う世界であり、どのような教育をすべきか考えていく必要がある。計算機等は人間の脳を超える部分を計算してきた。人工知能は計算機がよくなったレベルと考える方が自然だ。ただし、算盤を学ばなくなり、暗算を捨てた。新しい技術で捨てる学びもある。何かを加えると何か落とさないといけない。日本の教育は新しいことを取り入れるが、落とすところを明示せず増えていく。人間は 24 時間の限定的な世界で生き、AI とは違う。何を捨て加えるかを考えなければならない。どの程度捨てられるか、これが差別化のベースである。技術の発展で学ばなくてもよいものを考え、新しいものを入れることが特色を出すために必須である。学習指導要領の縛りは思い込みが強い。思い込みを捨て、落とすことが重要になる。AI はデータがないと動かない。スマホで莫大なデータが手に入るが、膨大なデータでは AI が本領を発揮する。人間が可能なデータ量の何億倍レベルを解析できる。技術は先に進歩するが、技術を応用するには人々が社会に入れないといけない。その時にアーリーアダプターがいて、周りの人達が影響を受け、変化に 10 年以上かかる。この 6 カ月間で社会は 10 年分の経験をした。コロナ前後の社会は全く変わり、今の生徒が社会に出る時は全く違う世界である。前の教育と同じでよいはずがない。不変のところもある。教育において、変わるところ、変わらないところをどう分けるかを考えないといけない。

学校でプログラミングを入れているが、社会が動く中、必要なコーディングと必要がないコーディングが出てきている。プログラマーが不要になると言われている。急速に変わる中で、未来を見据えずに技術に飛びつく突拍子もないことが起こる。教えることはよいが、単なるコーディングだけでは意味がない。プログラムを通じ、論理性を身に付け、想像力を身に付けることに意味がある。順番を間違えてはいけない。プログラマーが教えるのは怖い。プログラミングは数学の先生が「証明」の時に教えればよい。証明問題のように一生懸命になる。それで論理性が身に付く。世界の中で日本のように厳格に科目の概念を残している国は減った。文部科学省が言う教科横断のように、違う科目の先生方が共に授業をする時代である。つまり科目という切り方自身が AI 等のデータがない時代の産物であり、大きな問題である。理系の人でも文系的な要素、文学とか人の気持ちが分かることは重要である。文系の人でも人工知能の中の自然言語処理という言語処理ができなければ役に立たない。日本の企業が世界の競争力をなくしているのは技術職とそれ以外の人に分かれ、コミュニケーションが互いに取れないからだ。これは世界でもレアなケースである。人間社会は技術だけで動いていない。人間が中心でないといけないが、理系的なセンスが強すぎて、人間から離れていっている。



世界の中で日本はイノベーションに乗り遅れ続けている。プログラミングを学ばせると言うが、GAF、Google、Facebook は昔からやっていた。後追いをしても既にレッドオーシャンの世界に入っている。日本に少ないだけで世界では人材は十分そろっている。世界の興味は持続可能な社会をどのように作るかである。理系と文系を組み合わせ、社会課題を実際に解決させるかというベースをどのように中学高校で興味に合わせて作っていくかが世界で一步先に動き出している。世界人口が 80 億人近い社会と大きく呼応して生きていくためにこのような社会のムーブメントと離れることはできない。世界のトップ 50 の企業は平成末にトヨタ 1 社になった。これはまさに理系文系を分けた弊害と大学をモラトリアムと勘違いした子ども、それを許容する保護者というあらゆる意味の負の相関が起こった結果だ。日本の小中高校の教育は決して悪くなく、ベースをしっかり作っている。ただ、最後が悪い。そこで世界と戦えない。日本の学校の先生方の潜在的な質は世界のトップレベルである。ただ、過去の思い込みを捨てられない。これまでの積み重ねが頑強で次に行かない。戦後、日本の成功は日本の教育が成功したからである。しかし欧米にキャッチアップするための仕組みだった。ところがリーダーに立つと、リーダーとして新しいベースを作らなければならない。今まで日本はベースを欧米が作り、答がある問題を解いていた。しかしトップに立つと答がない。特色教育は先生方の創意工夫で何をやってもよいが、世界最先端には常に目を向けないと、突拍子もない方向に行く可能性もある。世界が大きく変わる中、中学高校は何をしないといけないのか。

最近の行動遺伝学、遺伝子工学、認知、社会科学から分かることは、人間は変わりにくいところと変わりやすいところがある。personal traits、気質と言われる。この気質は多くが遺伝子からある程度決定され、幼少期、3 歳、5 歳までに大部分が固まる。子どもを観察するとベースが変わらないと思うところが大きいがあるが、その後の教育で変わる。まずこの気質の周りを作る。これは一部が性格、あるいはソフトスキルの、汎用スキル、あるいはコンピテンシーという。コンピテンシーはあらゆるものに応用可能で、事後的に学べ、教育で得ることができる。OECD の思考力、行動力、人の話を聞く力、このような要素がコンピテンシーである。日本は知識に目を向けて、数学、英語、物理と分けている。アメリカではこのコンピテンシーをベースに切り分け、論理力を教えるために数学や物理やプログラミング、想像力を教えるために美術、サイエンス、社会というようにコンピテンシーフォーカスに徐々に変わっている。知識、スキルの陳腐化スピードが異次元の世界に入ったからである。まさに AI、ビッグデータである。これによって、今存在している仕事の約半分が、理論的に AI に置き換え可能だとオックスフォード大学と野村総研の研究で明らかになった。「理論的に」が重要である。医師、弁護士、会計士より AI の方が優れている部分が多々ある。しかし、彼らの仕事は規制で守られている。最近、医科系大学の学生がコーディングや AI を学び、医師にならない人が増えた。医師の未来をプラスに見ず、医師免許を持った上で、AI を利用した医療の世界をつくらうとしている。海外の工学部に進む子どもも増えている。可能性が高いからである。大人は今までの経験を正当化するため、変わらない選択をしがちだ。社会が常に出している正解へのサインが無視されることが多いことに気づく必要がある。アメリカ労働省の調べで 1 つのスキルで稼げた期間が 40 年から 4.2 年に落ちたと言う。AI に置き換えているからである。儲かるなら確実に AI 技術者はその世界に入ってくる。今、AI エンジニアを希望する学生が増えているのは儲かると分かっているからである。

英語を教える必要性は Case by Case である。英語が流暢だから良いビジネスができるわけではない。外向性が上手い、人の話をよく聞く、共感傾聴力がある、人と新しい関係性を作るというコンピテンシーの方が重要である。

「TOEIC、英検」は良い点数を取るスキルに走ってしまう。約 4,000 語の英単語を大学までに学ぶが、その単語をすべての子どもが学ぶ必要はあるだろうか。通訳や外交官等は必要だが、それ以外の方が多い。すべてを学ばせることなどできない。子ども達に本当に得るべき力が付いているかを考えないといけない。

リーダーはどのような能力なのか。ベースはコンピテンシーで、思考力や表現力や柔軟性、創造力、疑う力がある。重要なことは新学習指導要領にも入っている。柔軟にどのように先生方が授業をゼロベースで作直すかである。私の統計学の講義では、基本的な知識は全員に事前学習をさせ、グループ活動をした上で授業に臨ませ、それをデータ化させ、1 人 1 人の相互評価、360 度評価を授業の前後、授業中も毎週続ける。3 日ごとに 360 度評価を入れる。コンピテンシーは開発できる能力である。誰もが伸ばすことができる。知識なら今まで学歴が使われたが、知

識でない以上は代わるものがなければ評価できない。創造力という曖昧なものなら、measurement するという仕組みが必要になり、それは 360 度評価しかなく、世界標準になっている。コンピテンシーは大きく 4 分野に分かれ、認知、自己、他者、コミュニティの 4 領域に分かれる。データから他者やコミュニティの力は偏差値と一切関係しないことは明確である。今まで子ども達は、他者領域やコミュニティ領域の高い子が正当に評価されなかった。数学が苦手だと成績表が悪い。すると本人は自信を持ってない。自分に自信を持つ子は認知能力が高い。これまで、AI とビッグデータを用いて 360 度評価を簡単にする仕組みを作ってきた。360 度評価を分析するために、「Ai GROW」を作り、日本の約 200 校の学校に導入している。「Ai GROW」は生徒の資質・能力（コンピテンシー）を正確に定量化する評価ツールで、生徒がいい加減に付いたり、仲間外れにした場合にそれを検知し、そのデータを補正した上で本人にフィードバックをする。

コンピテンシーは誰でも伸ばすことはできるが、挑戦、失敗、先生方からのフィードバックが必要である。世界の企業経営者 CEO 等にリーダーに一番必要な力を問うと、1 位は正直さだった。共感、傾聴力、人のために頑張れるという他者領域が 1 位である。つまり世界のリーダーに一番評価されるのは頭が良い人ではない。リーダーは人の話を聞き、人間的に魅力的な人である。2 位は未来を見通す力。子どもの頃から、未来を見通す力を付けさせなければいけない。未来を予測するセッションを中高生向けに行った際には、創造力、ビジョンを作る時にまずベースとして思考のフレームを与えた。ベースがないと自分独自の思考ができない。考えるフレームを与えないと生徒は新しい考え方に至らない。論理性は算数・数学で間接的に学んでいるものの、脳教育や脳科学から分かったことは優秀な子どもは数学を勉強して論理性の能力が上がるが、ほとんどの子どもは機械的になる。AI と同じパターンに入りこみ、思考力が鍛えられていない結果が出ている。考えさせることを、意識的に教えるためにフレーミングをすることが重要である。

問題を予測する際に類推を立てるが、フェルミ推定の思考法が一番早い。この思考方法を繰り返すと、自分の思考法も作っていくことができ、最終的には自分の軸、考えができる。

コンピテンシー教育を行う時、育成したいコンピテンシーを定義し、施策を考えるが、事前評価で「Ai GROW」を用いて最初の生徒の能力を 360 度評価で分析し、本人、先生方に返す。そしてその施策を実施した時に意図した能力が上がっているかを考え、本当に育成したい力が伸びたか、理由、再現性、伸びなかった理由をテクノロジーの力を使い自動的に行う。事前と事後で施策は伸びたかどうかと、学力と非認知能力の関係はどうかを効果検証する。非認知能力、コンピテンシーだけでは、大学入試の変化が遅く、目的の大学に入れないので学力との関係性はどうか細かくチェックする。実証していくと、新しいものを入れるとき、何かを落とさないといけない。それはデータをベースにすべきである。勘ではリスクがある。学力とコンピテンシーの相関関係でいうと英語は表現力との関係性が近い。つまり英語の能力の高い子どもは、国語力がベースにないと困る。最近、企業で人工知能を使った AI の科目別勉強ができるが、これは一部の学生には当てはまるが、一部の学生では副作用がある。そうした学生 1 人 1 人のデータを取らないとリスクが大きい。AI の良さは効率性、一番早く結果が出るが、数学で AI が入ると、無駄を省く。つまり、数学スキルは付くが、論理性を身に付けさせられない。スキルか論理性か、数学を教える時、先生方は計算の公式の当てはめ方だけを教えるだけではない。AI のモデルを入れると全部飛ぶ可能性がある。

コンピテンシーを伸ばす教育活動にはアセスメントが必要である。評価がスタートになり、どこが強みで弱みか、どのコンピテンシーを伸ばすのか、それを生徒個別に判断していくことが重要である。

「学校で学んだことを一切忘れてしまった時になお残っているもの、それこそ教育だ」とアインシュタインは言っている。この言葉は非常に大きい。これは思考に外ならない。知識は忘れるし、AI で置き換えられる。そうすると考えないといけないことはこのコンピテンシーのコア部分をどう育てるか。そして、それはすべてアセスメントからスタートさせる。これからの時代には、数値化し、しっかりと手を打ち、それがどのように変化したか PDCA をどのように回していくかが重要である。

特色教育部会 実践発表 I

「カリキュラム・マネジメントを通じたアダプティブ・ラーニング ～教育の ICT 化に向けて～」

(大阪府) 初芝富田林中学高等学校 校長
平 井 正 朗

新型コロナウイルスの感染者増大と医療現場の危機的状況を受け、「緊急事態宣言」が発令された。“出口”の见えない一斉休校や活動自粛が続く中、本校でもオンラインによる様々な取り組みが進められた。学校に“来ることができない”生徒に求められるのは、規則正しい生活習慣の維持と将来の夢実現に向けた学習計画の実行。本校では2018年の学校改革時より限られた時間を有効活用して“学びの選択”を多様化、アダプティブ・ラーニング(個別最適学習)を体系化して



いる。2020年度は学習指導要領の改訂と「大学入学共通テスト」の導入などを見据えて、既存のコース・リニューアルすると同時に、学習の在り方も「自己調整学習」(SRL: Self-regulated Learning)を推奨。SRLとは、アメリカの教育心理学者であるバリー・ジーママン(Barry Zimmerman)らによって提唱されたものであり、目標を設定し、自らが学習計画の進捗状況を振り返り、さらなる学習を進めていくというPDCAサイクルを学習に応用したモデルのこと。新学習指導要領でいうと「学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」の部分にあたる。



大切なのは、学習者が困難に直面した場合、ファシリテーターとなる教師の存在。教師はコミュニケーションを通じて、指導者と学習者、もしくは学習者同士が互いに影響しあうような関係性を創り出さなければならない。学校での対面型授業に慣れている生徒にとって、環境の変化への順応とモチベーションの維持は予想以上にたいへんなことである。オンライン教材は、カリキュラム・マネジメントによるラーニング・アナリティクス(学習分析)を前提にした上でシラバス化すれば、メリットとして、①場所や時間にかかわらず、受

講することができ、自律学習の姿勢が身につく。②自分のペースで学習を進め、確認テスト等で到達度が確認できるので、理解度が不十分な場合、同じコンテンツを反復学習することができる。③文章だけではなく、動画や音声を組み合わせて作成されているため、視覚的・聴覚的な学習も可能である。④学習管理システムを通じて、進捗状況や確認テストの結果をチェックできるため、時間を空けずに復習にとりかかることができる等が想定される。

2020年度より新学習指導要領や大学入試改革など、変革期にある教育事情に対応すべく、独自のカリキュラム・マネジメントを通じ、コース再編を講じつつ、グローバル教育は、中3のロサンゼルス研修にスタンフォード大学やシリコンバレー訪問を組み込み、高1のオプション研修では従来のオックスフォード研修(約50名)にケンブリッジ研修(約20名)を追加。平常授業では全クラスにネイティブ

教員とのチーム・ティーチングを加味。また、デジタル時代に対応すべく、AIによる中高6ヵ年一貫、もしくは高校3ヵ年の数学教育はじめ、教科指導におけるICT化も拡充、経済産業省「先端的教育用ソフトウェア導入実証事業」に参画し、コロナ禍には大阪府教育センターと連携して授業動画を作成、配信した。大学受験対策は予備校講師による「はつとんゼミ」(2019～)、5教科の自主的企画による「超進学校化プロジェクト」(2019～)を継続。開校して初めて発足させた生徒会は、2019年に実施した富田林寺内町でのボランティア活動に引き続き、“はつとんプライド”にふさわしい独創的な取り組みを企画・立案している。クラブ活動では理科部と情報部の統合によってデータサイエンス部が誕生、ダンス及び茶道同好会はクラブに昇格した。改革成果は以下の通りである。

■ 大学合格実績

- ・ 合格者総数：国公立 86 名＋私立 953 名＝1,039 名
 - ➡ 国公立・私立共に増加：711 名 (2018) → 766 名 (2019) → 1,039 名 (2020)
- ・ 国公立：63 名(2018)→76 名(2019)→ 86 名(2020)
 - ➡ 現役合格者増加：49 名 (2018) → 56 名 (2019) → 66 名 (2020)
- ・ 国公立＋医歯薬系：104 名(2018)→113 名(2019)→158 名(2020)
 - ➡ 医歯薬系：41 名 (2018) → 37 名 (2019) → 72 名 (2020)
 - ➡ 医学部・医学科：2 名(2018)→8 名 (2019)→16 名 (2020)
- 九州大、大阪市大、医科大（愛知、岩手、大阪、関西、埼玉、兵庫）、近畿大等
- ・ 大阪府大＋市大＋教育大：11 名 (2018) → 18 名 (2019) → 24 名 (2020)
- ・ 有名私大 [関関同立＋産近甲龍]：377 名
 - ➡ 関西大 (73 名) と近畿大 (197 名)
- ・ 4 年制大学の指定校推薦枠：437 名→535 名
 - ➡ 39 名 (2018) → 50 名(2019) → 84 名 (2020)

■ 中学入試

- ➡ 志願者が大幅増、過去最多の 500 名を突破
- ➡ 入学者 125 名：14 年ぶりの定員充足、➡ 1 クラス増の 4 クラス編成
- ➡ 「S 特進探究コース」のクラス増設

■ 高校入試

- ➡ 専願者増（40 名以上）に伴う入学者増：275 名
- ➡ 1 クラス増の 8 クラス編成 ➡ 开学初の「Ⅲ類」の 2 クラス

特色教育部会 実践発表Ⅱ

「高大連携に基づいた主体的学びの育成をめざして」

(秋田県) ノースアジア大学明桜高等学校 教頭代理
佐藤尚子

ノースアジア大学明桜高校は、秋田市の中心部にありながら緑豊かな環境に恵まれ、大学と隣接した広い敷地の中、生徒たちがのびのび元気に過ごしている。本校の母体となっているのは学校法人ノースアジア大学で、学園内の教育機関としては本校のほかにノースアジア大学・秋田栄養短期大学・秋田看護福祉大学・さくら幼稚園・のびのびこども園がある。現在、県内外の生徒 730 名が勉強に部活に頑張っているが、このうち 80 名の生徒は強化部である野球部、男女サッカー部を目指して県外から入学した生徒で、校地内にある寮で生活をしている。



本校のカリキュラムの特徴は、特進αコースと特進βコース、文理コースと総合研究コースの4コースを設置し、入学時からコースごとに学習を行っていることである。特進コースは国公立大学や難関私立大学を目指すコースで、そのうちαコースは文武両道を目指し、部活に所属できるよう毎日7時間授業、それに対してβコースは毎日8時間＋土曜日3時間授業と、高校2年間で3年分の教科書内容を終え、また学校設定科目が多いのも特徴である。他の2コースも大学進学に対応しており、週2日間は7校時授業、3日間は6校時授業となっている。

本校の教育の特色は次の3つである。

1	総合研究コースの「研究科目」
2	学園内大学との強力な「高大連携」
3	本校独自の補習カリキュラム

①総合研究コースの「研究科目」は、生徒自身が主体的に選んだ、学びたい研究科目を2年次と3年次の2年間継続して学ぶもので、週2日木曜と金曜の午後に2時間ずつの4単位。内容はどれも教科書を全く離れたユニークなものとなっている。

7つの研究科目があり、具体的内容は次の通り。

研究科目名	主な内容
日本文化研究	朗読や話し方の練習・文学鑑賞・書道など（アナウンサーによる講義あり）
社会文化研究	経済や法律の学習を通して世界や日本、秋田県の将来を考える
数理研究	身近にある数学の考え方の発見や活用・多面体の作品制作
自然科学研究	実験や観察・野菜の栽培・収穫野菜の調理や糖度実験・レポートの作成
国際文化研究	英語以外の言語の基礎学習・グローバルなテーマでの探究学習
情報メディア研究	文書処理や情報処理・ワープロ検定・商品開発テーマの探究学習
健康スポーツ研究	強化部のトレーニング

②こうした研究科目の中では、学園内の大学・短大の先生方による出前授業が頻繁に行われている。年度当初にシラバスを作成し、各研究科目で様々な時期に多様なテーマでの出前授業が計画され実践される。これが本校の特色教育の2つ目「高大連携」である。

出前授業のほかの高大連携としては、大学が主催する全国の高校生対象コンテストへの応募や、年に1度の「研究科目発表会」に大学教員も参加し講評を頂くこと、また「ノースアジア大学文学賞」への応募に向け本校生全員がエッセイを書くこと、

本校生と大学生一緒にボランティア活動などがある。こうして本校生は様々な機会に、同じ構内にある大学教場を訪れる機会が頻繁にある。

③本校の特色教育の3つ目は、本校独自の補習カリキュラムである。「主体的学びを育成する自主選択型補習」で、古代アテネの教育機関から名をとり、「アカデメイア」というものである。その特徴はシステムにあり、高校だけでなく大学教員も含めて教員全員が自分の開講科目を決定。実施日時も自分の遠征や部活指導の都合を考慮して設定し、一覧表にまとめたものを生徒に提示。生徒は主体的に、自分が求める教科・内容・レベル・担当教員などを選んで受講登録をする。開講講座の内容が多岐にわたり、教科書や進度などに縛られないユニークなものが多いのも特徴である。大学教員も開講するため、高校の授業にはない多くの講座が開講されている。生徒は、自分で選んだ補習内容なので欠席することもなく、楽しんで学習する様子が見られる。また「受講日誌」により学びの振り返りも行っている。

長期休業中の補習の中心をアカデメイアとしたことで、生徒自身が今の時期の自分の学習に必要なものについて自ら考え、選択した講座内容を主体的に学習し身につけようとする意欲が生まれたように思われる。

これらの他にも、ノースアジア大学の公務員試験対策の延長上で、高校生向けにも長期休み中に「公務員試験講座」を開講しており、本校生以外にも毎回多くの高校生が受講している。また学園内の大学生が、卒業論文作成のためのリサーチとして本校生に協力を求めてくることもある。こうしてあらゆる機会に高大連携を意識して教育活動を行っているのが、本校の教育の特色である。学園内の大学・短大はどれもその面倒見の良さのおかげで、全国的にも非常に高い就職率を誇っているので、「大学へ進学し卒業後も秋田で生きていきたい」「地元で働きたい」と願う高校生達に対し安心して学園内大学・短大に進学を勧めることもできる。今後も高校と大学が連携し共に歩みながら、地元で根差した教育をこれからも続け、秋田で生きる、明るく力強いリーダーの育成を目指していきたいと思う。

特色教育部会 実践発表Ⅲ

「気づきから実践まで繋げる 21 世紀型心の教育法その後の展開」

(東京都) 聖徳学園中学高等学校 スクールカウンセラー

山名和樹

本論は平成 26 年度に日本私学教育研究所より研究指定を受けた「気づきから実践までつなげる 21 世紀型心の教育法」での研究成果とその後の展開を実践報告するものである。筆者は東京都にある私立聖徳学園中学・高等学校にてグローバル教育の責任者を務めると共に、臨床心理士として子供達への心の教育も推進している。このように一見異なる職種に従事していることからわかりにくいが、自身のテーマは常に「心」である。それが「心の授業」と名打ったものも、ここで紹介する「国際協力プロジェクト」においても主眼に置かれていることを冒頭に記しておく。



まず平成 26 年度に研究指定を受けた、「気づきから実践までつなげる 21 世紀型心の教育法」について紹介したい。研究の舞台となった中学 1 年総合的な学習の時間では、本校独自の知能訓練教育が主のカリキュラムとして実施されている。その合間に特別授業として私が担当する心の教育を行っている。この授業を舞台に、本研究では発見と行動を結びつける、新たな道徳授業体型の確立を目指した。先述したように主カリキュラムの合間に行われる本授業は連続性を持ったカリキュラム展開が難しい。そのためオンライン上に授業記録を残すことにより、次の回に内容が引き継げるのではないかと考えた。これらのことを考慮した結果、東京大学 CoREF が研究開発する知識構成型ジグソー法（以下ジグソー法）と iPad の授業導入に至った次第である。

知識構成型ジグソー法とは対話を通して学びを深める教育手法である。この手法では授業をエキスパート活動、ジグソー活動、クロストーク活動の 3 段階の場面にわけて展開する。詳細については CoREF のホームページ*1 を参照頂きたいが、まずエキスパート活動でいくつかの資料をグループ毎に読み込む。次にジグソー活動で資料毎に分かれていたグループを一つに統合させテーマとなる問いに対する解答を導く。最後にクロストークでクラス全体に解答まで導いた流れを共有するというのが大まかな流れである。

本授業でもう一つの鍵となるタブレット端末であるが、授業内では PingPong という簡易アンケートアプリを使い、生徒達が自分たちの意見を発信しやすいようにした。授業中の活動や家庭学習に関しては、Edmodo という教育 SNS を利用した。ICT の活用は時間や場所を問わない双方向のコミュニケーションを実現出来ることも魅力の一つである。道徳授業ではより多くの人たちの意見を聞き、自身の考えを発展させることが大切であると考え、この SNS を活用して近隣大学の学生と随時コミュニケーションを取れる環境を整えた。

平成 26 年には「友達とは？」というテーマで研究授業を実施した。ここでは授業内活動を 3 回、家庭学習を 2 回の合計 5 回の授業構成とした。1 回目の授業ではジグソー法への展開の事前準備として、「友達に持って欲しい、3 つの特徴的スキル」をテーマに話し合いを実施。そこで出された意見をクラス全員が獲得すべきスキルとして定めた。

2 回目の授業では、エキスパート活動として 1 回目の授業で出された「相談を受けるスキルグループ」「思ったことを言うスキルグループ」「友達と協力するスキルグループ」に割り当て、それぞれのスキルの獲得方法について話し合わせ、その内容を Edmodo 上に記述させた。

3 回目の授業ではエキスパート活動の続きとして各エキスパートグループで前回の内容を基に、どのようにしてスキルを獲得したか話し合わせた。その後、ジグソー活動へと展開。それぞれのスキルを獲得した者を集め、新たなグループを編成し（ジグソーグループ）、その方法を共有した。4 回目はオンライン上で実施。自身が当初身につけたスキルと異なるスキルの獲得状況について Edmodo で報告させた。授業最終回はクロスト

ーク活動として、授業実践前と後ではどのような変化がクラスで生まれたかをジグソーグループ毎に発表した。
この研究で明らかになった点は3つあげられる。

1. ICT を活用した授業は生徒達の学習意欲を高めるきっかけとなり得る。
2. グループ学習では教師の机間巡視が学習効果に重大な影響を及ぼす。
3. 産学連携を展開する上でコミュニケーションデバイスとしての ICT 活用は重要である。

これらの点を抑えることにより生徒達の道徳的気づきへと繋がるのではないかと考えられる。

これらの発見は高校2年総合の時間に実践している「国際協力プロジェクト」に引き継いだ。この授業では各クラスが異なる開発途上国を担当し、その国の問題を発見、解決のための行動を起こすことを目的としている。授業はPBLを基本に進められる。そのため、教師と生徒とのコミュニケーションが重要となる。また、授業の目的を達成するために国を超えた活動となること、本授業のサポートに入っているJICA元青年海外協力隊隊員や近隣大学生とも連携する機会が多いことからICTデバイスの活用は必須となる。

この授業は大まかに3段階の構成となっている。1つ目はインプットである。2019年度の担当国はルワンダ、フィリピン、ケニア、モザンビーク、スーダン、バングラデシュ、グアテマラであったが、それらの国の情報を得るためにインターネットでリサーチしたり、元青年海外協力隊隊員を招き、現地の様子について話しを聞く。それらの情報を統合した上で生徒達はその国の問題解決のための企画を練るのである。生徒それぞれが練った企画はクラス内で共有し、自身の立案した企画に5人以上の協力者を募ることができればプロジェクトとして実施することとなる。

次は自身らの取り組みについて外部有識者に発表する段階へと移る。自身らがどのような問題を発見したのか、その問題をどのように解決するのか、そしてどのような効果が期待できるのか。それらを、大学教授、国際協力専門家、企業家の前で発表する。この場を通して生徒達は自身らの取り組みが社会で客観的にどのように評価されるのかを知る。

最後は企画の実現である。国を超えたプロジェクトということもあり、実現に関して多くの問題や困難を抱えることになるが、仲間と協力しながら成功に向けて邁進していく。授業が終了した3月には自身らの取り組みを次年度実施学年となる高校1年生に向けて発表する。この授業を通して、生徒達は仲間の協力とICTを効果的に活用することにより海を超え、接することの無い人たちに対しても何かしらの社会貢献を自身らの力で届けることができるということを学ぶ。また、社会貢献が大きなテーマとなっていることから、この授業を通じ道徳心や倫理観の育成を目指すことができる。

2020年度は日本私学教育研究所より研究助成を受け、「PBL型国際協力授業における生徒達の主体性や対話を引き出すための言葉かけ」に関する研究を行っている。この研究では先に示したように生徒達の学びの効果を高めるために教師の言葉かけによる授業効果を検証し、PBL運用の為のマニュアル作成を目指している。現在明らかになっていることは、励まし、肯定、近い将来を指し示す指示（例えばテストの点に結びつく言葉など）は生徒の意欲を高める。その一方、考えを否定したり、近い将来に結びつきにくい言葉かけは動機を削ぐ結果となりやすいことが分かった。励ましの言葉は生徒によっては否定的に受け止めやすく注意が必要であることも明らかとなった。

生徒への授業アンケートと論文調査結果を踏まえ、PBLを円滑に運用する教師像は以下の事項を実現できるものである。

1. わかることには積極的に答えるが、わからないことは一緒に考える姿勢を持つ。
2. 授業時間の約半分以上は肯定的な言葉を使い、生徒達が現在学習していることが近い将来どのように役に立つのか明確に提示する。
3. 生徒に発破をかける目的で励ます言葉を使うときにはその生徒の個性を充分に見極める。

*1 東京大学 CoREF ホームページ <https://coref.u-tokyo.ac.jp>

特色教育部会

「全体会」

特色教育部会全体会を実施するにあたり、参加者に各校の特色ある教育の事例に関してアンケートを実施した。そのアンケートをもとに、6名の参加者にさらに詳しく報告して頂き、また3つの参加校からのアンケート内容を紹介した。

「ダブル・ディプロマ（DD）コース」（東京都・文化学園大学杉並中学高等学校）

本校が2015年に設置したダブル・ディプロマコースについて報告する。このコースは日本の高等学校卒業資格とカナダのブリティッシュコロンビア（BC）州の高等学校卒業資格が与えられる。カナダBC州の教員免許を保持する教員7名が本校で教えている。生徒にとっては両方の授業数になるため、かなり大変ではある。0時間目から7時間目までの45分授業という授業体系である。授業料は通常のコースの生徒より月5万円多くかかる。年間60万円に加えて、高校1年時の夏休みにカナダへのホームステイの費用60万円がかかる。そのホームステイは社会科の単位となる。高校3年時に、日本の大学でも、帰国生枠のある大学では日本の生徒及びカナダの生徒として2種類の大学入試を受験できる。もちろん海外の大学も受験している。現在、高校生1年31名、2年41名、3年41名、中学生1年62名、2年32名、3年56名が在籍している。体育と音楽は日本の授業をBC州が認めている。現在本校は1230名が在籍している。ダブル・ディプロマコースは、英語で授業を行う。ダブル・ディプロマコースは、2015年では本校が日本初のコースであったが、2019年から大阪学芸高等学校、神田女学園中学高等学校、2020年から麹町学園女子高等学校、国本学園高等学校が設置した。全部がBC州ではない。大阪学芸高等学校だけがBC州である。他の3校はアイルランド、ニュージーランド、カナダ・アルバータ州と提携。本校は2018年度から共学となったが、以前は女子校であった。高校1年生の女子生徒が1年間留学することに懸念があったため、5ヶ月の留学であれば保護者も安心するだろうということで始めた。2018年度から男子生徒も入学してきたので、本校の特色教育の1つとして、STEAM教育を始めることになった。ロボットやプログラミングに特化している。私自身としてはARTに近いものが欲しいと思うが、カリキュラムの構成が難しい点がある。さらに文部科学省の研究開発校にも登録し、カリキュラムの置き換え等について検討した。



- 質問：日本初のダブル・ディプロマコースとして立ち上げる際、苦労したことはなかったか。
- 回答：金銭面では大変であった。設置については、当時、文部科学省のお墨付きをもらっているという教育ブローカーが暗躍しており、文部科学省等に確認したが、同省からそのような方は知らないとの回答があったため、自らカナダ大使館やBC州の事務所を訪れて進めた。提出する資料がかなり多く、1年に1回のインスペクションがある。

「主体的学び」（愛知県・東海高等学校）

本校は中高6カ年の一貫教育の学校である。土曜講座について報告する。2002年に第1回目を実施し、年に6月と2月の2回実施している。愛知県と名古屋市から後援を頂き、私学助成金により運営している土曜市民公開講座というものである。特徴は基本的には1回の講座で60くらいの企画、講座が用意されており、その3分の2以上は生徒自身の企画により発案され、講師の選定・依頼も生徒が行う。実行委員会体制をとっており、中学1年生から高校2年生までが実行委員会に所属している



が、有志による活動である。当日の運営も準備から後片付けまで実行委員が行う。生徒の企画の方法であるが、生徒の、「この方の話が聞きたい」「このような内容の話が聞きたい」という素朴な発案から始まっている。過去に、ノーベル賞受賞者の益川先生、政治学者の御厨先生に講演を頂いたこともある。また、漫画家の荒木飛呂彦氏、ほとんど講演等を行わない方であるが、来て頂いた際は、知る人ぞ知るという漫画家で、大行列ができ、入場制限を行った。昭和大学横浜市北部病院の南淵先生に講演を依頼した際、名古屋から横浜まで生徒2人を引率して出かけたが、打合せのつもりであったが、到着するなり、手術室に案内され、心臓のバイパス手術の現場を見せて頂いた後に打合せを行った。インタビューに出かける生徒もいるが、帰ってきてから、どのような講座を行うのか、インタビューでどのような話をしたのかを校内向けのニュースにまとめ、事前に全校に配る。そのニュースの完成が実際にインタビューを行ったという証明になり、交通費等の立て替え分が返って来るという形となっている。このような講座をきっかけにして、自分の進路を決めた生徒も多くいる。

「労作教育」(群馬県・新島学園中学高等学校)

本校には新島農園という農場があり、その農場を使用した労働教育について報告する。本校はプロテスタントキリスト教主義の中高一貫校である。本校の基本ポリシーに教育の5原則というルールがあり、その4番目に「勤労を尊び、天然資源の利用を学ぶ」というものがある。その実現のために、労働を通しての教育プログラムを導入しようということで、13年前に始めた企画である。労働の教育は生徒が働き人、キリスト教の学校であるので、奉仕や隣人愛を唱うわけだが、その奉仕のために



働く人として成長していく。ともすれば、生徒はお客さん、消費者のように教育サービスを消費しようという発想になりがちだが、教員も含めて、一緒に何かに取り組むと、働き人として取り組む中で、自分ができない、不足している、無力であるということに気づいたときに何かしようというモチベーションが出てくるので、生徒に働く中で、自分の体内もこうなりたいが、それにはこれが必要だという気づきが与えられれば良いのではないかと始めた。新潟県の敬和学園高等学校が労作を導入していたので、それを見習うという意味から導入の試みをした。当初は周辺のボランティア清掃から始めたが、13年前に近隣に住んでいる卒業生の好意で、学園に近い場所で、比較的広い土地を借用でき、そこを新島農園、新島ファームという名で開園し、農作業を始めて行くことになった。最初は全員に携わって欲しいということで、まず中学1年生全員にサツマイモの栽培を導入したが、なかなかカリキュラムの中に浸透させることが難しく、農業体験的なものとして止まってしまったが、課外活動がしたいという生徒が20名から30名程度コンスタントに出てきて、その生徒が熱心に行うようになった。本校はキリスト教の学校のため秋には収穫感謝祭というものを礼拝の中で行うが、その時に農園で収穫した作物を使用している。また地元の醤油醸造所があり、農園で育てた大豆を使って醤油を作ることも試みた。販売できるまでのものはできなかったが、学園への寄付等の返礼品とした。しかし、3年前に土地の所有者から、諸事情により今後の借用が難しいとの連絡があり、止めざるを得なくなった。理事長が農園の存続を強く希望したため、近隣の農園を探し、今年別の土地を借用することができ、再開のため土壌改良の作業が進んでいる。現在の課題は、農園の土地改良努力と、希望者中心の課外活動に偏ってしまったので、全体のプログラムに組み入れ、労働、働きの中で自己を見つめることを生徒に浸透させていくことである。

「キリスト教 地域連携」(山形県・山形学院高等学校)

本校はキリスト教を土台に生徒を育成している。毎朝の聖書朗読、讃美歌、教師や代表生徒による奨励からスタートし、人の話をしっかり心に受け止めて聞くということを朝の段階から行う。現在、全校がチャペルに集まることが難しいため、放送礼拝としている。2年前に学科再編を行い、特別進学コー

スを普通科に設け、併せて、看護・医療技術コース、プログレスコース（普通科の普通コース）を設置し、普通科には3コース、その他に検定等取得を目的として情報科、卒業時に国家資格である調理師免許を取得できる調理科の3科の学校となっている。特別進学コースについてはプレッシャーも大きい中、学校側にも考えて頂き、高大接続という点で昨年夏には生徒を引き連れ、東京大学、国際基督教大学、関東学院大学、東北学院大学を見学し、大学訪問を行っている。また土曜日登校として午前中だけが国数英の教科、夏には蔵王で3泊4日の合宿等で学習時間の確保を目的としたコースとなっている。少数精鋭で、入試の段階で点数の良い生徒、希望した生徒から10名程度選出して行っている。調理科は1学年3クラスあり、1クラス30名程度で、全体で90名在籍している。進学3分の1、就職3分の2となっていて、調理師免許をもとに全国の調理場に就職をしている。有名な料亭などから講師を招いて、体験型の授業も実施している。食育という形で地域の農家と協力して地元の野菜や米栽培の労働体験も行っている。また地域の幼稚園児との交流として、幼稚園児の好き嫌いをいかになくすかを食育という形で関わったりしている。さらにホテルの料理長等を招いて、テーブルマナー教室も実施している。



- 質問：幼稚園児との交流は、同一法人の幼稚園で行っているのか。
- 回答：系列校ではないが、本校の理事長が理事長を務めている幼稚園である。

「探究学習」(兵庫県・神戸野田高等学校)

本校の1年生と2年生で1単位ずつ総合的な探究の時間を実施しているが、1年次は自己探究というタイトルで、「自分を知る」、「社会を知る」というコンセプトである。前半は「自分を知る」ということで、仕事調べ、職業人インタビューなどから入っていき、夏頃には学問分野の研究、オープンキャンパスに参加し、大学調べをして、大学ごとに分かれてポスターセッションまで持って行く。後半は「社会を知る」ということで、社会人を学校に招いて話をして頂いたり、大学生を招いて、大学生生活の紹介を話して頂いたりということを行っている。3学期になると自分のライフプランとしてスライドにまとめて、今後20・25・30歳の人生設計の考えを2分間で発表することになっている。いずれも調べたことをクラスで発表し、クラスで優秀な生徒は、学年発表会で発表し、1番優秀な生徒は表彰を行う。2年生は課題研究を行っているが、ユニークなのは、SDGsの17項目をユニセフが5つのカテゴリー（People－人間、Prosperity－豊かさ、Planet－地球・世界の問題を解決、Peace－平和、Partnership－パートナーシップ）に分けているが、その縦軸に本校が大切にしている学び（グローバル、未来、伝統、環境等のテーマ）を縦軸、ユニセフを横軸にしてクロスするところに、本校オリジナルの学びのカテゴリーで「長田学」という神戸市長田区の区役所と作り上げている学びがある。人類（people）と「長田学」をクロスさせたセクションのところで15名程度の生徒が1年間課題研究を進めていく。同様に最後にスライドを作って発表し、論文を作成している。



「少人数指導」(秋田県・秋田修英高等学校)

本校は秋田県内で唯一、秋田市外にある私立高校である。いわゆる過疎地域にある私立学校である。生徒募集に苦慮しており、新入生は30から40名程度である。国語と数学と英語は30から40名の生徒を習熟度別に3展開して授業を行っている。人数の割り振りであるが、生徒の学力に合わせて、あるいは希望も含めて、各班5名から15名に程度で分けている。そのくらいの少人数で授業・指導を行うことは、生徒に多くをも



たせられると考えている。生徒からの声として、学力に自信がなかったが、ゆっくり自分のペースに合わせて指導してくれるというような満足度の高いコメントがある。逆に学力の高い子どもに関しても、自分が求めている学びのペースに合わせて、どんどん先に進めることができるということで、学びへの意識を高く保ちながら、高校生活を送ることができているという感想も聞いている。課題は、「分ける」とはいえ、教科書を変えることはできないので、授業に臨む前に教科担任で教材の扱い方、取り扱い方、かみ砕き方を、各班で譲れない部分、必ず生徒に身につけさせたい力、例えば、習熟度が低いクラスに対しては、このようなアプローチの仕方での項目を教えていこうというようなことへの入念な準備が必要なことである。十分に行えているかは日々研究中であり、そのため1時間1時間が勝負だと感じている。本校の特徴と言っているが、少子化という波にのまれたような形で、自然発生的な特色ではあるが、人数が少なく、授業風景が寂しそうだなということではなく、私達は、指導する生徒が少ないということは逆にチャンスと考えている。子どもたちをどこまでも満足させてやれる大きなチャンスと捉えて、戦略化して、置かれている状況を正しく理解し、それを生徒に還元していくという取り組みになればもっと効果が上げられるのではないかと考えている。

【アンケートの紹介】

「SDGs への取り組み」(青森県・青森明の星高等学校)

総合的な探究の時間での活動において、本校の特色の一つであるグローバル教育に取り組んでおり、SDGsを知り、学び、行動するようになった。テーマは「地球とともに、地球とともに」である。目指すところはグローバルリーダーの育成とグローバル意識の育成である。取り組みとしては、①A-TED(明の星ーテッド):SDGs17のテーマから関心の強いテーマについて、自身の経験を踏まえ、調べてわかったこと、解決のために何ができるかなどを全校生徒に対して、6から7名の発表者が1人ずつプレゼンテーションし、外部審査員に順位をつけてもらうコンテスト形式で実施する。そのため発表者は数ヶ月かけて入念に準備をする。②GA-project(グローバル明の星ープロジェクト):国際貢献プロジェクト、地域貢献プロジェクト、外国語講座プロジェクトの3つのプロジェクトがある。コロナ禍で活動が難しい今年度でも、日本語が学びたいというインドの子どもたちとネットを介して週に1回程度つながり、日本語を教えている。初めのうちは教師の介入があつての活動だったが、生徒たちが自分事化できるようになり、有志のメンバーで構成されるチームSDGsがつくられ、活発に活動するようになった。有志メンバーの活動だけではなく、クラスごとに行う活動も工夫しながら取り組んでいる。もともとクラスボランティアを年1回クラスごとに行うという考え方が本校にはあり、そのクラスボランティアとSDGsが組み合うことでクラスごとの色があらわれる取り組みが展開されている。

「教科としての人間力探究科の設置」(山形県・東海大学山形高等学校)

「総合の時間」が決定された20年前より「人間力探究科」を設置し、福祉、スポーツ、自然、情報、アニメ(2020より)を選択させている。外部の教育力を導入、連携して成果を上げている。

「総合学科 地域との関連」(岩手県・盛岡スコーレ高等学校)

岩手県内の私立高校では唯一の総合科高校である。特に調理、芸術分野で強みを発揮している。調理選択では高校3年間で調理師の国家資格を取得することができる。その他、多様な学習意欲、興味関心に応える選択講座を用意している。調理選択者を中心に運営する「高校生レストラン」は毎回、受付開始直後に予約が埋まるほどの人気を得ており、地域に開けた学習成果を発表する機会となっている。

特色教育部会

「総括」

ノースアジア大学明桜高等学校 校長

山田芳浩

当部会を振り返ってみますと、最初の福原先生の講演の中では、最初に世界の変化のスピードのすごさというものを見せつけられ、私も大変驚いたわけでございます。そして、コンピテンシーがなぜ必要かということがよく理解できたのではないかと思います。コンピテンシーが学力やスキルの下にあり、それらを支えているものであるということ、そしてその内容として表現力、思考力、決断力、創造性、柔軟性、疑う力などがあり、それらを獲得する方法として、挑戦し、失敗し、それを繰り返す、先生からフィードバックをしていくということが重要であるとお聞きしました。また、リーダーの条件として、1つ目は共感と傾聴力、2つ目はビジョン、未来を見通す力であると言われました。そして、知識やスキルは5番目ということを教えてくださいました。非常に貴重なご指摘だったと思います。今、変えていくことのきっかけを作るためには何がよいかという質問に対し、教科を超えた授業の試み、いわゆる教科横断であるというご示唆を伺い、大変ありがたく思っています。



実践発表は3名の先生に行って頂きました。平井先生からは、学校のいろいろな改善例でした。1つ目は超進学化プロジェクトでの共通項として、個別最適を求めてきたという話、2つ目は有名大学での体験学習など、生徒にモチベーションを与える仕掛け作りが大切ということでした。そしてノースアジア大学明桜高等学校の発表は、7つの研究科目の中で、好きな科目、得意な分野を伸ばす工夫をしていることや、補習授業の特色として大学との連携によって、自由選択的に学べる工夫などを発表して頂きました。山名先生からはさまざまな授業の例を紹介して頂き、ICTを活用して想像から行動につなげるという生徒の可能性を広げる重要性を話して頂きました。まさに行動につなげるということが、「探求」では重要であると思います。また授業の先にあるもの、それは心の成長にあるということでした。そして最後に先生との人間関係、これを築くことの重要性をご指摘頂きました。

全体会では、参加された先生方の学校現場からの貴重な報告も頂き、心より感謝申し上げます。

以上を受けて、私なりにどのように整理すれば良いかを考えましたが、21世紀型教育、この言葉の意味するところは、今いろいろ言われており、それが先行して、内容が実際に追いついているのかどうかという思いもありました。しかし、お話を聞き、実際にそれぞれ現場で工夫されているということがよく分かった次第です。いずれにしても、様々な中身の指摘はありますが、要は子ども達の今と未来、これを明るくものにすることが私たちの至上命題ではないかと思います。それぞれが自分を変え、教育を変えていくという意気込みに燃えなければならないと思っています。これからの社会はAIが確実に人間の仕事を奪います。その中であって、その分、授業の内容、中身を濃密なものにすることができると確信を得ました。魅力的でわくわくする授業を作ることができます。そこで、リーダーを育てる21世紀型教育とは何なのかということになりますが、すでに先生方は答えをお持ちだと思います。1つは受け身ではない積極的な授業、アクティブ・ラーニングということがありますが、ただ単に体を動かせば良いというものではありません。頭、頭脳がアクティブに活性化しないとイケない。2つ目は、教師と生徒との人間関係を築いた上での双方向での心の通った授業。一方通行であれば先生は要りません。ITさえあればできるわけです。互いに思いを伝えながら、情熱を伝えていく、そうしたリアルな授業が求められている。3つ目は、学校現場は社会で自立して生きていくための訓練所でもあります。数学のように答えや正解があるものではなく、答えのない問題にもチャレンジするような生徒を育成することが重要です。総括とはならないかもしれませんが、言えることは生徒のためにこれから行わなければならないことを深く考えさせられた時間であったということは間違いのないと思います。これから皆様方が各学校で新しい試みをされていくと思います。是非今回のことを参考にして、ご活躍されて頂くよう切に願うものであります。

グローバル教育部会

Society 5.0 for SDGs の実現に向けて産学の協働が盛んである。情報化やグローバル化が進展する社会においては、多様な事象が複雑さを増し、変化の先行きを見通すことが一層難しくなってきた。

一人ひとりが持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される新学習指導要領の完全実施も2年後に迫っている。

当部会では、グローバルな視点を持ってコミュニティーを支える地域のリーダーの育成を目指した今後の教育のあり方について考えていきたい。

- 1 研究目標 グローカルリーダーの育成を目指して～グローバルとローカルを両立した人材育成～
- 2 会場 秋田キャッスルホテル 7階 アゼーリア
- 3 参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、グローバル教育担当教員
- 4 参加人員 56名
- 5 日程

時間 月日	9		10		11		12		13		14		15		16	
	15		45		45		45		15		15	45				
10月23日 (金)	開 会 式		講演 I		実践発表 I		昼食		講演 II		実践発表 II		全 体 会	閉 会 式		

6 内容・日程細目

8:30	受付 (菊地 智之・高橋 成侑)	機材担当：工藤 啓之 記録(写真)担当：市川 聖 集録担当：遠藤 文子
9:00	開会式 1. 開式の辞 2. 運営委員長挨拶 3. 運営委員紹介 4. 日程説明 5. 閉式の辞	司会：半田 隆志／記録：工藤 啓之 グローバル教育部会運営委員長 折原 順悦
9:15		

9:15	講演 I 司会：工藤 啓之／記録：市川 聖 講師紹介：折原 順悦 演題 「地域に根ざし、世界とつながる学習環境デザイン」 講師 丑田 俊輔 ハバタク株式会社 代表取締役
10:45	実践発表 I (宮城県) 司会：三浦 麻紀／記録：工藤 啓之 テーマ 「留学のより良い活用のために～日本の高校生への出発前教育への提案～」 発表者 岩崎 正彦 常盤木学園高等学校 教諭
11:45	昼 食
12:45	講演 II 司会：高安美樹子／記録：遠藤 文子 講師紹介：折原 順悦 演題 「グローバルリーダー育成への取り組み～高校、大学、そして大学生ができること～」 講師 佐藤 健公 公立大学法人国際教養大学国際教養学部教職課程 教授
14:15	実践発表 II (秋田県) 司会：市川 聖／記録：三浦 麻紀 テーマ 「世界で力を発揮～英語力を養うスーパー学習プログラム～」 発表者 工藤 啓之 聖霊女子短期大学附属高等学校 教諭
15:15	全体会 司会：遠藤 文子／記録：高安美樹子 テーマ 「私立中学高等学校におけるグローバル教育について」 指導講師 佐藤 健公 公立大学法人国際教養大学国際教養学部教職課程 教授
15:45	閉会式 司会：半田 隆志／記録：遠藤 文子 1. 開式の辞 2. 総括 3. 閉会の辞 グローバル教育部会運営委員長 折原 順悦
16:00	解散

7 講師・パネリスト・コーディネーター（順不同）

丑田 俊輔 ハバタク株式会社 代表取締役

佐藤 健公 公立大学法人国際教養大学国際教養学部教職課程 教授

岩崎 正彦 常盤木学園高等学校 教諭

工藤 啓之 聖霊女子短期大学附属高等学校 教諭

8 運営委員・指導員（順不同）

委員長	折原 順悦	聖霊女子短期大学附属高等学校	校長
副委員長	半田 隆志	聖霊女子短期大学附属高等学校	教頭
委員	工藤 啓之	聖霊女子短期大学附属高等学校	教諭
	遠藤 文子	国学館高等学校	教諭
	三浦 麻紀	秋田令和高等学校	教諭
	高安 美樹子	秋田修英高等学校	教諭
	市川 聖	ノースアジア大学明桜高等学校	教諭

グローバル教育部会 講演Ⅰ

「地域に根ざし、世界とつながる学習環境デザイン」

ハバタク株式会社 代表取締役
丑田 俊輔

2010年にハバタクという会社を設立した。教育や学びをワクワクし、創造性や多様性あふれるものにするを目的としている。多様性と創造性に富んだ共創的な学びの環境が学校の中や地域社会で湧き出するにはどうすればよいか、学校卒業後も年齢を問わずに様々な世代が学び続けるにはどうすればよいかを問いながら仕事をしている。



全国の中学生～大学生に海外研修や英語学習のプログラムを提供し、現地の教育環境と日本の若者達をつなげて、世界中を学び場にするために、「タクトピア」というグローバル教育の専門チームをつくった。地域のローカルな文化、風景、人、食べ物を切り取り自分の内面とつなげ、探究していくことを大事にしている。最近ではICTが進み、視覚や聴覚が世界とダイレクトにつながるようになったが、人間が嗅覚や触覚も含む五感で知を組み立て、信頼関係を紡いできたことも歴史的事実である。体で感じ、交流して驚き感動したことを学びに昇華することや、自分が学び探究していることが学校を出た時に世界や社会を変えていくと夢を見る体験が、グローバル視点では大事である。アントレプレナーシップという起業家精神を広く捉え、身の周りの課題や自分が実現したいことを社会や様々な人との関係性の中で解決する、あるいは社会に問題提起をする力としている。世界で学ぶ中で、見るだけではなく、自分達のアイデアや技術で現地の社会に課題を解決するヒントを見出し、町をフィールドワークしてその地域がどのような課題を抱え、どのような未来を描いているかを自分の五感で体験する。それがアントレプレナーシップのキーワードである。世界から帰ってきた若者達が、世界の環境問題を考えるという将来の野望を持つことも大事だが、まず自分のローカルな世界でアントレプレナーシップを持って何ができるかを考え、小さくても活動することも大事である。その原動力として『好きか嫌いか』は人間の原始的な感情として大切である。内面を探究し、ワクワクするとか、何とかしたいという感情があると、行動に移していく時に自分の軸となる。また、世界に飛び出すと、何を学びたい、何を届けたい、どこで学びたい、誰に教えて欲しい等の物差しで考える人が多くいる。偏差値ではない。高校生にも海外への進学など様々な選択肢がある。大学教育もどんどん変化していくだろう。中学・高等学校の教育や進路としてこれが情報交換されていくと、子ども達の未来に多様な道が開けていく。

地図上の世界ではなく、そこに生きる人達が織り成す世界、これを人はローカルと呼ぶ。世界中が学び場になり、デジタルテクノロジーが進化して、いろいろな方々とつながる時に、グローバルとローカル、両方の視点を持つと非常にバランスが良くなる。「グローバル」というキーワードを持つ時に、貨幣の経済の枠の外側にある経済圏を認知できる視点を大事にしたい。学びを得るフィールドは教室の中にも、町や世界にもある。従来型の学びはゴールを明確にし、積み上げて能力を獲得していくスタイルだが、町や世界、ストーリーに繰り出て、興味や学びを獲得し、そしてアントレプレナーシップを持って何かアクションをしていくスタイルがあり、多様な人と場所から思いや感情や知識を交換しながらぶつけあうことで新しいものが生まれ、思いもよらぬことに自分の興味が向いていく。そのような予期できない学びが、これから必要になる。

五城目小学校で総合学習の授業として年間を通じて、「五城目で世界一周」というプログラムを行ってい

る。国際教養大学の留学生達が自分の生まれ育った町、地域、小学校の話というローカルな話をして子ども達に共有してもらおう。約半年で10カ国以上の人達とリアルな関係性を持って話すことができる。次の半年間で何を学びたいかは子ども達が発案していく。世界を知ることによって子ども達は次に五城目の中に潜ろうとする。地域社会の中は学歴も所得も価値観も仕事もバラバラである。五城目の町は1万人の小さな町だが、生きる力が高く、自分で創作し、家まで造ってしまう人等もいる。子ども達がそこに目を向けると、新たな多様性に出会う。その多様性を留学生達に知って欲しいと子ども達が英語で自分達の町の面白さを紹介する。

五城目の小学校は統廃合で6校から1校になり、建て替えが行われている。これを契機に子ども達がワクワクする学校にしようとする住民達が建築に参加し、地域の次世代が育つ環境づくりの機会になっている。小学校は子どもが学校に通っていない家庭にとってもコミュニティの場だった。統廃合すると町の中心部に学校が1つになり、そういった家庭は学校と疎遠になってしまう。学びを学校の校舎を越えて地域と関連させるために、日常の中で学校空間に地域の人が存在できるかが課題となる。そのために「越える学校」というスローガンが町民から生まれ、具体的に建築に落とし込む上でのエリアを定義した。中心には地域図書室や公園があり、地域と学校を混然一体にするエリアとして地域に開かれた場づくりをする。さらに、先生達が働く姿が見えるように教員室はエリアの一番手前で、必ず皆が通るところにガラス張りで配置され、目視のセキュリティにもなっている。

多拠点居住や二拠点居住という言葉があるが、複数の地域を遊動しながら、インターネットも駆使して働いていくという暮らし方、生き方が普及してきた。教育の世界もこの動きを取り入れていくだろう。親が多拠点居住した時に子どもの学校をどうするのか、それに対して秋田県の教育環境は早くから、「教育留学」という制度で転校や住民票の異動がなくとも秋田の小中学校に受け入れる下地を持っていた。新しいライフスタイルとして例えば東京の学校7割、3カ月は秋田の小中学校に通うケースも出てくるだろう。こうなると、もっと教育環境が緩やかに、ゆらぎを持っていく。

地域の枠、自治体の枠、住まいの枠がもっと多様になっていくだろう。コミュニティや共同体の再発明、拡張は教育や学びと関係なく見えるが、実は環境として大変関係がある。その社会実験として、この五城目町にある茅葺の古民家を村に見立てて、この村に年貢という名の年会費を収めた方はこの仮想の村の村民になれる「シェアビレッジ」という仕組みを民間のプロジェクとしてつくった。すると全国の40都道府県以上から900人弱の方々が参加し、9000人の町に1000人もの方が年に何度か来て、集落の祭りに参加したり、教育留学として二拠点教育をしたり、新しいコミュニティが徐々に生まれ、5年経って村民は約2500人まで増えた。また、「トランスローカルラーニング」という切り口で海外ともつながり、ローカルとローカルがトランスして越えていき、文化圏の異なる地域同士が物理的な制約を越えて邂逅することで学び合いが起きる。ローカルとグローバルを新しい視点で捉えることができ、これをトランスローカルな学びのデザインと呼んでいる。

大人達も、教育を捉える時に自らが学び続けていないと時代の流れの中で固定化してしまうため、大人達のアントレプレナーシップがどのように地域の中から内発的に湧き上がるかも並行して進めている。廃校になった小学校の校舎をシェアオフィス、コワーキングオフィスとして、地域で起業する人や移住してきた人に貸し、従来の地域の産業構造に留まらない稼ぎ方や働き方が生まれていく場をつくっている。徐々に地域の内外から人が集まり、延べ32社の会社や団体がこの田舎町の廃校に生まれた。その大人達が地域の小中高の教育環境にどのように関わっていくかも次のフェーズで起きると思っている。

五城目町では520年以上続く五城目朝市が続いている。昔の記録では、野菜や山菜のみならず、新しい商品を売ったり、大道芸人から占い師、お見合いの場として活用されたりと、多面的な機能を持っていたよう

である。地域の女性たちが中心となり、朝市はいろいろな世代に開かれていくポテンシャルがあると考え、誰でも出店できる日曜市をつくっていった。すると、小商いを目指す人や地域の商店、職人等、約 70 店舗が出店し、約 3500 人が来る市になった。子ども達も、朝市で寒い中買い物をする人に足湯とマッサージのサービスを提供したりした。このような場があることで、学校や家で学んだことを地域にアウトプットしてみることもアントレプレナーシップの発露である。小さな田舎町の歩いて行ける範囲に子どもたちの学びの舞台が濃縮され、町の中にどんな素材があるか、どんなチャレンジが眠っているかが学習環境デザインをする上で切っても切り離せないものになっている。

学びの概念を探究する上で、学びを手放した世界も含めた、大きな環境やシステムを捉えて見定めていくことが大事になっていく。学びを手放すという意味では、遊びも学びが湧き上がる源泉の 1 つになってくる。遊び、学び続ける地域社会というスローガンの下、地域の中でどんな学びが多世代に起きていくかという視点で見た時、狭義での学びの学校の教育の在り方や家庭の環境の在り方という学びのデザインは大事な軸にあることに変わりないが、その学びを越えて今度は働き方になってくる。

地域に暮らす大人達がどのような思いを持って働き、時代の変化に適応し、どのような新しいビジネスが地域の文化と絡み合っているかという、アントレプレナーシップを学び続ける要素が同時に大事である。さらにコミュニティの地域共同体の中でどのような学びや創発やチャレンジが生まれていくのか、そこに子ども達も含めた多世代が混然となって学び合っていく環境をどうつくるかという暮らしの視点、そして教育留学やシェアビレッジのように共同体が拡張していく、トランスローカルな学習環境をつくる意味でのつながり方、地域の外とのつながり方をいかにデザインしていけるのか、そのような環境をつくっていくことができるかも学びに関わる一人一人が考えていくべき領域になる。

全てを包含する遊びという、学びを手放した領域にこそその本質的な学びにたどり着く道がある。遊びとは余白という意味もあるが、ルールや制度の外側で予期せぬ出会いや創発が起きて、学びが駆動していくことも多々ある。知識を得、大量のデータを収集して分析するのは一要素でしかなく、五感を駆使して遊びから生まれるものも含めた学習のあり方が未開拓な領域として残っている。教室やプログラムを越え町や人や自然との関係性に溶け出して創発、共創することが学習のこれからのキーワードになっていく。

ローカルとグローバルの 2 つは別物ではなく、つながっているというヒントの 1 つを「課題の代表性」と呼んでいる。ローカルで扱うテーマや地域で子ども達がアクションを起こしていく領域が地域だけの小さな問題ではなく、世界中のいろいろな地域と同じような課題を代表している切り口の可能性がある。縮小しながら高齢化する秋田の社会は人類未踏の領域だが、その中で、地域に根ざした仕事の創出、里山での自然との共生の再定義、多拠点居住や多拠点教育のライフスタイルになった時の教育環境がどうあるべきか等、ローカルなチャレンジとして規模は小さいが、それがいろいろな国々のローカルの課題を代表しているという物語を伝えられれば、一気にローカルとグローバルが近くなっていく。そして生き方の多様性。多拠点居住も経済の視点でも、貨幣の経済だけで子どもたちのキャリアを捉えてしまうと偏差値や年収といった軸にとられすぎてしまう。地域の社会に同時に存在するのは、自分で米をつくり、食べ物を山から採ってくるという自給の経済や小さなコミュニティの中で助け合う贈与の経済である。貨幣の経済も今後相対化されていくような時代になっていく。その中で子ども達はデジタルネイティブとして生きていく。私達も常に学び直し、自分が今まで培ってきた成功体験やライフスタイル、生き方をアンラーニングして、もう一度再構築していくことで、未来の学びを対話しながらつくっていくことができる。子どもから大人まで遊び、そして学び続ける、そのような時代、社会にしていきたい。

グローバル教育部会 実践発表 I

「留学のより良い活用のために～日本の高校生への出発前教育への提案～」

常盤木学園高等学校 教諭
岩 崎 正 彦

留学は言語学習を促進する最も効果的な方法の一つだという強い信仰に似た考えがあります。日本の文部科学省は 2016 年に海外留学をする高校生の増加を目的とし、トビタテ留学ジャパンという奨学金制度を始めました。しかしながら、これまでのところ留学の準備段階で必要となる出発前プログラムにおいてその必要性や適切さにおける十分な議論がなされていません。今回の発表では、海外留学に焦点をあてた既存の研究を分析することで、留学を最大限活用してもらうために生徒に対する適切な介入方法を模索します。さらに、海外留学の期間、海外留学プログラムへ向けての、またはその最中の言語や文化に対する態度や姿勢、そして明示的言語学習の重要性についても議論しています。



今回の発表が、生徒が海外留学の経験を最大限活用できるための出発前プログラムへの明示的な介入方法についての知見となることを願っています。

There is a strong belief that study abroad is one of the most effective ways to facilitate language learning. The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) of Japan started a scholarship program called Tobitate Ryugaku Japan in 2016 to increase the number of high school students who study abroad. However, there has been little discussion on sufficient or adequate pre-departure preparation programs. In this presentation, by analyzing existing research on study abroad, suitable interventions for students as a means of enabling them to make better use of study abroad programs are argued. Furthermore, suggestions for the durations of study abroad, attitudes both toward and during their study abroad program, and the importance of explicit language learning are discussed. This presentation tries to provide insights into explicit intervention as a pre-departure program to enable students to make most out of their study abroad experience.

グローバル教育部会 講演Ⅱ

「グローバルリーダー育成への取り組み ～高校、大学、そして大学生ができること～」

公立大学法人国際教養大学国際教養学部教職課程 教授
佐藤 健 公

グローバルリーダー、グローバルリーダーについて

グローバル人材育成推進会議では、グローバル人材の概念を、語学力、主体性、異文化理解の3要素で示し、自分を知ることにも付け加えているが、条件の語学力が気になる。日本人には非常に高い壁だ。本学は全授業が英語で行われるが、最初に語学力が求められると大きな抵抗を感じる。そこで語学力を強調していない定義を探したところ、本学の勝又美智雄先生によるグローバル人材の条件があった。「異文化への好奇心を持つ」「自分の文化を誇りに思う」「論理的な話をする」「他者に共感する力を持つ」「一流を目指す」「常にゼロから挑戦する」。これは本学のグローバル教育のみならず、様々なグローバル教育、そして、「ふるぽろ秋田」の取り組みにも相通じる。ただ勝又先生は、語学力は不要なのではなく、グローバルリーダーとして一流を目指すために、コミュニケーションで大切な語学力は高いレベルで身につけてほしいと言っている。

秋田南高校の取り組みについて

私が赴任した2012年は創立50周年にあたり、記念行事もあって活気に溢れていた。生徒の多くが四年制大学を志望し、文武両道を標榜する学校だった。しかし、秋田県には全国最速の人口減、少子化という重要課題がある。全校生徒は900人超だったが、10年後や20年後はどうか。50年後には秋田南高校が単独で存続しているだろうかと同窓会で話すと、返答は「単独で存続する方法を探したい」とのことだった。そのためには元気がある今のうちに、中学生も保護者も来たい学校、他と差別化した学校になることである。現状をSWOT分析で分析した。Strength、強み、Weakness、弱み、Opportunity、機会、Threat 脅威。秋田南高校の強みは英語指導である。敷地も広く、中学校、高校の両方を受け持つスペースはある。同窓会、PTAも変わりたいと考えている。学級減が進み、空き教室もあった。秋田県では中学校のトップの生徒はトップの高校へ行く。上を切られたところが秋田南高校に来るからトップがない。英語科が学年に1クラスあり以前は普通科より成績が良かったが、今は普通科の受け皿となっている。その辺りが弱みだ。その頃秋田県は、進学に特化した併設型中高一貫教育校を設置しようと検討中だった。文部科学省ではスーパーグローバルハイスクール(SGH)を立ち上げていたが、秋田県では関心を示している学校はなかった。しかし、創立50周年関連で仕事が多いことから、中高一貫校とSGHに名乗りを上げて教職員の納得を得ることはできないだろうと考えた。そして、提案する前に今ある不要なものをやめて、気持ちを1つにする方法を考えるのが先決だと考え、秋田南高校独自の働き方改革を行った。全員のパソコンのデスクトップに職員用掲示板を入れ、学年、教科、全体毎に連絡事項を書き込んで共有できるようにした。朝の連絡がほぼなくなって朝会を週3日にした。定例職員会議は50分で必ず終わった。事前に資料を配布し、予習前提とすると会議は短い。さらに将来の秋田南高校生の候補となる地域の児童や保護者をターゲットに、砂が飛ばないようにスプリンクラーを使っていることなどを町内の回覧板に載せ、また、町内の夏祭りでは吹奏楽部に演奏させた。50周年の行事



等が終わった段階で、将来構想委員会が計画していた通りに準備して文部科学省の SGH に応募したが、不採択だった。原因はグローバル教育に対する理解と認識の不足だった。教師は、「グローバル化＝英語力向上」という考えから抜け切れていなかった。私も含め検討委員全員が英語関係者で、他の先生方も英語教員任せが要因で、地球規模の課題に取り組むなどの考えまでは至らなかった。そのため「英語は1つのツール」であることを徹底し、文部科学省への提出物にも「英語」の文字を入れないようにした。翌年度は文部科学省でプレゼンテーションをすることができ、SGH の指定を受けた。提出物には「英語で発表」以外は英語の文字はない。さらに翌年に中高一貫教育校となり、1年ごとに特徴のある、他と差別化できる学校に変わった。5年間の SGH を受け、教育課程の再編成や県外高校と WWL(World Wide Language)の教育校になり、新しい取り組みを進めた。SGH3 年目に SGH 甲子園で最優秀賞を獲得した。これが Global Link Singapore、シンガポールで最優秀賞に輝いた時の写真である。プレゼンテーションでは、質問にいかにも的確に論理的に答えるかが重要で、表現力も磨かれていった。

中高一貫校は他と違う年間行事ができる。他校が高校入試の対策をしている時期にシンガポールに修学旅行があるなど、独自の道を歩んでいる。7月に文部科学省から、高校普通科を3つに再編し、特徴ある学校に変わろうという提言があったが、秋田南高校はこれを先取りしたかたちになる。

国際教養大学について

本学の図書館は24時間開館している。今は COVID-19 の感染拡大防止のため一般への開放を自粛している。自粛期間に入る前は、私の授業は20時15分に終わるが、その後学生の半数、課題やグループ発表の資料作成等のため図書館に向かっていた。今年、1年生が失った最大のものは、先輩の後ろ姿から学ぶ機会である。Zoom で授業を行っている今、「以前の学生は授業後に図書館に行って、夜中まで勉強していた」と話すのだが、実際にその状況を見る機会がないのが残念だ。本学はグローバルリーダーの育成や世界に貢献をすることを使命として謳っている。本学の特徴は少人数学級で1クラス平均18人である。1年生は留学生と相部屋で共同生活をし、日常的に異文化を体験させた交渉力をつける。1年間の海外留学が義務で卒業資格としては必須だが、TOEFL550以上でないと留学の権利がない。成績の良い者が利益を得て高い数値を出したものが優先される傾向がある。3年次に1年間留学に行ってもっと勉強する必要があると判断して、2割から3割の学生が5年目を AIU で迎える。成績が悪いから留年するのではなく、自分の力の無さを海外留学で痛感し、もっと勉強しないと社会に追いついていけないと考える学生がいるということである。5月に文部科学省は学校の情報環境整備に関する説明会を行い、ICT、オンライン学習に臨機応変に対応するように求めた。本学は留学生が多いことから、早めに手を打ってきた。3月に全ての授業を Zoom で行うことを通達した。見方を変えると、コロナで被害を被った今こそ、教員ほか大人が対応する力をつけるチャンスである。今回のコロナ禍では、一部の塾や私学が早い対応をした。公立もようやく動き始めた。都道府県の中にはまだ Wi-Fi の設置や準備をしている所はあるが、zoom はツールの1つであって、きちんとしたコンテンツができていないか、生徒や学生を満足させることができるかが大切である。

秋田の子どもたちは小学生の頃から探究学習を行っているので、大学生といろいろな学び合いができるのではないかと考えて「ふろぷろ秋田」を考案した。個益だけではなく、全体にもメリットがある(＝公益)があるプロジェクトを高校生一人一人が考える。3カ月でメンター、メンティーの関係をづくり、学生自身が講座の内容も考案する。以下に「ふろぷろ秋田」の学生たち(3人)による報告を紹介する。

【学生①】「ふろぷろ」は、From Project の略である。プロジェクトから学びを得て、成長してほしいという意味を込め、高校生のやりたいという気持ちを応援する場を提供している。秋田県内の高校生に

将来的に秋田県のリーダーとして活躍できる人材になってほしいと考えている。そのためにまず、個別最適教育を目標の1つに設定している。高校生1人1人に適したコンテンツや接し方を提供し、高校生の最大限の学びにつなげる。そのサイクルは、最初は準備。高校生に講座を提供するが、少人数で提供するコンテンツを話し、その後に全体ミーティングで内容を絞る。講座で使うワークシートの作成やそれぞれの活動のファシリテーターを決定する。準備が深いほど、講座のクオリティーが上がる。実際の講座では、大学生は様々な役割をこなす。時には高校生と友達、同級生、先輩として、大学生、大人、先生のように役割を変える。事前の準備で細かい打ち合わせがあり、運営同士で連携があるからできることである。講座ごとに振り返りを行う。講座のクオリティー、内容、高校生ごとの理解度の共有、高校生との会話の把握、講座全体の雰囲気、時間管理を話し合う。小さなことも必ず情報を共有し、この情報が次に説明するメンタリングにつながる。メンタリング制度を導入し、高校生1人に運営1人が担当としてつき、最後までパートナーとして活動する。毎回、連絡を取り、どれくらい講座が分かり、どこが分からなかったのかを話す。このやりとりが高校生との信頼関係構築に大切である。共有したことが、高校生のプロジェクトにつながる。そして、次の講座の準備となる。ここでは、反省会で得た情報を元にするのはもちろん、各高校生から吸い上げた情報を元に新しい講座を作っていく。このサイクルが回るほど、講座のクオリティーが上がり、高校生に寄り添った講座になる。これを繰り返して活動する。

【学生②】大事なことは、1つは継続性である。継続を念頭におき、振り返りや引き継ぎをする。2つ目は変わらぬ価値観。これを広げて、多くの関係者に広めていく。高校生のやりたいことを応援する場のため、参加者の自己実現を応援する場として多くの高校生に浸透させる。3つ目は自身の素晴らしさ。自身は、高校生である。彼らは多感な時期で、日常生活での浮き沈みもあるが、「ふろぷろ」に勇気を持って参加してくれた素晴らしさがあり、プロジェクトの中で自分の存在価値を分かってもらいたい。この「自身」は、大学生も入る。サイクルはどんどん輪が大きくなり、多くの考えることが出てくる。また、大変な時期もあり、何をやっているのか分からなくなるメンバーもいる。その時に高校生の成長に自分たちのコンテンツが関わっていると分かることで、大学生自身も自尊感情を持ちながら楽しく活動できる。最後に土台がしっかりした後で外側に見える部分の軽微な修正をしていく。

【学生③】「ふろぷろ」とグローバルリーダー育成はかけ離れて見えるが、様々なことを学ぶ大学生と可能性に満ちあふれた高校生がともに学び合い、成長し合える場所となる。自分たちの身近な問題に気づき、それを解決する術を考え、将来をじっくり語り合うという経験を通して、グローバルな視点、ローカルな視点、どちらも育つ。より多くの高校生に自身の可能性に気づいてもらえる活動を継続したい。佐藤：この学生は3人とも教育とは一切関係なく、「ふろぷろ秋田」に関わりたいということにつながった。国際教養大学の秋田県出身者は2割である。8割が県外から来ている現状で、学生たちは秋田県に貢献できることがないかと考えて発案した。過去の高校生のプロジェクトはホームページに上がっている。ローカルなものからグローバルなものまで様々である。広報も応募も全部学生たち自身が行い、最終報告会のパンフレットも自分たちで作る。これまでの「ふろぷろ」は、前回まで約100人の高校生が参加し、参考までに国際教養大学への入学者は12名である。高校生には必要なものを求める場として「ふろぷろ秋田」を利用してほしいと考えている。今後の見通しだが、大学生は2年で世代交代をしていく。3年生になれば留学に行っても参加できない。4年生も就職活動がある。よって「ふろぷろ」の運営には1・2年生が参加する。様々な人たちが加わって勉強して運営メンバーとなる。今後どうなるか分からないが、学生にも高校生にも、自分たちがやってきたことが報われたらよいと思っている。

グローバル教育部会 実践発表Ⅱ

「世界で力を発揮～英語力を養うスーパー学習プログラム～」

(秋田県) 聖霊女子短期大学付属高等学校 教諭
工藤啓之

最初に本校ホームページ (<https://www.akita-seirei.ac.jp/highschool/>) より学校紹介動画をご覧ください。本校は 1908 年にオランダから派遣された 4 人の修道女によって創立された、秋田県内で唯一のミッションスクールの女子校です。国際・特別進学・総合進学の 3 つのコースがあります。今回は国際コースでの教育活動について発表させていただきます。



まずホームページの「本校の歴史」(※1) より、国際コースの沿革をご覧ください。1992 年に国際コースを開設し、オーストラリアのビクトリア州ジロング市にあります Sacred Heart College (※2) と姉妹校提携を結び、語学研修を始めました。2005 年に文部科学省よりスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの指定を受け、「電子ポートフォリオの効果的活用を通して、自己表現ができる英語力を育成する段階別ライティング指導法の開発に関する研究 (※3)」に取り組みました。同年より GTEC (<https://www.benesse.co.jp/gtec/>) 英語能力測定試験を開始し、2007 年より 1000 語英文エッセイを卒業課題としました。2008 年にはオーストラリアのビクトリア州メルボルン市にある Our Lady of Mercy College (※4) と姉妹校提携を結び、語学研修を Sacred Heart College と隔年で行うようになりました。以上が重要なターニングポイントとなっています。

(※1) <https://www.akita-seirei.ac.jp/highschool/school/history/>

(※2) <http://www.shcgeelong.catholic.edu.au/>

(※3) <https://www.akita-c.ed.jp/e-sidou/h19seika/pdf/1702.pdf>

(※4) <http://www.olmcheidelberg.catholic.edu.au/index.html>

続いてカリキュラムについて説明します。3 年間で 106 単位を履修します。英語は 33 単位で、そのうち 17 単位分は 2 人の外国人教師による少人数制授業により「読む・書く・聞く・話す」の 4 技能を磨くことが特色となっています。また国語 22 単位、地歴・公民 16 単位となっており、文系科目の合計が 71 単位です。私立文系大学への進学に対応したコースとなっています。

ここからはホームページの「コース紹介 (※5)」より現 3 年生の活動を振り返りながら、3 年間の行事の中でグローバルとローカルの両面についてどのように取り組んできたかを紹介します。

(※5) <https://www.akita-seirei.ac.jp/highschool/course/international/>

1 年次：2018 年 7 月に文化祭がありました。「世界の卒業式」をテーマとして、グループによる壁新聞作成と展示を行いました。1 年生は毎年「世界の～」をテーマとしています。8 月：JICA エッセイコンテストに応募すべく、1600 字程度で作文を作成。11 月：Our Lady of Mercy College より短期留学生が来日、2 ヶ月半生活を共にする。12 月：スピーチコンテストクラス予選を実施、全員が 5 分程度の発表をしました。2019 年 1 月スピーチコンテスト本戦に 6 人が出場しました。1 年生の時は視野を広げ

るために、グローバル分野に着目させ、自分たちの知らない世界へと興味関心を持たせるようにしました。

2年次：2019年4月：Our Lady of Mercy College より研修生一行が来日し、多くの生徒がホストシスターとして活躍。7月：語学研修の持参品として日本文化紹介を日本語英語の2言語で作成し、文化祭で展示発表しました。夏期語学研修として Sacred Heart College に行き、2週間のホームステイをして日本と異なる生活習慣や文化に触れながらたくさんを学びました。8月：2度目の JICA エッセイで東北センター所長賞を受賞しました。11月：Our Lady of Mercy College より短期留学生が来日、2ヶ月半生活を共にしました。12月：スピーチコンテストクラス予選を実施、全員が5分程度の発表をしました。冬期カナダ語学研修に2名が参加しました。2020年1月スピーチコンテスト本戦に6人が出場しました。2月：オーストラリア森林火災のために募金活動（※6）を3回に分けて行い53万円程度を集め、姉妹校に送りました。姉妹校生と秋田・オーストラリアの両方で交流を深めることにより、グローバルのカウンターとしてローカルなことにも注目できるようになり、"Think Globally Act Locally"の実践として自分たちの立場でできることが募金活動であり、それに伴う苦勞をしたことが成長につながりました。

（※6） <https://www.youtube.com/watch?v=7GhzvBPqN7E&app=desktop>

3年次：2020年8月オーストラリア語学研修の報告を日本語で作成。8月：JICA エッセイコンテストに応募すべく、1600字程度で作文を作成。2021年1月1000語英文エッセイ完成予定。

GTEC スコア（※7）推移の検証：生徒24名のクラス平均点

（※7） <https://www.benesse.co.jp/gtec/fs/score/2019.html?referrer=https%3A%2F%2Fwww.benesse.co.jp%2Fgtec%2Ffs%2Foverview%2F2020.html>

	1年6月	2年6月	3年6月
Total	721.0(56.3%)	861.9(67.3%)	963.4(75.3%)
Reading	151.3(47.3%)	167.6(52.4%)	210.1(65.7%)
Listening	167.4(52.3%)	198.1(61.9%)	242.2(75.7%)
Writing	200.0(62.5%)	245.0(76.6%)	247.7(77.4%)

CEFR レベルとして3年6月時点で Total のクラス平均が B1(960～：75.0%)を超えているのは目標通りです。ただし Reading の得点率を向上させていくのが今後とも課題です。先輩たちが学校行事・進路の両面において成功・失敗の両方の体験を後輩たちに伝えていくのが財産となっています。

グローバル教育部会 全体会

「私立中学高等学校におけるグローバル教育について」

(指導講師) 公立大学法人国際教養大学国際教養学部教職課程 教授
佐藤 健 公

全体会では佐藤健公・公立大学法人国際教養大学国際教養学部教職課程教授から、実践発表者の岩崎正彦・常盤木学園高等学校教諭と工藤啓之・聖霊女子短期大学附属高等学校教諭へ、感想や質問を含めながら講評が行われた。



【岩崎先生へのコメント】

魅力あるプログラムである。大事なのは生徒が選べる様々なパターンがあることで、生徒は自分で決めたことには不平を言わない。また、保護者の側からすると、単位互換により4年ではなく3年間で卒業でき、さらに授業料もかなりの部分まで補助があることで、魅力あるプログラムになっている。留学に行きたい生徒が推薦で国際コースに入学してくることは納得できる。

出発前と留学中の教育については、出発前の **listening** で大切なことは、ただ聞くだけではなくメモを取り、聞いた内容を書き取ってそれを使い、要旨を話すこと。また、エッセイは書くだけで終わらず、必ずスピーキングまでつなげることで、「読み」と「話す」の関連付けをすることが大切である。



読むスピードをどんどん速めていくための教材もある。英文を読み、それに関する問題が10問あるが、最後の9問目、10問目の答えは英文の中には書かれていない。だから読んでいって、次はこうなるのではないかと解答を類推するという教材である。繰り返し行くと、ほぼ確実に読むスピードが上がる。

私は、英文法は非常に大事と思っている。学習指導要領にも「文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、過度に文法的な正しさのみを強調したり、用語や用法の区別などの指導が中心となったりしないよう配慮し、使用する場面や伝えようとする内容と関連付けて整理するなど、実際のコミュニケーションにおいて活用できるように、効果的な指導を工夫すること」と記載されている。本学の学生は英語の **speaking** は得意な学生が多いが、**writing** で間違えることが多々ある。私は、論文等を提出させる時、「文法力がないことが致命的になる場合があるから、文法はきちんと体系的に覚えなさい」と言っている。本学は英語では教えるが、英語については教える時間があまりない。

留学の出発前に録画等で記録を残しておくのがよい。これらは後で必ず使うことにする。インタビューに関しては、自分で目的を持ってインタビューを行う。例えば新聞社に行く時は、アポイントメントを取って、訪問してインタビューを行う。その時にも **listening** との関連付けが大切である。何らかの課題を持たせて聞き取りに集中させるなどの仕掛けがあればなお良い。

質問：ホストファミリーと過ごす時間が一番長く、その影響が強いということであるが、それ以外にどのような交流先があるのか。

回答（岩崎）：ホストファミリーに関しては、本校の留学は多種多様で、長期留学は世界中に散らば

り、細かくチェックはできないが、1ヶ月の学校プログラムで行く生徒は、最初の3週間はシアトル近郊の大学内の語学学校の寮に行き、そこで世界中から来る他の英語学習者との交流がある。サンフランシスコ近郊に移動した後はカーネギーメロン大学やスタンフォード大学を訪問して交流する機会を設けている。実際の学生と話す機会がないときもあるが、姉妹校であるオデッセイミドルスクールがギフテッド教育をしており、中にはスタンフォード大学やハーバード大学に行く生徒がいて、在学時は話をする機会がある。

質問：現地に行ったとき、一番長い時間を過ごすのはホストファミリー、そして次が学校だが、その学校での過ごし方で特に配慮していることはあるか。

回答（岩崎）：学校での過ごし方については、引率教員がいる場合は、フォローをして、会話をする機会を与える。現地との付き合いが長いため、日本文化やカリフォルニアの文化の話等でコミュニケーションを取る機会を多く設けてもらっている。また、ギフテッド教育なので、アクティブ・ラーニング、プロジェクト・ベースド・ラーニングが多く、言葉自体が分からずとも、実際の授業に参加ができ、英語を介しながらコミュニケーションをとる機会は多くある。

留学後、まとめを行うと思うが、できればプレゼンテーション等で後輩にも伝え、先輩の上に行くようなことができるように工夫することも検討頂きたい。

留学と英語の力との関係だが、一般的に留学に行くことが決まり、具体化してくると、期待も高まり、自分がどのくらいの力をつけたいのかということの後押しになる。要するに決まった段階で勉強するようになる。しかし、気をつけなければならないことは、自分の今の力がどの程度で、どの程度のことを目標とするのが妥当かということである。ここでその生徒の力を知る先生方の指導が重要である。具体的に今の力を知って、それから目指すべき力、帰ってきてどの程度のことができるような力がつくか、その対策のために何をすればよいのか、手掛かりを教えることが必要である。

留学で力がつく、つかないには諸説があるが、それぞれ考えている対象の生徒が全然違うため、全部正解である。私達の仕事は、生徒が力をつくようにするには何をすれば良いかを考えることである。

留学後、思ったより力がついていないと思う生徒がいるかもしれない。出発前のデータ、録音と留学後の自分のプレゼンテーションとを比較させ、客観的に考えさせることが一番よい方法である。本学でも、1年生の段階で最初のスピーチ等をビデオに残している。それが3年、4年生になったときに、「これはあなたの入学時の英語ですよ」と見せてあげると、格段の進歩に初めて気がつく。本人はやらなければいけないことはやっているが、自分の伸びというものは意外と気がつかない。そういう意味ではデジタルデータを保存しておくことは有効である。

【工藤先生へのコメント】

聖霊短期大学付属高等学校の英語学習プログラムに関しては、3年間を見通したサイクルになっている。エッセイについても日々の学校行事等を授業で取り入れていると聞いたが、恐らく生徒達は授業時間以外でもやっているだろう。そこに意味がある。授業の外での学びにつなげることである。

スピーチ・コンテスト、さらに語学研修を絡め、最終的に1000語のエッセイにつなげている。このようなことが3年間を通してできていることに感心している。

質問：授業で国際理解の特別講座を行っている聞いたが、それ以外の工夫はあるか。

回答（工藤）：高校生の留学先での感想を読むと、「エコバックが必要」とか、「文化が違う」、「ホストファミリーが私に厳しいことを言うが、それは私を思ってくれているからだ。」という気づきを語学研修の間に感じ、記録に残すというように、異文化理解教育に関しても力を入れている。

質問：語学研修を長く続けているが、学校として、何を達成できればよいと考えているのか。

回答（工藤）：同年代のホストシスター達から、将来設計、きちんと目標に向かって、いろいろなカリキュラムを自分で組み、さらにその目標を見据えているという話を聞くことにより、進路関係の意識が高まることを一番期待している。いろいろなことを記録し、全部残していくので、それを振り返ってどうするかというところで、3年生になってから日本語で書かせて、フィードバックをしている。

GTECであるが、私たちも、listening と reading と writing のデータを見ている。毎年、高低はあるが、伸び方、伸び率、向上度はきちんと保証されている。このプログラムを通していけば、確実にここまで伸びていくと思われ、非常に効果的であるという感想を持っている。点数の差を見ると listening が一番伸びていて、reading の writing も伸びていると思うが、1000語エッセイにつなげる意味で writing がつながっていることも納得できる。reading が今ひとつ伸びていない気がする。原因の一つは、日本の教科書の語数が少ないことにある。1つの単元はあまり長くなく、そもそも授業の1時間で進む量が少ない。早く読み取る練習をしていないだけの話である。だから rapid reading とか速読問題とか、もっと長いものを読ませることで力がついていく。見方を変えると、100m走者が 100mを走っているのは力がつかないのであって、100mを走るために 120mを全力で走るということを日々行って、力がついていく。練習でハードなことをやっていった場合に試合を楽しむことができる。Listening に関して言うと、初めに音声 flowed 瞬間に、「速い」と思えば負けである。自分が対応しているもの以上に速いものだと、気持ちで負けてしまう。もっと速いものを聞くことにより、ある程度のものは遅いと感じるようになる。相対的なものではあるが、そのような訓練があれば違ってくる。



質問：私は昔から聖霊高等学校の 1000 語のエッセイを知っている。サイクルがきちっとできているが、今後、改善とかもっとこうしたいというものはあるか。

回答（工藤）：reading が伸びないことは、母語が弱い、日本語がきちんできていないところが reading にも影響しているのではないかと思う。対策としては、図書館の利用率を高めるために、1クラス年間 1000 冊読む目標を掲げ、1週間に 1人1冊という計算のもとで行っている。母語における読書量が足りないと考えているが、英語でも読む量が足りないと考えている。最近、私の英語探究の授業で始めたのが、楽天マガジン等でタイム誌を見ることができるようになったので、その中の長い文章を読ませて、要旨を取ることを始めている。しかし、本校の生徒には、好きなことを先にやらせているので、興味があるニュースと興味のないニュースの時ではモチベーションの差が大きく、準備が追いつかないこともあり、課題となっている。

基本的に入学前の 3 月のオリエンテーション時に 3 年間を見通した骨格を作り、その都度、先輩と合同ホームルームを開き、イベントの前にアドバイスをを行っている。特に失敗談を後輩に伝えてくれとお願いしている。

グローバル教育部会
「総括」

聖霊女子短期大学付属高等学校 校長
折原 順悦

2 日間にわたりまして、大変有意義な研修ができたと思います。

本日のグローバル教育部会も大変な成果があったと考えています。私はこのような会合に出席したのは初めてです。そのため、目から鱗という話題がたくさんありました。

まず、ハバタク株式会社代表取締役の丑田俊輔さんのお話ですが、結論から言いますと、生徒の多様性を認め、それを育てようということが要点であったと思います。それも垂直方向と水平方向で見ながら育てようということです。

公立大学法人国際教養大学国際教養学部教職課程教授の佐藤健公先生のお話は県立秋田南高等学校の改革に関しては、校長として大変勉強になりました。今度はそちらの方で講演を賜りたいと思っています。そして、ふろぷろ秋田（From project Akita）の学生達を見ると、この学生達は将来、グローバルリーダーになるのではないかと感じました。これは佐藤先生のご指導の賜と感じています。

実践発表では、まず常盤木学園高等学校の岩崎正彦先生からは、留学に出発する前の教育への提案ということで、同校の留学の様子や、留学を最大限活用させるための生徒に対する適切な介入等についての実践をお話し頂き、参加された先生方の学校で、留学に行く生徒への指導のヒントを得たことと思います。聖霊女子短期大学付属高等学校の工藤啓之先生の発表は、英語力を養うスーパー学習プログラムということで、国際コースでの教育活動を紹介頂きました。オーストラリアの姉妹校提携との語学研修や文部科学省「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」での取り組み、卒業課題の 1000 語英文エッセイの実践等が参加された学校の先生方の参考になって頂ければ幸いです。

また、講演頂いた佐藤健公先生には、オンラインでのご指導とはなりましたが、すべてのプログラムにご参加頂き、全体会では実践発表を頂いた 2 名の先生へ質問を含めながら、感想やご助言を頂き、2 つの実践発表をさらに深めることができました。

講演・実践発表を頂いた 4 名の先生方には改めてお礼を申し上げたいと思います。

最後になりますが、本日参会の皆様が本日の成果を持ち帰って、是非、ご自分の生徒達をグローバルリーダーに育てようではありませんか。

来年、京都でお会いできればと思います。また、本大会にご協力を頂き、有り難うございました。



参加者アンケート（感想）

第1日「全体集会」

◇秋田県私立学校活動紹介



- 学校紹介（活動発表）には毎回感銘を受けているが、今回も素晴らしかった。
- オンラインでの活動発表、県歌の紹介は感動的だった。生徒あつての教育で、生徒の姿が見える教育を語らなければならないと改めて思った。
- 活動紹介は映像での紹介だったが、素晴らしいと思った。
- 吹奏楽部・合唱部による秋田県民歌が素晴らしかった。

◇報告



- 最新の私学情勢について詳細な資料と様々な報告がなされ、危機感を持ち帰り、対応の指針にしたい。今の時代に適度なアドバイスの多くを感じ取れることができた。
- 私学情勢の報告では、助成金などの具体的な数字を知ることで、改めて私学への予算が不十分であることを実感できた。私学助成の署名活動など、今後も力を入れて頑張っていきたい。
- 私学は少子化、コロナ等様々な問題が今後考えられるが、改めて「建学の精神」が大切であることに気づいた。熱心な情熱的な教育、そして生徒達のための教育は私立学校だからこそ成立するものだと感じた。
- 普段の学校生活では聞くことのできない高次元な話題に多少戸惑いはあったが、より高いところを目指して、努力を続けていかなければならないと感じた。
- この春の休校、コロナ対応を振り返った。今も感染を防ぐ対応などに追われる毎日だが、ICT利用などプラスに捉える側面もあり、今後につなげるためには一度総括する必要がある。
- 充実した資料から何が課題であることを明確にして頂き、参考になった。入試問題やオンライン授業における著作権問題やコロナ禍をチャンスと捉えた変革を目指す姿勢の必要性を強く感じた。
- 教育政策と私学情勢について、中川先生の講演が非常に勉強になった。昨年度から話されている「学校全体がチームとなって若手の働きを潰さないように」の言葉にいつも勇気を頂いている。

- 吉田先生の報告で他県の動向が分かったことや私学助成が公立と比べていかに厳しく、また私学にとって大切であるかを痛感した。これからの時代に対応できるよう、さらに勉強したい。
- 私学の情勢は厳しいと改めて感じた。様々な学習ニーズがあり、学び方も多様になっている中、公立とは違った私立の在り方を考えさせられた。
- 中川先生の話で私学のICT教育に関する話があったが、地域間や学校間で格差があってはならないと改めて感じた。私学においてもICT活用のための体制が整うことを願う。
- 中川先生からの報告において、リモート授業に使用された著作権の発生という事態に驚かされた。
- 2人の報告を聞き、まずは自己研鑽を積まなくては今後の教員としての役目を果たしていけないと痛感した。ICTの活用に慣れ、私学が公立の先を歩くことが存続に不可欠だと考える。
- 吉田先生の現場、そして何よりも生徒を軸とした話に共感した。

◇記念講演



- 国際交流、英語教育、そして地域連携により、学問の基礎となるリベラルアーツを学ぶ大切さについて改めて考えることができ、大変参考になった。
- 教養教育の歴史等について話して頂き理解が深まったが、今なぜ教養教育なのか、もう少し直接的に話して頂きたかった。鈴木先生の著書を今後読んでみたい。
- リベラルアーツ教育は、今こそ本校が実践していかなければいけない教育ではないかと感じた。
- 秋田県内に国際教養大学があるのは誇らしいことだと思っていたが、知らぬ間に明らかに変化していることに驚いた。生徒を送り出す側として、今までの考え方を改めていく必要があると感じた。高校（特に私学）も生き残りをかけて、今後どうするか、各校なりの判断が必須であろう。
- 国際教養大学やリベラルアーツ教育について詳しく理解できた。卒業生がどんなところで活躍しているか、秋田県内で、近くに住んでいても進路先が分からないため、もっと知りたい。
- 普段聞けないアカデミックな内容でよかった。リベラルアーツについて、自分の大学時代（早大文学部60年代）の範囲にとどまっていた内容を拡大できた。これとは対照的な特色教育・福原先生のAIやコンピテンシー、デジタル最前線の講演と両方を聞くことができて良かった。
- 近年叫ばれている一般教養について知ることができた。国際教養大学が国際基督教大学と同じであると知り納得した。外とつながり、日本に国際的に行われているものを持ち込むことは理解できるが、日本らしさを学び発見する方向性、日本文化の発見という点はあるだろうか。
- リベラルアーツの原義を知ることができ、AIUその他教養学部への進学を考える生徒への指導に役立てたい。教養を身につけることで、横断的、多面的な物事の見方ができ、その力こそ、グローバル社会を生き抜き、society5.0でAIにも負けない、AIと共により良い社会を創生するために活かされると学んだ。
- 記念講演での鈴木先生の様々な知に触れて、汎用的な能力を養うという考えが素晴らしいと感じた。また、生徒に試練を与える（留学など）に対する学校の取り組みも素晴らしいと感じた。
- 2日目のグローバル教育部会にも関係する話題であり、とても興味深かった。

◇その他

- 参加者を受け入れ運営に当たった皆様のご苦勞に感謝申し上げます。準備が行き届き統制のとれた開会式だった。

- 開催を決断され、本当に良かったと思う。コロナ感染対策を念入りに行って下さり、334名もの
- 社会的に実施が困難である状況で、本大会が開催されたことは意義がある。
- ホテル側の演台のパネルをその都度交換するのを見て感心した。
- 感染者の少ない秋田に感染拡大地域から来場者を迎えるご苦勞に敬意を表する。
- コロナ禍の中、300人以上の研修会は大丈夫かと実は心配していたが、これなら大丈夫と安心できる対応をして頂き、皆様のご苦勞に感謝申し上げます。
- 大会企画・実施・運営に当たられた大会役員、並びに実行委員の皆様には実施頂き心から感謝申し上げます。また、実務に携われた諸先生方にも心から御礼と感謝の念をお伝えしたい。
- 本大会に参加させて頂き、本当に良かったと思う。初めての来県だったが、5つの学校が手を取合せて、必死に頑張っていることがひしひしと伝わってきた。
- 日程、構成は満足している。開会時間や閉会時間も適当であったと思う。
- 県内5校の先生方は準備段階から大変な業務だったと思う。運営に関してはほぼ完璧で感服した。
- 今年は研修もさることながら、大会運営を勉強しに来た。全大会の座席指定等、よく考えられた方法であると実に参考になった。また、コロナ禍の中での生徒発表、鈴木先生の講演がオンラインとなったことはやむを得ないが、少し悔しい。
- コロナ対策がしっかりしていて、安心して参加することができた。
- 現在のコロナ禍の中では、ベストな内容だったと思う。
- 今回、このような感染対策を厳重に取られたことは非常に良いことだ。
- 丁寧なご対応、万全のコロナ対策に感謝申し上げます。秋田私学の教職員の方々のチームワークを感じた。
- 座席配置、椅子に貼付された座席を示す用紙等、とても分かりやすく、行事での参考にしたい。



第2日「部会」

◆私学経営部会



- 私学経営に関しての様々なアプローチがなされる部会だった。「逆境が知恵を生む」という今村先生の言葉が印象に残った。
- 今村先生の話は大変インパクトがあった。本校も多様なグローバルを目指していくことを考えて、色々勉強になり、思い切った取り組みをしていきたい。
- 今村先生の「挑戦すること、いい偶然に出会うための才能を磨く場所 学校」は共感した。

- 今村先生の「危機感しか語らない経営リーダーは要らない」という言葉がグッと胸に迫った。希望を持たせることの大切さを学んだ。
- 今村先生の話から改めて視点を変えて見ること、学校の独自性を確立することへの意識を学んだ。「これからは地方だ」の言葉も頂いたので、精進を続けたい。
- 講演Ⅱは3.11の実情を踏まえて伝えて頂き、より本校の現状に照らして進める必要性を感じた。
- 東日本大震災10年を間近に、具体的で詳細な説明で、改めて本校における準備を見直す機会となった。
- 世界を含む教育というものの変革が求められる状況と、その実践例を知ること、また、ニューノーマルの時代における災害下の危機管理の重要性を改めて意識することができた。
- パネル・ディスカッションは非常にタイムリーな話題(Web、コロナ)も含まれ参考になった。
- パネル・ディスカッションでは所作に富む話をたくさん聞くことができた。すぐに同じ様にはできないが方向性・手段について学ぶことができた。
- パネル・ディスカッションでは2人の校長先生の具体例が参考になった。2人のリーダーシップに敬意を表す。
- 工藤先生がギガスクールについて、経産省主導の改革の違和感に触れられていたが、大変大きなテーマだ。
- パネル・ディスカッションは参考になった。中低レベルの生徒達が対象の場合、現実的には何ができるかを考えた。
- 大学進学やスポーツに頼らない魅力ある学校作りについてじっくり考え、学校の発信をしていきたい。
- 今村先生の話とパネル・ディスカッションの工藤先生の内容で共通なものを感じた。実際に学校に活用できるかは別として考えさせられるものだった。

◆教育課程部会



- 石井先生、広石先生、両先生の講演は大変良かった。ともすれば教育界の常として目標が曖昧になりがちである。いずれも進む方向、問題点の抽出に、たくさんの示唆を与えて頂いた。実践に活用したい。
- 2つの講演を通して、学校、教員、生徒がともに視覚化された具体的な目標を持つことが必要であることを感じた。コロナ禍の中で、大変だからこそ、教員が研修を通し、積極的に新しいものを学び、学校でも共有していくことの大切さを改めて実感させてもらった。
- 特色ある私学の在り方、これからの時代に沿った学びの在り方を考える上で大変参考になった。ICT活用は、今や欠かせないツールであることは理解しているが、実際に運用するとなると、いつも壁があるような気がする。
- 建学の精神からカリキュラムマネジメントまでの流れの意義がよく分かった。また、学習指導要領の語句の意味、繋がりを理解した。
- 広石先生の「私学として、どのようにカリキュラムマネジメントを行っていくか」は大変参考になった。建学の精神の実践の大切さを再認識した。
- 新教育課程を現在作成しているが、もう一度、建学の精神を見直し、具現化できるものになっているかを考えるきっかけになった。現在、本校ではロードマップ作りを行っており、それを早く完成させなければいけないと実感した。

- 新学習指導要領に向けたカリキュラムマネジメントの途中で、社会で求められている実力＝コンピテンシーという意味、一人前形成が根底だということがあり、アクティブ・ラーニングも生徒を伸ばす方法として大切であると感じた。
- カリキュラムマネジメントに関する内容で、今後について考えていくにあたり、示唆に富む内容で参考になった。学習指導要領に書かれている内容も、その考え方について理解を深めることができた。
- コロナ禍、新学習指導要領でのカリキュラムマネジメントの在り方や、各学校での実践等、現場にいないだけでは見えないものを多く見たり感じたりすることができた。
- 今やらなければならない課題ができるかという不安はあるが、考えをまとめてカリキュラムマネジメントを進めていきたい。学校設定科目を活用していきたい。
- ICT や観点別評価など、気になることがあったが、何より学校の特色を生かすカリキュラムについて、早く取り組んでいくべきだと思った。
- 石井先生の講演内容が非常に興味深く役に立った。率直、的確な内容と話しぶりで、疑問に感じたことや、今一つ理解しづらいと思っていた点を説明頂き非常に分かりやすかった。取り上げたキーワードが適切だった。
- カリキュラムマネジメント、実践例は本当に勉強になった。学校としての課題を考えるとともに、自身ができる取り組みについても視野を広げることができた。
- 講演によりカリキュラムマネジメント、今回の学習指導要領の改訂が、コンピテンシーベースの改訂であること等、きちんと理解することができた。今後活かしたい。
- どんなに新しい手法を導入しようとしても、カリキュラムマネジメントや、「生徒をどのように育てたいか」がないと改革にならない。教員が一致したカリキュラムマネジメントを持つ必要性を感じた。
- 実践発表はとても勉強になった。各先生が工夫を凝らされていて、実体験を伴う説明なので、理解が深まり、自分の学校でもラボしたいと考えている。
- 他教科との連携について、色々と参考になる部分があり、大変よかった。
- 竹田先生は非常に多くのことをされており、1つ1つが勉強になった。
- 鈴木先生のノースアジア大学明桜高等学校の取り組みを聞くことができてよかった。参考にさせて頂きたい。

◆特色教育部会



- 先細りする教育界において、カリキュラムの在り方、総合探求学習の在り方について様々に知ることができ、自校でも実践する良い機会となった。
- どの内容も大変参考になった。学校現場は昔から変わらないものがかなりあったと感じていた(もちろん今も)。教師は先のことを見て、幅広く勉強することが肝要だと改めて感じた。
- 学校という狭い社会で日々の対応に追われる中、様々な示唆を頂き未来を見通すことの重要性を再認識した。
- 基調講演で語られた新しいものへの導入のために何を削り、何をやめるのかが悩ましいところ。スキルのベースとなるコンピテンシーを共有し、改革を進める源泉としたい。
- 福原先生の講演は衝撃的であり、非常に考えさせられた。実践に結びつけることができるかという、何かを捨てる勇気がなく、結果的に踏襲ということになってしまいそうな自分が情けなく

感じられて仕方がない。だが、考えるきっかけを頂いたことに感謝申し上げる。

- 今後の世界の状況から学びを考えることの大切さを感じた。
- 福原先生の講演は、最新の考えであり、「今」教育に必要なことに気付くことができた。
- 数年前、改善すべきとされていたことは既に過去の課題となっており、各校の実態に応じて特色を出していくことが重要であると感じた。
- 福原先生の講演の中でコンピテンシーの必要性を改めて感じ、時代の急速な変化への学校・先生の対応、また新しいものを取り入れる柔軟性、捨てるものは思い切って捨てること、教科間融合の大切さを痛感した。
- 福原先生の講演の中での「課題があるところにしか答えは出せない。課題がある時はそれを解決するチャンス、ビッグチャンスである。」という言葉に勇気づけられた。
- 福原先生の講演は、これからの私学が念頭に入れて進める教育に組み入れる必要のある重要な内容だった。
- 福原先生の講演で過去の経験にいかにつまられているかを痛感させられ、未来を意識していかなければと思った。各先生方にお話を伺い、自校に取り入れるものを考えていきたい。大変、参考になった。
- 福原先生の講演がとても興味深かった。新しい学びを取り入れるなら、その代わりに捨てる学び、落とすものがある、現場はどんどん変化しなくてはいけないことを改めて感じた。
- 福原先生の講演に衝撃を受けた。生徒がこの先の未知の社会を自分の力で歩いていくために、より多くの情報を取り入れ、生徒とともに学び続けたいと思った。凝り固まった頭を柔軟にして生徒に接していくよう努力したい。様々な学校の実践を伺うことができ、有意義な時間を過ごすことができた。
- 新しい時代に求められる能力とは何かを学ぶことができた。知識・技能の習得に（受験のため）力を注ぎがちだが、コンピテンシーを身につけさせることが、学力アップとの相関があることを信じて、コンピテンシーを身につける教育ができたと思う。
- 福原先生の話に共感した。大学入試に翻弄される高校のカリキュラムと授業であるが、教育とはこれからの世界を幸せに生きていく力を身につけさせるのが目標だと思う。とても勇気を頂いた。
- 福原先生の話に共感・感銘した。科目、文理系統という学習領域の枠を越えた独自の授業、コンピテンシーの育成を通して生徒は今何を学ぶべきなのか非常に考えさせられた。大変有意義な時間だった。
- 福原先生や平井先生の話は、学校現場にありがちな既存のやり方や考え方に縛られたものではなかったため、新しい価値観でドラスティックに改革を必要とする意識を持つことができた。
- 福原先生の話が、力強く講演内容も心に残る内容だった。AIの良さだけではなく、人間の心や努力の大切さを学ばせて頂いた。未来に求められる想像力、ビジョンの必要性を改めて感じた。話を聞くことができ本当に良かったと思う内容だった。
- 本校では特色教育と呼ぶことができる内容をまだまだ実践できていないので、本日の他校の実践例は刺激になった。学校に戻ったら、本校管理職とも情報共有をしたい。
- 実践発表では、各学校の取り組みを知ることができ、参考になった。
- とても素晴らしい取り組みや実践発表だった。具体的で、大変、参考・勉強になった。多くのヒントを得た。

◆グローバル教育部会



- 様々な実践例を知る良い機会になった。特に校内だけでなく、外部（地域）との連携の有効性に関心を持った。
- それぞれ色々な想いで実践、研究されている姿が垣間見られて、有意義な会となった。
- 講演Ⅰが興味深い。秋田は鳥取との類似点（高齢化、人口減少等）も多く、学ぶことが多かった。
- 丑田氏の講演は非常に興味深い点があった。本校の地域課題や西日本の地域課題に生徒がコミットしている。共通する取り組みも多くあり、整理する柱を頂くことができた。
- 丑田氏の講演は、(個人的ではあるが)今まさに東京の某専門学校と交流し取り組んでいることと一致する部分が多くあり、興味深く拝聴した。
- 丑田氏の話が興味深く、最後まで楽しんで聞かせて頂いた。恥ずかしながら、今回初めて「グローバル」という言葉を知り、「廃校オフィス」「朝市プラス」や小学校の枠を越えての地域とのコミュニケーション（小学校づくり）の在り方等にひきこまれた。
- 丑田氏の講演は、地元秋田に住んでいる者としても、知らなかった部分も多く、また他県との繋がりを考える、とても良い内容だった。機会があれば、もっと詳しく話を聴きたい。
- 丑田氏の講演はトランスローカル、ハイブリッドスクーリングなど、様々な含蓄のある内容だった。「内山節さん」の教え方をもう少し聴きたかった。
- 丑田氏の話はとても参考になった。都市部にいる人たちではなく、地方にいる私たちだからこそできることや持てる視点があると思った。教育関係のことは決して教員だけに課されているものではないからこそ、幅広い活動があるべきだと感じた。
- グローバルリーダーを育成するという使命が課せられているのだと思った。また、ローカルの課題は他の地域の課題でもある可能性や、ローカルの課題はグローバル社会と密接に関わっていることを生徒たちに伝え、共に考える機会を設けていく必要があると感じた。総合的な探求の時間が各科目を横断的に応用できるとよい。
- グローバルとローカル、双方の見方を融合させながら、事業を展開されている丑田氏の話に非常に感銘を受けた。
- 「学びを創り世界に開く」が大切であると感じた。やはり学校図書館が地域に開くことであると感じた。「グローバルリーダーが英語だけではない」は良かったのではないかな。知識や考えを得て判断できることが大切だと考えた。
- 佐藤健公先生の話伺い、大学生の活動が素晴らしいと思った。将来のリーダーを育成することはもちろん、高校生にとっては主体的に学んでいく良い機会になっていると感じた。
- 佐藤健公先生の秋田南高校での取り組みが非常に興味深かった。職場の働き方改革も含め、本校でも参考にさせて頂きたい。SWOT分析を本校でも考えてみたい。
- 大学生の話も聞くことができ、具体的な取り組みが分かり非常に良かった。岩崎先生の実践発表における「留学すれば英語ができるようになる??」の分析がとても具体的だった。
- 佐藤氏並びに学生によるプレゼン、AIUとりわけFROMPROJECT秋田の実態は興味深い。
- グローバルという単語が今後の探求活動へのつながり、そして佐藤健公先生ご自身が体験されたことから、今後の生徒育成についての知識を頂くことができた。
- 県立秋田南高校の働き方改革は大変参考になった。本校に還元できればと思う。「ふろぷろ秋田」のようなものが、八戸にもあればと強く感じた。
- 国際教養大学で活躍している学生になれるような指導はどうすれば良いのだろうか考えさせられる部会だった。多様化する社会に対応できる生徒の育成に必要なことは、まず教師自身に対応できる力を鍛えることが求められていると感じた。
- 講演中の「ふろぷろ秋田」については継続、今後も引き継ぎ、関わった方々は皆さんますます世界で発展、飛躍されるだろうと思う。立ち上げ等に関して若さとパワーを感じた。
- 一言にグローバルといっても、それぞれの学校に合った様々な取り組みがあり良い刺激になった。
- 実践発表では、留学前指導について、生徒の感想等も知ることができてよかった。
- 岩崎先生の発表の出発前教育で「日本文化」をどのように教えるか言及して欲しい。
- 常盤木学園高校の海外派遣の在り方がダイナミックで、また、高い目標設定と到達度に驚いた。
- 岩崎先生の留学前指導については本校では留学する生徒がほとんどいないが、参考になった。
- 実践発表Ⅰの留学の現状について、大変興味深い話題だった。本校では留学への取り組みはないが、英検準1級やTOEIC700点以上等、身近なところから取り組ませていきたい。
- 聖霊高校の実践発表で、授業だけでなく「学級日誌も英語で書く」とあったので、やはり日々の活動の積み重ねで力がつくのだろうと思った。

◇今回のプログラムで活用したい内容

全体集会（記念講演）

- 国際教養（リベラルアーツ）の視点をカリキュラムや学校行事に入れていきたい。

全体集会（報告）

- 著作権についての扱い

私学経営部会（講演Ⅰ）

- 「才能を集める」という考え方を入学試験等に生かすことができないか検討してみたい。
- 今村先生の話は大変インパクトがあった。本校も多様なグローバルを目指していくことを考えて、色々と勉強になり、思い切った取り組みをしていきたい。
- 本校独自のリベラルアーツを作る！

私学経営部会（講演Ⅱ）

- 学校のブランディングの在り方。危機管理のためのチェックリスト。
- 毎年、震災・防災教育を2泊3日で被災地に訪れているが、その内容をより深化させるヒントを得た。
- マニュアルの見直しと教職員間のコミュニケーション。
- 学校組織（危機対応）を改めて考え直すべきであると思った。
- 小田氏の話で危機意識の必要性を強く感じ、取り組みを強化したい。
- 大川小学校、戸倉小学校の事例から組織づくりの在り方、意見の言える組織づくりを考えさせられた。

私学経営部会（パネル・ディスカッション）

- ループブックも色々あるが、修道中高のものをよく見せてもらい、本校版を作りたい。
- タブレット導入における効果的なPR。
- 各高校の先生方による自校の紹介 今後の生徒募集に活かしたい。
- 私学経営部会（その他）
- コロナへ対応について、しばらく会議開催ができていなかったもので、開催する際の参考になった。
- 様々な講演から得られた知見を教員に伝えたい。

教育課程（講演・ワークショップ）

- 建学の精神、目標をより具体的なものとし、全職員が共有することで学校・教員・生徒により良いものにしていきたい。
- 生徒の活動の評価方法をもう一度考えてみたい。
- 学校全体で向かう方向を一致させること。
- 建学の精神を変更するという内容は素晴らしい。（本法人では評価されないと思うが）
- カリキュラムマネジメントや実践例、評価の観点についてなど新しいまたは改めて、考えさせられることばかりだった。しっかりと自身でインプットし、この後の学校生活でフィードバック、アウトプットしていきたい。
- 教育目標の具体化、見える化ができていない。カリキュラムマネジメントを進めていく際の参考にしたい。
- 建学の精神の読み直し。生徒の実態に合わせたカリキュラムマネジメント全体的な研修等。

教育課程（講演）

- 本校のカリキュラムマネジメント作成に活かしていきたい。
- 生徒への知の欲求を高めるだけでなく、教員の伸長にも役立つと考えた。
- これまでは教科書の内容を理解させる授業内容中心であったが、使える知識、考える力、態度をつけさせることが、これから求められることと気付かされた。具体的な方法の話もあり、自分でも調べたり授業の組み立て方を考え直したりする機会になった。
- 校訓を分かりやすく、目標をはっきりとさせ、それをカリキュラムと連携させることを今後さらにやっていきたい。
- 教えて頂いた授業やカリキュラムマネジメントで考えるべき点を実践したい。

教育課程（実践発表Ⅰ）

- 広範囲に掘り下げることで他教科との関わりが見つかることに気づいた。チャレンジしたい。
- 他教科と連携した授業の工夫。カリキュラムマネジメントの工夫。

教育課程（実践発表Ⅱ）

- ノースアジア大学明桜高等学校での補習など、ぜひ本校でも実施したい。
- 県外出身者が1割ということ法人に伝え、相談したい。

特色教育（基調講演）

- 学力の向上とともにコンピテンシー能力の育成。
- 文理融合と教科横断型授業の実践。
- 教員の意識改革のために教員にも聴かせたい。
- 25あるコンピテンシーの内、5つのコンピテンシーに絞って実践していくことで、各私立校の特色ある教育のきっかけになると感じた。
- 特色ある教育を実践していくためには、思い込みを捨て、削るべきところは削っていかねばならないという点。新しいものを取り入れる上でとても大切だと感じた。
- これからの社会に必要な人材の育成として、知識を覚えるだけでなく活用する場面として、文系・理系に関係なく、現代社会に求められる能力を実体験できる機会を持たせる。（1教科担任では実施が難しいので、複数教員が立ち会い、問題解決する授業。）
- 教科を越えた授業に関して、自身も他教科と連携した授業を行いたい。（来年度に向けて実施したい。）

特色教育（実践発表Ⅰ）

- 学校改革のプロセスを少しでも活かしていきたい。
- カリキュラムマネジメント。学校を見学したい！

特色教育（実践発表Ⅱ）

- 総合研究コースの設定と特色ある補習授業の在り方について。できるかどうか分からないが、参考になった。
- PBLの総合探求の在り方を検討したい。
- 総合的探求の時間が参考になった。テーマが良い。

特色教育（実践発表Ⅲ）

- ICT活用、声かけ、自由度が高い、子どもたちに行動させたい。
- 「先生というクラス唯一の存在と人間関係を作りたい。」というシートに対して、生徒一人一人と話した内容や思い出を振り返るシートを作っても良い。

グローバル教育（講演Ⅰ）

- ローカルエリアでグローバルな関わりを持つことが生徒の内面世界を豊かにし、新しい行動を生み出していくという事実に大変、関心を持った。
- タクトピアには中高向けのプログラムもあるとのことだったので面白そうである。
- 創発、人と人とのつながり、特に人々の価値観の違いから学び取るという考え方から、もっと人それぞれの経験談の中に、たくさんの学び取れる機会があると感じた。
- 学ぶ側の気持ちの持ち方、導き方として、「アントレプレナーシップ」が印象に残った。
- 本校生徒にも、生き方の多様性、生命学習等の話、子どもから大人まで学び続ける時代へとといった内容で講演して頂きたい。
- 過疎、人口減少といったマイナス要因を反対に活かして、アントレプレナーシップを育てる！素晴らしい着目だと思った。
- 丑田氏のローカルの話の部分を形にしていく取り組みを構築していく必要があると感じた。
- 本校でも交換留学をはじめ、他の留学も促進していこうと考えているため大変参考になった。
- 中学段階でより地域住民と連携した地域社会への貢献に関する取り組み。

グローバル教育（実践発表Ⅰ）

- 留学を希望する生徒が毎年のように出てきているので、その際にアドバイスできるよう、授業に取り入れていきたい。
- 本校の留学制度について。保護者への説明等。
- 短期留学と長期留学の準備。

グローバル教育（講演Ⅱ）

- 働き方改革について学校にも紹介したい。
- プロジェクト学習の必要性、学びをつくる。

- グローバルリーダーについて生徒と学ぶ時間を持ちたい。課題探求をすることがグローバルの問題解決の足掛かりになること、PBLの姿勢が生涯必要であり、それにより自分も他者も幸福になれることを共に味わうことができればと思う。
 - フロムプロジェクトの活動について、生徒に紹介したい。
 - グローバル教育を学校で実践していく上で大切な学校の組織の変革に必要な視点。現場で出来ること、組織が行動しなければ実践が不可であることが分かり参考になった。
 - 国際教養大学の姿勢、考え方。
 - ともするとグローバル化に重点を置きがちであるが、ローカルも大切にしているグローバルという視点での教育も取り入れたい。
- グローバル教育（実践発表Ⅱ）**
- 普段から学級日誌等も英語で記入させる等、授業以外にも英語を日常にするヒントを得られた。
 - 他校の国際コースが3年間、何を行っているか参考になった。日本文化について、冊子を作らせるのは、留学前にやる取り組みとして本校でも活用できそう。
- グローバル教育（全体会）**
- ICT教育をもっと活用したいと感じた。「面白そう」と感じたアイデアを学習指導に取り入れてやってみることが大切だ。

◇要望

全体集会

- リベラルアーツ的内容でも良い。(記念講演)
- 今後も時代にあった必要と思われる情報を提供頂きたい。
- 普通の学校での仕事の中でこうした情報が入ってこないことは良くない状況である。現場に情報が入ってくるようにしてほしい。
- グローバル人材の説明をもう少し多く聞きたい。
- 各大学が教養課程を削減する現況の中、リベラルアーツ教育における教養の行方を追求する話も伺いたい。
- 記念講演の内容に関して、国際情勢への理解が深まったが、国内の課題、世界との比較をもう少し言及してほしい。
- パワーポイントの字が小さくて見づらかったので、スライド資料を配付してほしい。
- 吉田先生の話は、もう少し時間があっても良い。
- 来年度も中川先生の話聞かせて頂きたい。可能であれば、出したアイデアを実際に学校で行うことができるようにする方法(伺いの書き方など)を教えてください。
- 秋田の私学の状況についての話も伺いたい。
- 動画で頂くことはできないだろうか。
- 今回、資料の中に様々な研修会の案内があった。遠方だと参加が難しいので、オンライン化できないか。
- 机がないとメモをするのに大変だったり、冊子を落とす人が多数いたりするため、要改善。キャパシティの関係もあるだろうが、人数制限するなど工夫をして欲しい。
- 席がいつも後ろ側の奥側なので、前後左右に席を順番回しで指定できたら有難い。
- 休憩時間にももう少し時間に余裕が欲しい。
- 入場の際の健康チェックをもっと厳しくしてほしい。
- 年々、大会の「おもてなし」が充実してきている。開催権の先生方のご負担軽減、世間とのギャップを考えて、少しずつ「おもてなし」の縮小を考えることも大切だ。

私学経営部会

- 今村氏の具体的取り組みをもう少し話して頂きたい。

教育課程部会

- 高校単体の本校、または他の環境(高等教育学校、大学)がない学校の実践発表も工夫を聞いてみたい。
- グループワークをする際は名簿順にすると、同一県内の先生と重複するので、座席配置を事前に

考えてほしい。他県の先生と行うようにして交流の機会を作る方が発展的だと思う。

- カリキュラムマネジメントの話は理論の部分で参考になったが、難解な部分が多かった。もう少しコンパクトにまとめて頂きたい。
- 特色あるカリキュラムを構築するために、教員が考えるのはもちろんだが、経営者側も同じ思いを持って頂かないと前に進まない。全ての経営に携わる側の方も参加して頂きたい。

特色教育部会

- コロナの影響で zoom での発表があったようだが、可能であれば、他部会の内容も映像で見たい。
- 実践発表Ⅲにおいては Power Point 資料が欲しい。
- 1つだけでなく、2つ位、部会を体験できればよい。
- 教員の自己研鑽が必要だと思うので、方法やアプローチ、内容についての話が聞きたい。

グローバル教育部会

- もっと具体的な各校の取り組みを知りたい（特に海外研修、SDGs 系の取り組み）。
- 秋田のみならず、各地方で実施している地域の取り組みをシェアしてほしい。
- グローバルということで、ほとんどの講演・実践発表が主に英語圏外国への留学がメインに据えられ、いわゆる「内地留学」についての言及がなかったが（丑田氏は例外）、どうなのだろうか。よく分からないが、仮にローカルと標榜しても、外国留学がメインになってしまうのだろうか。
- 「グローバル＝英語」ではないという話もあったので、実務報告では英語以外のものを取り入れて発表の機会を設けてもよいと思う。
- 参加人数が 60 名弱なので、講義型ではなく、参加型にすると良い。
- 全ての講演、発表のレジュメを配付して欲しい。スクリーンの文字が細かいと後方からではほとんど見えない状況だった。
- 実際に実践している授業は、行事、活動例を紹介して頂きたい。理念だけでは、実際に学校に戻って何を実践すべきかイメージしづらい。
- 参加者のほとんどが教諭なので、来週からすぐに使えるような実践的なものを学びたい。
- 実際の授業の様子や具体的な雰囲気が分かる映像があればお願いしたい。
- 秋田県外参加者としては、もう少し秋田県五城目町のイメージを理解するための VTR が欲しい。
- パワーポイントはもっと見やすく、資料として全ページが欲しい。Zoom での提示は見えない。
- 講演Ⅰの資料も欲しい。
- 実践発表Ⅱの資料を事前に欲しかった。
- 研究報告と実践報告では、やはり近年の動向を踏まえて頂きたい。
- 企業関係者が講師として今の時代に相応しいを改めて思う。

◇新型コロナウイルス感染拡大に伴う休校、オンライン授業等で課題になったこと、研修が必要と感じられたこと

- 各教科の先生方がオンラインで色々な工夫をされて授業を行っていると思うので、その情報交換ができる研修会・授業研究会ができるとよい。
- 著作権の問題（指導者用デジタル教科書など）
- 危機管理、リスクマネジメント等、様々な課題が浮き彫りになった。「生徒ファースト」の中で、どう対応できたのか、何が不足し、何が適切なものであったか、立て直しが必要だと思う。また、メンタル面の検討課題もある。
- ICT 関連の研修は、教員による状況で違いがあるため、相当やらなければいけないと感じている。また、SNS による誹謗中傷に関して動き出してきている感があるので行政レベルでもっと加速して欲しい。コロナは誰でもかかりうるので、かかった人が悪いのではないよう、情報発信を国の上の方から発信願いたい。
- Wifi の施設を完備していたつもりだったが、いざ皆で一斉に使うとスムーズな対応ができず困った。特に Zoom など画像でのやりとりが上手いかない時があった。いざという時のリモートの様々な事例などが学べるとよい。
- どの機材を用いることが学校にとってベストか、オンライン授業を行うにあたっての教員研修（情報共有）。

- タブレット等の端末の整備不足。
- ICT の教育活用は学園それぞれであり、具体的な活用例は参考となる。
- オンライン授業を含む、新しい教育形態を特別なものでなく、従来の方法と併存させながら当たり前のものとして取り入れ、恒常的に行っていく必要があることを教員が自覚できるように導入するための研修等の確立。
- さらなる ICT 教育を進めていきたい。
- 会津北峯では、特進は「スタディサプリ」、総進と機械は「すらら」のパスワードがあるので、家でネットが使用できる生徒はよかった。2 学期より特進 1,2 年生にパソコンを無償で貸与して zoom ができるようにしたい。
- 教員研修。できない先生方を取り残さないこと。
- 生徒の家庭の Wifi 環境（かなりの GB 消費のため）／生徒個人の PC、タブレットの確保／学校（教員）のオンライン授業、動画配信のスキル。
- とりわけ ICT 教材の活用と応用（なかでもズーム、オンライン授業の取り組み全般）について。
- 新型コロナウイルス感染拡大に伴う休校による影響がほとんどなかったものの、今後、同様の状況が起きた場合のため、生徒の自宅のオンライン環境を把握する必要があると感じている。支援方法についても検討が必要である。
- 対応が学校判断、学校任せにされていることが良い面もあれば、課題であるかと思う。本校では、一人一台 iPad を持たせられていないので、今後導入し活用していきたい。教員側に ICT 使用の技術的な差があり、研修が必要。
- 岩手にある本校は、（県立と合わせて）特に休校も最小限になり、普通に授業、学校行事も行った。そのため、オンライン授業などもしていないが、今後必要になると思われる。そのために財源の確保が難しい本校のような学校が実施するための方法があれば考えて欲しい。施設設備もままならない中で今後が心配である。
- 業者に大きく依存せず、ICT に取り組んでいる学校の実践例があると参考になる。
- Study support（リクルート）、Classi(ベネッセ)を併用しているが、利用する生徒側、操作する教員側、ともにこれまでの利用率が高くなく、使い方をマスターするには良い機会だったが、課題が出しっ放しで、提出率をチェックするだけで手一杯でシステムティックに使いこなせていなかった。授業時間としてのカウントはしていない。
- オンライン授業を行う上でのスキル（動画編集、zoom の使用方法）の研修。
- オンライン授業が行われたが、特進コースのみであり、ICT 機器や環境の整備が進んでいない。ICT 機器の双方向性の活用について言葉だけが先行し、実際にできたか分からない。
- zoom を用いての授業を行ったが、時間の制限や教職員の理解の格差が大きかった。
- 全職員対象の ICT 機器を活用した授業の研修を定期的に行うようになった。
- オンライン授業での効果測定、どこまで定着し生徒の能力開発につながったかが課題になっている。今後、オンライン授業を進める上で、課題の解決が必要だ。
- オンライン授業できる環境整備、利用例をふまえた研修。
- オンライン授業の実施において、①アプリ、タブレットの使い方を誰にでも分かりやすく、②情報漏洩しないよう、③トラブルが起きないように、どのようなことに留意したらよいか。
- ICT を行う上での足並みがそろわない、ベテラン教師の腰が重い、今後 GIGA をスタートさせた時の教員間の温度差。
- オンラインのよる対応をしようとしたが、生徒の Wifi 環境や機材の整備状況に差があり結局できなかった。今後は ICT 機器の導入が進む予定なので、ICT による教育法の研修などがあるとよい。
- 家庭にインターネット環境がない生徒が若干数おり、一律でのオンライン授業が困難だった。
- 各家庭の Wifi 環境が把握できていなかったことが一番大変だった。本校では 2025 年から一人一台 PC を計画していたため、準備途中だった。
- オンライン授業の実践例紹介。オンライン＋学校対面（協働）のハイブリッド型の実践例紹介。
- オンライン授業の進め方と評価方法について。
- スタディサプリ導入についてであるが、本校は学力層の幅が広く、いわゆる下位層には難しい内容である。
- 全職員がオンラインをできる訳ではない。また、授業の予習なら 2 時間程度とればいいが、オンラインの準備は 2 倍位かかるだろう。その辺りが課題だ。
- 本校の ICT 環境の遅れを痛感した。

- オンライン機器を使用できない年配の先生方を対象とした研修の機会を持たなければならなかった。各発表を聞き、本校の遅れを痛感させられた。
- zoom 等が誰でも（生徒・教員）当たり前に使えるように準備しておくこと。
- オンラインをするために、タブレットや機器を利用する上での扱い方。
- 生徒の ICT 環境のばらつき。授業を同時配信する ICT 環境の不備。教員のスキル不足、授業動画の配信により教員の實力差が露呈。入学式、卒業式をはじめ、全て 1 から考えなければならぬ大変さ。
- 生徒のエネルギーを発散できる場や機会が少なくなっており、心のケアの必要性を感じている。
- 専任教員は研修の機会があるが、非常勤講師や 4 月より着任した新任教職員への研修が不十分であった。
- 労務管理の難しさ。
- 4 月の新学期よりオンライン授業を開始したため、新入生(中 1・高 1)の自宅へ学校に納品されていた PC を先生方と事務とで荷造りし発送した。
- ネットワークの環境整備。端末の不足。
- オンライン環境の整備に着手できないことが課題。コスト面やオンライン関係に抵抗のある先生に必要性和有用性をどう訴えていけばよいか分からない。
- 本校はオンライン授業に向けて全生徒に対してタブレット PC 導入がようやく整ったところだが、その利用に関する研修を積んでいく必要を感じている。本日の発表を大いに参考にしたい。
- 感染の少なかった地域で、あまりオンライン化が進まなかった。次に休校処置になった時の対応に危機感がある。
- オンライン授業の実践はしていないが、様々な事案を紹介して欲しい。
- オンライン授業に詳しい教員が少なく、経験もほとんどないので、もっと機会を持ち、慣れる必要がある。どういう授業が効果的なのか、実験的な研修や検証できる研修が必要だ。
- 現場の通信設備、機器の準備、人材の育成が全然追いついていない。
- 教員の ICT 活用力研修の必要性。ICT 教育に対して教員の研修が足りない。指導力を向上させないといけない。
- ICT 環境が整備されていない。オンライン授業ができる環境が整っていない。ICT 機器の設備、学校や生徒のネットワーク環境を整えていく必要がある。
- 体育祭や文化祭などの学校行事の中止が生徒や教職員にどのような影響を与えているか。各校において、各種行事の取りやめ、実施について、どのような話し合いがなされているのか、また、実施したケースでは、どのような感染対策を取ったのかについて学びたい。
- 感染症対策に対する知識を持って行動する必要がある。
- 教員間、生徒間のデジタルデバイス。
- 修学旅行について現在も検討中だが、保護者への影響も含めて、どのように実施しているのか情報が欲しい。
- オンライン授業を開講するには至らず、classi を活用するのみだった。秋田は休校期間が約 2 ヶ月(3 月、4 月中旬～5 月中旬)で、課題(紙ベース)配布がメインだった。いかに他国・他県に比べ、整備が遅かったか痛感した。いつ休校になっても対応できるように、双方向で授業できる体制を整えていく必要がある。
- 休校期間中オンライン授業で授業をした場合、先生の実際の授業内容（オンライン用にどう組み立てるか）、PC はどのように用意するか、スマホがない生徒への対応、セキュリティの問題など、細かい点を知りたいと思っていたが、オンライン授業を実施する前に休校期間が終わり、話がもうなくなってしまった。チャンスはなくなったが研修は必要だ。
- 休校中、オンライン授業に向けて生徒たちのネット環境について調査したが、調査止まりで機能しなかった。職員研修でオンライン授業について学びたい。
- オンラインで zoom を活用するためには、法人契約をしなければ大人数での使用も難しく、またカメラ付きのパソコンも少なく、準備不足であったため、YouTube を用いて限定配信などを活用した。幸い生徒はネットを通じた学習に慣れていたが、元々学習意欲が低い生徒は一切参加がなく、アナログ的に 1 人 1 人、毎日のように電話することとなった。学力差が非常に広がった。
- 教職員の熱の異なり（特に高年齢の方々）。
- 生徒のオンライン環境がどのようなものか把握することが後になってしまい、学校、教員が準備することばかり考えてしまって、結果的に生徒のためにならない事例があった。

- 突然の休校通達に対する準備期間がなかったこと。
- ついていけない、早く前に戻って欲しい、というのは40代以上の教員の世論でしょうが、学校が新しい時代が変わっていくという意味で、この世代の教員の視野を広げ、自らの経験をぜひ若い世代と活かしていきたい！と思う研修が必要だ。
- 運動部寮生の3密。もしクラスターが発生した時のゾーニング等の危機管理対応。
- 校内、校外で情報を収集しながら取り組んできた。未知のものに関する教職員の姿勢次第。別件だが、GIGAスクールに関する高校、私学の扱いが気になる。
- 中川所長の話の通り、変革をよしとしない（恐れる）教員をどうしていくかが、これからの課題。本校はハード面よりもソフト面に課題がある。その改善のために研修等が必要。
- 専任教員、非常勤講師も含め全教職員で双方向のオンライン授業のために研修を積み重ね、ゴールデンウィーク明けから実施することができた。全て「生徒のために」という想いで！
- リモート授業や授業動画の作り方、通信機器の扱い、ソフトウェアの扱いができる人材を増やすこと。パソコンメンテナンス等サポート体制の充実が急務と感じた。
- タブレットを特進コースの生徒には全員与えられたが、それ以外の生徒の分が足りず不公平感があった。
- zoom を用いて一部の遠隔授業をしているが、タブレット機器や講師の先生とのやり取りについては、生徒だけではできないので、教員が時間を割いて補助している。教員の負担にもなっているので、生徒たち自身がICTやタブレットを使いこなせるための研修をして欲しい。

参加者数

総参加者数 334 名

参加者数（部会別・都道府県別）

◆部会別参加者数

No.	部会名	参加者数	No.	部会名	参加者数
1	私学経営	119	4	グローバル教育	56
2	教育課程	71	5	全体集会のみ	23
3	特色教育	65			
				計	334

◆都道府県別参加者数

No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数	No.	都道府県	参加者数
1	北海道	5	17	石川	3	33	岡山	1
2	青森	12	18	福井	1	34	広島	2
3	岩手	20	19	山梨	1	35	山口	0
4	宮城	3	20	長野	1	36	徳島	0
5	秋田	81	21	岐阜	2	37	香川	0
6	山形	28	22	静岡	3	38	愛媛	0
7	福島	18	23	愛知	10	39	高知	0
8	新潟	11	24	三重	1	40	福岡	9
9	茨城	1	25	滋賀	2	41	佐賀	3
10	栃木	16	26	京都	13	42	長崎	5
11	群馬	4	27	大阪	10	43	熊本	1
12	埼玉	3	28	兵庫	5	44	大分	2
13	千葉	6	29	奈良	1	45	宮崎	4
14	神奈川	9	30	和歌山	0	46	鹿児島	1
15	東京	22	31	鳥取	5	47	沖縄	0
16	富山	0	32	島根	9			
				計				334

開催地・研究目標一覽

回数	開催地	主会場	会期	参加人員
1	東京都	宝仙学園中学高等学校	昭和27年4月27日～29日	185
2	東京都	女子聖学院中学高等学校	昭和28年11月20日～23日	235
3	東京都	早稲田大学	昭和29年11月20日～23日	283
4	東京都	東洋大学	昭和30年11月11日～14日	402
5	京都市	立命館大学	昭和31年11月9日～12日	995
6	東京都	明治大学	昭和32年11月22日～25日	679
7	名古屋	椋山学園大学	昭和33年10月3日～6日	857
8	東京都	法政大学	昭和34年11月20日～23日	846
9	札幌市	北海道学園大学	昭和35年8月20日～23日	958
10	東京都	日本大学	昭和36年11月22日～25日	954
11	横浜市	神奈川大学	昭和37年11月22日～25日	841
12	広島市	進徳女子高等学校	昭和38年11月12日～15日	993
13	東京都	学習院大学	昭和39年11月20日～23日	612
14	福岡県	中村学園女子高等学校	昭和40年11月21日～24日	1,100
15	東京都	明星大学・明星学苑	昭和41年11月3日～6日	750
16	仙台市	東北大学	昭和42年11月5日～8日	1,172
17	東京都	文化女子大学	昭和43年11月22日～25日	1,074
18	大阪市	相愛学園	昭和44年11月15日～18日	2,294
19	宇都宮市	作新学院	昭和45年11月11日～13日	382
20	西宮市	武庫川学院	昭和46年11月11日～13日	2,513
21	東京都	昭和女子大学	昭和47年11月23日～25日	764
22	静岡市	静岡雙葉学園	昭和49年11月7日～9日	926
23	札幌市	札幌市民会館	昭和50年10月2日～4日	978
24	広島市	広島市公会堂	昭和51年10月26日～28日	1,216
25	東京都	千代田女学院中学高等学校	昭和52年11月16日～18日	1,054
26	福岡市	福岡市民会館	昭和53年11月7日～9日	1,714
27	埼玉県	埼玉会館	昭和54年11月20日～22日	1,043
28	仙台市	仙台白百合学園中学高等学校	昭和55年10月22日～24日	1,533
29	京都市	KBS京都放送会館	昭和56年11月12日～14日	1,923
30	東京都	学習院記念会館	昭和57年11月17日～19日	1,370
31	福井市	金井学園	昭和58年10月26日～28日	992
32	札幌市	札幌市民会館	昭和59年9月26日～28日	1,040
33	山口市	山口市市民会館	昭和60年10月31日～11月2日	1,210
34	福岡市	福岡市民会館	昭和61年11月12日～14日	1,696
35	千葉県ほか4市	千葉県文化会館	昭和62年11月11日～13日	1,867
36	新潟市	新潟県民会館	昭和63年10月19日～21日	1,651
37	大阪市ほか2市	大阪国際交流センター	平成元年10月25日～27日	2,530
38	東京都	学習院記念会館	平成2年10月24日～26日	1,773
39	愛知県	愛知県勤労会館	平成3年10月23日～25日	1,473
40	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成4年9月30日～10月2日	1,123
41	岡山市	岡山シンフォニーホール	平成5年10月27日～29日	1,306
42	熊本県	熊本市市民会館	平成6年10月26日～28日	1,170
43	神奈川県	国立横浜国際会議場	平成7年10月25日～27日	2,134
44	山形県	米沢女子高等学校	平成8年10月16日～18日	829
45	京都市	京都会館第一ホール	平成9年11月12日～14日	1,222
46	東京都	東京国際フォーラム	平成10年11月4日～6日	1,422

回数	研究目標
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討
9	私学教育の将来と教育課程改訂
10	中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議
11	日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて―
12	私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう
13	中等教育革新のために
14	私学における教育はいかにしたらその実効を上げることが出来るか
15	私学教育の自由とその限界
16	私学教育の特性を発揮し、その内容の質的転換を図る
17	魅力ある私学中高教育の推進のために
18	教育の現代化に適応する私学のあり方
19	新教育課程の私学教育における展開
20	1970年代の私学教育の展開を如何にすべきか
21	1970年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践―
22	激動期における私学教育の原点を求めて
23	昭和50年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる―
24	創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために―
25	教育の転換期に立って私学教育を考える―新教育課程をめぐる今日的課題―
26	新教育課程への移行と実践―私学教育の独自性と充実をはかる―
27	新教育課程実践の道―建学の精神と教師の役割―
28	私学の使命と特色教育―新教育課程の展開―
29	今日の中等教育における私学の役割
30	より豊かな私学教育の創造を
31	次代を担う私学教育の独自性と公共性
32	次代を担う私学教育の充実と発展
33	明日をひらく私学教育―私学の原点に立って―
34	豊かな私学教育の展開
35	国際化と近代化を志向する私学教育の発展
36	時代に対応する魅力ある私学教育を求めて
37	21世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて
38	社会の期待に応える私学教育の推進
39	豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進
40	新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして
41	たしかな私学教育をめざして
42	活力ある私学のあり方を探る
43	21世紀に向かって躍進する私学教育
44	教育改造への試み
45	新しい時代を拓く私学教育の創造と発展
46	民間活力としての私学教育を

回数	開催地	主会場	会期	参加人員	
47	静岡県	静岡市	静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)	平成11年11月10日～12日	1,042
48	札幌市	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成12年10月4日～6日	862
49	徳島市	徳島市	徳島文理大学徳島校	平成13年11月15日～17日	827
50	宮崎市	宮崎市	宮崎観光ホテル	平成14年11月6日～8日	928
51	水戸市・土浦市	茨城県	茨城県立県民文化センター	平成15年10月29日～31日	1,590
52	福島県	郡山市	郡山市ホテルハマツ	平成16年10月28日～29日	774
53	神戸市ほか3市	神戸市	神戸ポートピアホテル	平成17年11月10日～11日	1,383
54	東京都	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成18年11月9日～10日	1,354
55	石川県	石川県	石川県立音楽堂コンサートホール	平成19年10月25日～26日	791
56	札幌市	札幌市	札幌ガーデンパレス	平成20年10月9日～10日	722
57	松江市・米子市	島根県	島根県民会館	平成21年10月22日～23日	505
58	佐世保市	佐世保市	ウインズ佐世保ゲルックホール	平成22年10月14日～15日	621
59	高崎市	高崎市	群馬音楽センター	平成23年10月27日～28日	437
60	盛岡市	盛岡市	ホテルメトロポリタン盛岡 NEWWING	平成24年10月11日～12日	501
61	大阪市	大阪市	シェラトン都ホテル大阪	平成25年10月24日～25日	621
62	東京都	東京都	新高輪プリンスホテル国際館パミール	平成26年10月16日～17日	1,023
63	長野市	長野市	ホテル国際21	平成27年10月29日～30日	592
64	札幌市	札幌市	京王プラザホテル札幌	平成28年10月27日～28日	587
65	松山市	松山市	松山全日空ホテル	平成29年10月19日～20日	542
66	鹿児島市	鹿児島市	城山ホテル鹿児島	平成30年10月25日～26日	681
67	宇都宮市	宇都宮市	ホテル東日本宇都宮	令和元年10月17日～18日	603
68	秋田市	秋田市	秋田キャッスルホテル	令和2年10月22日～23日	334
69	京都府	京都市	国立京都国際会館	令和3年10月21日～22日	(600)

回数	研究目標
47	21世紀の私学教育の充実を目指して
48	生徒と教師のロマンを実現する私学教育
49	新時代の私学教育－中国・四国からの発信－
50	感性豊かな人間を育てる私学教育
51	明日の私学教育を求めて－伝統と創造－
52	特色ある私学教育を求めて－建学の精神と国際化－
53	魅力ある私学教育の創造を目指して
54	未来を担う人材育成を私学教育
55	特色ある私学教育の創造
56	時代を見すえ、未来を拓く私学教育
57	これからの人材育成をめざして－悠久の地から私学教育の未来を考える
58	時代を創造する人材の育成をめざして－私学教育の挑戦－
59	日本の未来を拓く私学教育
60	未来を拓く私学教育～人間力を養い人格の完成を目指す～
61	私学教育の魅力を探る～夢探し夢実現を目指して～
62	21世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～
63	新しい時代を担う魅力ある私学教育～安心と信頼に裏打ちされた私学教育の充実を目指して～
64	今こそ私学～明日への挑戦～
65	時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～
66	新時代に向けたさらなる私学の躍進
67	人間力（コンピテンシー）を高める私学教育
68	新しい時代のリーダーを育てる私学教育
69	世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～

編 集 後 記

全国私学教育研究集会秋田大会のお役目もこの編集後記を書くことで肩の荷を下ろすことができます。この秋田大会は新型コロナに終始悩まされました。緊急事態宣言が全国に出された時、秋田大会は中止かと大変心配しました。秋田県内では全国大会なんてとんでもないと言う雰囲気でしたが、「今こそ全国の私立学校が一丸となって、新たな局面を迎えた教育を前に進めよう」という強い声援を頂いたことで、開催にこぎつけました。しかし、コロナ禍の影響は大きく、大会の目玉である記念講演はリモートで行って頂くことになり、私立学校活動紹介もビデオ上映になりました。教育懇談会は初めて着席形式で行うなど計画変更が山積でした。

感染症防止という前代未聞の対策を迫られる中、日本私学教育研究所の方々が綿密に準備して下さったおかげで、終始安全に開催できましたことは誠に奇跡だと思いました。他方、コロナ禍でどれだけの先生方が来て頂けるか心配でしたが、全国の私学から 334 名の先生方にご参加頂きまして安堵いたしました。ご参加頂いた全国の先生方には、心から御礼を申し上げます。また、大会が成功裏に終わられたことは日本私学教育研究所の皆様の大変なご苦労と温かなご指導があったからであり、そして大勢の大会関係者および講師の先生方にご尽力頂いたおかげであります。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

二日間の大会は充実したプログラムにより、研鑽を深めるとともに、今後に繋がる私学人同士の交流の輪を広げる有意義な大会となったことと思います。秋田県の多くの教員も貴重な研修を経験させて頂き誠に感謝に堪えません。

ここに、大会の成果をとりまとめた研究集録ができあがりましたのでお届け致します。今後の学校現場での教育実践に役立てて頂ければ幸いに存じます。運営委員は、おもてなしの心でご対応させて頂きましたが、多々行き届かないところがあったと思います、おわび申し上げます。

来年度、京都大会でお会いできることを楽しみにしております。

令和 2 年度全国私学教育研究集会秋田大会
副実行委員長・全体集会運営委員長 江 畠 治 彦
(秋田県私立中学高等学校協会会長・国学館高等学校校長)

**令和 2 年度
全国私学教育研究集会 秋田大会
研究集録**

印 刷 令和 3 年 3 月

発 行 令和 3 年 3 月

発行人 一般財団法人日本私学教育研究所
所 長 中 川 武 夫

発行所 一般財団法人日本私学教育研究所
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷UNビル 6 階
電話 (03)3222-1621

編 集 一般財団法人日本私学教育研究所
〒102-0073 東京都千代田区九段北 4 丁目 3 番地 8 市ヶ谷UNビル 6 階
電話 (03)3222-1621

本研究集録についての著作権はそれぞれの講師・発表者・報告者等および一般財団法人日本私学教育研究所に帰属します。著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。

